アフガニスタンボランティア
ー国境なき医師団助産師の６ヶ月ー

波多野　環

目次

はじめに
1、アフガニスタンへの道
（1）やっときた派遣
（2）パリでの打ち合わせ
（3）アゼルバイジャン
（4）アフガニスタン入り
2、mission in Afghanistan
（1）引継ぎ
（2）セキュリティルール
（3）スタッフ構成
3、クリニックでの日々
（1）番号を配ると言う診療
（2）血液検査もない検診
（3）妊娠週数の不思議
（4）年齢を知らない女性達
（5）ＴＢＡ
（6）医療知識のない中で
（7）子供事情
（8）家族の中の女性の立場
（9）アフガニスタンのお産（その1）
（10）アフガニスタンのお産（その2）
（11）赤ちゃんにまつわること
（12）ある解任騒動
（13）ナショナルスタッフと外国人スタッフとしての私
（14）働かない人々
（15）国際協力のあり方
（16）幸せのかたち
（17）大病院とのトラブル
（18）女3人集まれば
（19）マタニティの夜は長い
（20）自分にできることできないこと
（21）板ばさみ
（22）訪問診療できますか
（23）クリーナーさんたち
4、アフガニスタンライフ
（1）アフガニスタンの朝の挨拶は長い
（2）アフガニスタン人はとにかくお茶
（3）アフガニスタンの食べ物事情
（4）歌と踊りのアフガニスタン
（5）電気のない冬、ジェネレーターの日々
（6）パンシール渓谷へ
（7）水のないスイミングプール
（8）イーストアレフ
（9）バーミヤンへ行く
（10）ブッダにて思う
（11）ドラゴンバレー
（12）アフガニスタンの恋愛事情（その1）
（13）アフガニスタンの恋愛事情（その2）
（14）半年の間に
（15）ピクニック
（16）ストリートの子供達
（17）アフガニスタンを去る日
終りに

はじめに

今回のアフガニスタンについての活動報告を、このようなかたちで発表すると言うことは考えてはいませんでした。今回初めての派遣で、自分自身どれだけ真実に迫ることができるのか疑問だったからです。ですが私がアフガニスタンで見て感じたことは、実際にアフガニスタンで起きていることであり、伝えるだけの意味のあることのように思えました。

日本では、アフガニスタンで起きた戦争のことはほとんどふりかえられなくなりました。連日イラク問題のニュース一色で、世界各地で多くの紛争が起きていることを私達が知る手段は、ニュースや新聞ではほとんどないでしょう。アフガン空爆、イラク先制攻撃など、日本だってかかわった出来事ですが、日本人のどれだけの人が、自分たちのこととして受け止めることができているかと言うことさえ疑問です。

戦争にいたるまでの過程では、政治的なことが最優先され、そこに暮らす人々の安全や命について論ぜられることはありません。アフガニスタンでも、ピンポイント爆撃という言葉の下で、多くの市民がいわゆる「誤爆」によって命を落としました。「タリバンが崩壊すれば、アフガニスタンにも平和がくる。民主的な国になる。」とういう楽観的なスローガンを抱えてアフガニスタンに攻め込んだものの、未だに平和とは程遠く、民主主義の象徴である選挙を成功させるために躍起になり、アフガンの各地で政府や国連軍と、タリバンの残党、軍閥による衝突がおきています。私がアフガニスタンにいる間に、まるで日常茶飯事のように全国各地で起きている武力衝突の話を聞いていました。

このような政治的な出来事の下で、安全な住居も食べ物もなく、苦しんでいるのは他でもないアフガニスタンの一般の人々です。戦争では、とくに女性や子供、老人と言った社会的に弱い立場にある人達がその影響を受けやすい傾向にあります。戦争が終わってもなお、夫をなくした未亡人は、職もなく道端でその日食べるお金を得るために物乞いをしなければ暮らして行けません。子供も学校に行くこともできず、家計を助けるために絨毯を織ります。戦争で障害を負った兵士は働くこともままならず、精神的に病んで家族もそれをどうすることもできません。戦争はけして終わったものでも、過去のものでもなかったのです。

アフガニスタンには多くのＮＧＯがさまざまな形で援助に入っています。女性や子供に関することは、現在のアフガニスタンではとにかく後回しにされているため、政府も多くをＮＧＯに頼っているような状態です。私が今回参加したＭＳＦ（国境なき医師団）は医療系のＮＧＯのひとつで今回の私の仕事では、特に女性と子供のためのクリニックで分娩病棟の管理という仕事をさせてもらうことができました。ＮＧＯの長所は、面倒くさい議論はさておき、とにかく必要とされている所にすぐに活動をしに行くことができるフットワークの軽さだと思います。ＭＳＦでは独立、公平、中立の立場での活動となりあらゆる政治的な影響も受けないと言うことで、どんなところにでも行って仕事ができると言う利点があります。国際的なＮＧＯで働きたいと思ったのは、自分が日本人である前に１人の人間であるということで、国を背負って働くよりもより自分自身として動けるのではないかと思ったからです。実際に活動をしてみて思ったことは、まさに「継続は力なり」「ローマは一日にしてならず」と言うことでした。私１人が派遣されたところで

何が変わる訳でもなかったと言うことです。何年も地道な活動を続け、団体としてその国の人に受け入れられ、その活動を継続、維持していくことは簡単ではありません。長年その国で働いてきたという信頼感があってこそ、活動も成り立つのです。

私のしてきたことは、２０年にわたるＭＳＦのアフガニスタンでの活動の中でほんの数ヶ月に過ぎません。ですが、アフガニスタンで現地のスタッフと働き、その土地の人々とふれあい、ともに活動してきたということは、けして無意味ではなかったと思います。活動の中で、国際ＮＧＯだからこそ、仲間の中でもいろいろな衝突がありました。現地スタッフと外国人スタッフの間での不理解や、自分の置かれている環境と現地の人の暮らしている環境の違いに罪悪感を持つこともありました。いろいろなことを考えさせられるミッションだったと思っています。個人的にも、日本に帰ってきて当たり前に電気がつくとか、クーラーがあるとか、水道から水が出るとか、そう言うことがものすごく当たり前じゃないように思えて、自分達があたり前に享受していることも、とてもありがたく感じることができました。

アフガニスタンでは、まだまだ多くの人々が援助を必要としています。先日のニュースで、アフガニスタンの成人の3人に2人が鬱状態にあるという記事を目にしました。長年にわたる戦争の恐怖、大切な人の死、仕事もなく明日をも知れない日々を送る多くのアフガニスタンの人々を見ていれば、それも驚くにあたらない状況です。私の活動していたミッションでも、ちょうど女性への心理療法プログラムを拡大しようとしていたところでした。6月2日のＭＳＦオランダチームへの銃撃事件で、今回ＭＳＦはアフガニスタンからの完全撤退を表明しました。間違った認識により、ＮＧＯが政府軍と同一視され、もはやスタッフの安全確保もままならないというのが大きな理由です。情勢の不安定なアフガニスタンで、医療の面でＭＳＦに頼っていたアフガン政府にとってもこれは大きな痛手になったでしょう。ですが、一番心が痛むのは援助を必要としているアフガニスタンの貧しい人々のことです。ＭＳＦにとってもこれは苦渋の決断だっただろうと思います。武力でどれだけのことが解決できるのでしょう。武器を持って人の前に立ち、どれだけのことがちゃんと伝わってくるでしょうか。

私は、できるだけ多くの人に戦争について考えてほしいと思っています。自分が関係ないと思っていることも、実はどこかでつながっていることも多々あると思っています。アフガニスタンはけして遠くの国ではなかったのです。多くの人が感心を持つこと、注目することはとても大切なことです。これから先も私達は、アフガニスタンがどうなっていくのか、イラクがどうなっていくのか、自分達が関わったこととしてみていく義務があると思っています。けして他人事ではないということを、知ってほしいのです。

1　アフガニスタンへの道

（1）やっときた派遣

「波多野さんアフガニスタンに行きませんか？」

国境なき医師団（以下ＭＳＦ)オフィスから電話があったのは、ちょうど青年海外協力隊の説明会を聞きに行った帰り道だった。その時、私はＭＳＦに登録されてから、１年以上派遣を待っている状態だった。派遣の依頼がこないなかで、長崎大学での熱帯医学研修を受けたり、研究所の教授が調査をしているフィールドにお邪魔したりしながら、なんとかしてこの世界で、国際的な医療活動に参加したいと切実に思っていた。何も経験が無いということは自分にとってはかなりもどかしく、とにかく外に出たい一心だった。協力隊の説明を聞きに行ったのも、そういった理由だった。

「アフガニスタンですか？」

その時の私はアフガニスタンに関する知識は、テレビの画面から流れてくる荒涼とした風景と、戦争に疲れ果てた人々の姿くらいのものだった。

「そうです、あちらのほうからオファーがあったものですから。」

「そうですか、わかりました。・・、行きます。」

特に迷いはなかった。MSF では、行きたい国とか、行きたくない国を言うことができる。でも私は、現場に出たかったのだ。即座にお受けすることにした。生活について、人々の置かれている状況についてほとんど何も知らない。でも私は、世の中でいったい何が起こっているのか単純に見てきたい。自分の見方で世の中を見てみたい。という思いの方が強く、そのときは危険な所であるとかいうことはまったく考えていなかった。その後国連の女性職員が射殺されるという事件が起き、事務所のほうからは

「もし、派遣を見送りたいならそれでもいいんですよ。」

と再三言われた。その度に自分の身の危険を多少は考えたが、やはりとにかく「見てみたい。」という考えに変わりは無く今回の仕事を引き受けることとなった。今後６ヶ月やることは決まった、今年はチャレンジの年なのだ、と、ただただ興奮したのを覚えている。

もともと MSF で活動したいと考えたのは、子供のころから戦争が引き起こすことに興味を持っていたからだ。小学生のころ学校で原爆に関するビデオを見たのがきっかけだ。人はなぜ殺し合うのか、戦争に正義はあるのか。戦争がもたらすものは・・・。素直な疑問だった。助産師になったのも、とにかく人の命に関わる仕事がしたいと思ったから。多分これは看護師である母の影響が大きいと思う。４年間助産師として働いたが、その間、忙しい病棟の仕事に毎日きりきりしていて、常に何かに終われているという状況だった。一度仕事を辞めて、自分を見つめなおしたいという思いから、カナダに１年近く語学留学をすることにした。特に英語が話せるようになりたいと意気込んでもいなかったが、いろいろな国からやってきた留学生達と話をするうちに、自然に

「国が違っても、言葉が違っても人の考えることって大差ないんだなあ。」

と思うようになった。自分の世界がいきなりパッと広がったような、それは大きな感動であった。

その年の９月１１日、ワールドトレードセンターを襲ったあの同時多発テロを目にしたのだ。クラスでこのニュースを知り、私達はテレビにくぎ付けになった。信じがたい光景と、悲しみに打ちひしがれる人々。

「戦争になる、この先どうなるんだろう。」

とても恐ろしいことが起こってしまったと大変な恐怖を感じた。実はこの頃私は、しばらく医療に携わりたくないと思っていた。毎日続い

た緊張に疲れていたし、命を預かる責任の重さに押し潰されかけたからだ。だが、この一連の戦争が

「世の中には他にもたくさん戦争に苦しんでいる人達がいる。」

という事実を思い起こさせてくれることになる。日本だったら考えられないような病気で死んでいく人がいる。内戦のために家を追われ、医療を受けられない人達がいる。

「私もこういう人達の役に立てる。」

帰国後すぐに国境なき医師団事務所に連絡をとり、面接を受けそのまま派遣待ちの状態となった。事務所の貫戸朋子さん（国境なき医師団初めての日本人医師）とお話ができたのはとてもうれしかった。

「あなたは国境なき医師団でどういう活動がしたいですか？」

「水の中に一滴ずつ、絵の具をたらしていくような活動がしたい。」

すぐに何かが変わるなんてありえないけど、きっといつか変わっていくんじゃないかと思っていたからだ。それはいまも変わらない。

実は登録したらすぐに仕事が来るものとばかり思っていた。ところが、初回派遣者にははなかなか仕事がこず、何度か出たことがある経験者ばかりが次々と仕事をしてきているのを見て、とてももどかしい思いをした。確かに私は英語は日常会話程度しか話せなかったし、仕事の経験だって4年なんて長いほうではない。だからといって、経験者だって初めての時はあったじゃないか、って。

派遣が決まってからはとにかく私にとって人生の転機といえる出来事があったその土地へ行けるということは何か縁があったんだなあと思っている。出発まで約1ヶ月半、とにかく医療用語と政治的背景も頭にいれておかなければと、夜勤の傍ら勉強の日々だった。自分の生きたかった人生を生き始めてるって実感した、やっと自分のやりたかったことができるってうれしかった。そんなこんなであっという間に派遣されることになったが、それまでの間途中で何度か出発の日時が変わったので、もしかしたら派遣が中止になることもありえる、と思い本当に身近な人にしかアフガニスタン派遣のことを言わずにいた。ＭＳＦの仕事は危険なフィールドが多いということもあり、社会情勢により活動自体を縮小したり、中断したりせざるを得ない事がある。いろいろな状況に柔軟に対応して活動を続けているというのがＭＳＦの潜在能力の高さだ。私も何度か出発日の変更はあったものの、最終的には予定通りに出発することになったのだった。

（2）パリでの打ち合わせ

パリは寒い。大体なんで熱帯医学研究所で研修を受けたのに、極寒のアフガニスタンに行くことになったんだろう。私の任期は十二月から半年間と言うものだった。まさに真冬。アフガンでは気温はマイナスまで下がると言う。まさかあったか下着を買いこんで持っていくことになろうとは。

「夏までいれば熱帯になるかも。」

なんて言った熱帯医学研究所の友達いたことを思いだして笑ったけど、右も左もわかないままに着いたフランスのオフィスで着くなり

「じゃあ、今からパスツール研究所でワクチン打ってきて。」

と地図を渡された時は、本当に泣きそうな気分だった。

「そっか、ここからもうミッションは始まっているんだ、とにかく自分でなんとかしなくちゃだめってことね。」

と、気を取りなおし、地図をぐるぐる回しながらあちこちで

「パルドン」

を連発しなんとかたどりついた。フランスでこんな風に出歩くなんて考えてもいなかったので、挨拶程度のフランス語さえわからなかった。英語だってそうとう怪しいのに、無理やり英語と笑顔で。返ってくるフランス語に顔が引きつりそうだったけど、なんとか着くものだ。

「おお、これが有名なパスツール研究所かあ。」

と関心しきり。予約してあったドクターのところに行った。

パリで驚いたのは、本当にいろんな国の人が来ていると言うこと。見た目では何人かわからない。アフリカ系のフランス人もものすごく多いし、スカーフをかぶった人もたくさん見かけたし、自分のようなアジア系の人もたくさんいた。病院にはたくさんの人が待っていて、いろんな言葉が飛び交っていた。日本以外の国の人って、自分がフランス語話せなくても、結構自国語でがんがん話しているから、その雰囲気に受付の人も推されている感じだった。実はこういう押しの強さが大事なのかなあと思ったりして。

日本で終わらせることができなかったワクチンの接種をして、足早にオフィスに戻った。ワクチンのお金を払うときに

「ＯＯウロ。」

といわれて、

「何ユーロ払って。」

といわれていると言うことにしばらく気がつかなかった。

「ウロってなあに？」

と聞いて、これこれとお札を見せられて

「あー」

と言う感じだった。フランス語の発音は難しい。なるほど。

オフィスに帰ると早速、簡単に仕事の打ち合わせをし、活動内容について説明を受ける。これがおかしいくらい頭に入らないんですね。もうちんぷんかんぷんというか。最後には担当者も

「とにかく、行けばわかるから。」

なんて、なんだか相当投げやり。本当にイメージ湧かなかった。私がパリでブリーフィングを受けながら感じたことは、オフィスでは現場がわかりにくいということだ。日本で聞いていた活動内容とはかなり違ってびっくり。これ実は1年も半年も前の内容だったのだ。私が行く前は現地にエクスパットドクターも心理療法士もいると聞いていたのに、活動は縮小されてほとんどの仕事は現地スタッフのみで運営されていると言うことだった。実際現場が現地スタッフのみで回っているなら、私はいてもいなくてもいいのに行くのか。自分に何が期待されているのか、なかなかわからなかった。ほんとにわからないことだらけ。ＭＳＦは世界に5ヶ所あるオペレーションデスクが、各フィールドと連絡を取り合い活動計画を立てたり、現場に指示を出す。私はフランスの持つプロジェクトへの参加だったので、パリで打ち合わせをしてから現場に飛ぶと言う形だった。他のＭＳＦセクションも同様。フランスでアフガニスタンのビザを取り、飛行機のチケットと必須医薬品等のガイドブックを受け取り、さらにはＴシャツ、コンドームをボンと渡されて

「じゃあ、行ってらっしゃい！have a good mission！」

って感じだった。とにかく行ってみるしかない。よくわからないけどそういうものなんだろう、ファーストミッションなんてものは。英語も怪しいし、自分の思っている事をどれだけ主張していいのか、どれだけちゃんと伝わるのか、その辺もよくわからないけど、ここまできたらあたって砕けろだわ。

その夜は日本から同じ飛行機でやってきた二人の日本人ボランティアと一緒にご飯を食べた。2人はスーダンに派遣される。彼女らの

友人で将来国連で働きたいと思っている日本人の男性や、フランスにワーキングホリデーで来ている女性など、刺激的な人々に会うことができた。自分とはずいぶん違う世界の人がいるもんだなー、と感心。私の世界は、ほんとに狭かったってしみじみ思った。みんな英語ぺらぺらで、私これからほんとに行っても大丈夫でしょうか、と言うような感じだった。

「英語とフランス語ができたら、国連では強いんだよな。」

ということで、彼はフランスに飛んで来たのだそうだ。なんでも、自分の目標に向かってがんばれる人ってすごいと思う。

明日は朝早く、新しいミッション責任者とともにアフガニスタンへ向かう。一人じゃなくてよかった。彼は今回6回目のミッションだそうだ。ＭＳＦで活動をしている人達はもう１０年選手なんてざらで、そういう現場に詳しい人たちが新しく入ってくる人達にＭＳＦとして働くということを教えていっている。私は今回とにかくなんでもはじめてなんだから、なんでも聞こうと決めた。

「聞くは一時の恥じ、聞かぬは一生の恥じ」

というではないか。

（3）アゼルバイジャン

朝、シャルル・ド・ゴール空港。新しいミッション責任者（ロジスティック専門、以下ボス）がホテルまで迎えに来てくれた。オフィスから現場に持っていくよう託された荷物がいくつかあったおかげで、タクシーで空港まで行けることになった。ボスはオランダ人でフランス語ぺらぺらのやさしそうな好青年って感じ。若そうに見えるけれど、私よりはお兄さんらしい。英語もぺらぺらやし、フランス語もなんてすごいなあ。ＭＳＦで働いている人の中にはは結構こういうすごい人がいる。自分は英語でも汲々としているのに、この差は何って感じだな。

アフガニスタンへの道はパリからだと二つ。アゼルバイジャンを経由するか、ドバイを経由するか。とにかく直行便はない。私がアフガンにいる間に、アリアナ航空がカブールパリ間の運行をはじめたが、ＭＳＦはアリアナ航空を使わないということだった。私達はアゼルバイジャンを経由してアフガニスタンに入る事になった。アゼルバイジャンってどこ??なんだかすごい、知らない所だらけだわ。アフガニスタンに行くって思ってはいたけど、実際パリに行かないと行けないって事も、アゼルバイジャンを経由していくって事もぜんぜん知らなかった。パリからアゼルバイジャンまでおおよそ4時間くらい。首府バクーはカスピ海に面した小さな街だ。私達が着いたのは夜9時くらいだったから、外は暗くて何も見えなかった。飛行機から見える風景は小さな家の光が同じ色で、不思議な統一感をかもし出していた。

アゼルバイジャンに夜滞在し、翌日7時の便でアフガニスタンに発つそうだ。数時間しかないけど、この日はホテルに泊まることにし、ビザを取って外に出る。空気は寒いけど湿っていた。カスピ海のおかげでパリほどの凍りつく寒さは感じなかった。日本の冬みたいに、なんとなくあったかい感じ。ボスがタクシーの運転手と交渉をしている。彼は慣れているし、ここはお任せしよう。アゼルバイジャン、経由地でなければここに来ることはなかっただろうな。タクシーに乗り込み、ホテルに向かう。この国は以前ソビエト連邦に属していたから、建物の多くが典型的なソビエト建築だそうで、巨大でそっけないビルがそこここに連なっている。私たちが泊まったのは「ホテル　アゼルバイジャン」そのままやね。１６階くらいあるホテルの各階ごとにフロントがあり、それぞれ違う会社が契約している。タクシーの運転手と、それぞれのフロアは契約を結んでおり、客を連れて行

くとタクシー会社も報酬を受け取れるという具合だ。私達の泊まったフロアは１１階。部屋に通されて驚いた。すごくかび臭いの。なんていうの、これ、使われていないのか手入れされていないのか・・・・。シャワーは出るけどぬるい、寒い！贅沢は言わないけど、これはちょっと簡便って感じだった。ゴキブリをトイレで発見したときは、思わず叫びそうだった。

明日の朝は早いというのに、ボスは

「せっかくだからレストランに食べに行こう。」

という。もう９時半過ぎている。こんな時間でもやっているところあるのかしら。彼もアゼルバイジャンは初めてと言うことだったので、適当に歩いてお店探そうという話になった。もともと、ＭＳＦに参加するような人は、旅なれていて、全然来たことがない土地でも普通に旅ができてしまう人ばかりだから不思議。まあ、そう言う人が集まるようにできているんだろう。ＭＳＦに参加する人のほとんどは、

「旅行が好きだから。」

とか

「外国で働いて見たかったから。」

とか、結構簡単な理由で参加している人が多い。私も自分の興味が大きかったし、多分こう言う仕事って、表立っては確かに人の役に立ちたい、純粋に医療に恵まれない人のために働きたい。って思ってはいるんだろうけど、力入りまくっている人にはあまりお目にかからない。みんな知らない土地に行ったら自分は無力だと、良くわかっているのだ。自分が行ったところで、急に事態が好展開するなんてありえないとわかってる。それに、力抜いてやらないと続けられないのだ。

「で、たまきはなんでＭＳＦに参加しようと思ったの？」

ちょっと粋な感じのロシア料理レストランにはいり、２階にあるテーブルに通されて、やれやれと席についたら、ボスが早速聞いてきた。

「世の中で何が起きているのか、自分の目で見てみたかったから。」

私はこう答えた。じゃあ、彼はなんでＭＳＦに参加することにしたのだろう。

「僕は家具職人なんだよね。テーブル作ったり、たんす作ったりね。」

へえ、じゃあ余計に全然世界が違う気がするよ。

「うん、家具職人って世界が狭いよね。黙々と作るだけだし、誰にも会わないこともあるんだよ。世界の情況に興味があったのは僕も同じだな。僕はね、人の生活に興味があるんだ。アフリカとヨーロッパじゃ生活が全然違うよ。そういう世界の違いね、そう言うのが面白いんだよ。家具職人という仕事にも誇りを持っているけど、プロジェクトで、例えばなんにもないアフリカのフィールドに行くとするだろ。全然病院も機能していないところから初めて、ナショナルスタッフだけで運営できるようになったとき、ものすごい充実感があるんだよ。そう言う喜びが、癖になっちゃったんだよね。」

そうか。彼は今回がかれこれ６回目のミッションなのだ。いわばベテラン。彼は政治にもかなり詳しかったが、それはミッションをこなす中で、いろいろなＮＧＯや政府側とのやり取りで学んできたものらしかった。普通の家具職人でこう言う生活している人って、日本にはいないでしょう。彼は本当に物知りだったので、はじめジャーナリストか何かと思っていた。ＭＳＦには医療者のほかにいろいろな職種の人がいるので、そう言う人達と話をするのも勉強になって楽しい。国際関係学を学んでいる人は、コーディネーションチームの一員として働くことが多い。私達のような実際に現場で働く者と、プロジェクトを組み立てる人とが組むのだ。私は本当に社会情勢に疎いから、その手の話が話題にのぼると

「ねえ、それってどう言う意味？」
聞かないとわからない情況だった。ちなみにボスはすごく好青年なんだけど、時々やさしすぎてはっきりしないところもあった。まじめな人だと思っていたら、セックス・アンド・ザ・シティというアメリカの連ドラにはまり（ＤＶＤ）夜中の１２時過ぎまでみたりしていた。エッチな場面で彼の高笑いが私の部屋まで聞こえてきて、ちょっと意外だった。
　アゼルバイジャンの料理は表現しにくいけど、魚介類が多いのは良かった。アフガニスタンでは魚は食べられないんだろうな。私はトマト系のスープを頼んだ。ボスはかなり料理を頼んでいて、結構な量を平らげていた。長時間の移動と緊張感でとてもたくさん食べる気にはなれない。ワインも飲んだら一気につぶれてしまいそうなのでパス。
　回りを見ると、化粧の濃いおば様たちがスーツ来たおじ様達とワインと食事を楽しんでいる。毛皮がものすごく豪華だな。ジャンバーにジーンズ、ごっつい靴の私達は明らかに場違いだったけど、下の階には若い男の子達もいた。毛皮の女性が一緒にいる男の人たちの雰囲気たるや、なんだか映画で見たことがあるマフィアみたい。
「ねえ、回りの人がみんなマフィアに見えるよ。」
「アゼルバイジャンって石油があるだろ。悪いやつらもたくさんいると思うよ。」
彼はしれっと答えた。そうか、でも確かタクシーの運転手さえ、かなり怪しげにみえたもんなあ。
　そうこうしているうちに１１時を過ぎ、じゃあ、ぼちぼちとレストランを後にした。明日の朝５時に迎えが来るんだった。気持ちはどきどきして寝られそうにない。でも少しでも休まなくては。シャワーを浴びて、ベランダに出るとやはり海の湿気を帯びた懐かしい風が吹いていた。明日は早い。日本から持ってきたスカーフを出しておく。明日からはスカーフの日々なのだ。疲れているはずなのに、なぜか緊張して眠れない。頭だけががんがんに冴えてしまっている。あー、ほんとにどきどきする。明日はアフガニスタンに入る。気持ちを引き締めていかないといけない。あまりニヤついていてはいけないんだわ。迷惑かけるかも知れないけど、自分のやることに責任を持って、同じ過ちを繰り返さないようにすればいいのだ。
　よし、とベットに滑り込み４時間ほどの眠りにつく。季節はずれの蚊にあちこち刺されながらうとうとと眠りに落ちていった。

（４）アフガニスタン入り
　５時、ホテルを出て空港へ。７時の飛行機を待つ人間で空港は意外とにぎやかだった。昨日は緊張していて気がつかなかったけど、とにかくジャーナリストが多い。ほとんどの人が大きなカメラを持っていて、それ意外では私達のようなＮＧＯの人間が大半だ。アフガニスタンは大会議「ロヤジルガ」を控えて、セキュリティーもきついようだ。ボスはセキュリティーゲートをとおるたびにごつい靴を脱がないといけなくてうんざりしているようだった。フライトは予定どおり、約３時間の飛行時間となる。
　アフガニスタンへ向かう飛行機はソビエト時代からのものだそうだけど、これがもうびっくりするくらいぼろい！そして、席の指定がない飛行機なんて初めてだった。ちなみにシートベルトが壊れて使えない席もあった。大丈夫かいな。振動がもろに伝わってくる。私は信心深いほうじゃないけど、さすがにこのときは祈ってしまいました。中には十字をきっている人もいて
「おいおい、これ大丈夫なの？」

と不安をあおるには十分過ぎるくらいだった。ってまず無事につけなかったら意味がないじゃないか。ねえ。

飛行機の中には、ごつい男達が前の座席を倒して足を投げ出して熟睡中。どうも雰囲気からはＮＧＯ関係者じゃない。カメラも持っていないところを見ると、ジャーナリストでもない。むきむきに盛り上がった腕の筋肉から軍隊関係なんじゃないかと思っていた。後で聞いたら、アフガンにはかなりの数、民間の警備会社から雇われた兵士がいるということだった。横柄な態度と行儀の悪さが気に入らない。繊細さのかけらも感じられないから、こう言う人は銃を持たされたら、躊躇なく人を撃てるんじゃないかなんて思ってしまった。

アフガニスタンへ近づいて行く。眼下に、雪化粧した山脈が連なる。きれい。空が青い。山の茶色と雪の白が青い空に映える。風が強いのか、雪が風に吹かれて飛ばされている感じ。空気は乾いているようだ。足のずっと下の方で戦争があった。そして今も苦しんでいる人が大勢いる。なんとも言い表せない感じだった。おんなじ地球にある国で、他の国と陸で続いているんだよ。この不思議。

飛行機はゆっくりと下降をはじめる。砂漠のような地面が近づいてくる。地雷撤去のＮＧＯスタッフが地雷探知機を使いながら、空港周辺で作業を行っている。無事に着陸、着陸したとたんバタンバタンと倒れる座席の背もたれに思わず苦笑。よかった無事に着いて。まだ飛行機は滑走路を移動しているのに、みないそいそと荷物を棚から下ろしている。ひとつ大きく深呼吸をして、どきどきしながら頭にスカーフをかぶる。ここから先は本当に未知の世界と思ってぎゅっと心を引き締める。アフガニスタンの人に、日本人の私はどういう風に映るんだろう。嫌われることもあるのだろうか。

空港は警官であふれている。銃を持つ人が当たり前にうろうろしていて、明らかに日本とは違う。ここでもセキュリティチェックは厳しい。渡された入国審査表に必要事項を書き込む。

「仕事ってなんて書いたらいいの？」

ボスに聞く。ＭＳＦとかかくわけ？

「人道支援、援助職員とでも書けば良いよ。」

と言われて、そう記入する。ビザを見せて、これは意外とスムーズに終わった。それにしても入国する人のほとんどが、国連職員かメディアの人間かＮＧＯの職員なんて、すごい。とにかくアフガニスタンだ。信じられない！空港からもきれいに山脈が見えて、本当にここがほんの２年前まで戦争のあった国なのかと思う。今だってセキュリティーは厳しくなっているって言われるけれど、ＭＳＦの現地スタッフに迎えに来てもらった時、みんなに話かけられて、あんな風に笑顔を向けられたら普通に普通の外国のような気がしてしまった。空港には荷物運びでお金を稼いでいる人がいて、私の荷物を持って大きなカートに乗せる。

「いいの？」

とボスに聞いたら

「たくさん荷物あるし、頼もう。そんなに高くないだろうから。」

と。確かにパリからいろいろなお届けものを預かってきたので、持ちきれない重さだった。私の荷物は、必要最小限に押さえたけど、バックパックは２０キロであまりの重さにふらつきっぱなしだった。情けない話、もっと鍛えてこないといけなかったんだわ。外国人に群がってくるアフガン人を見ていると、インドネシアに行ったときを思い出す。一人じゃなくて本当に良かったわ。これ心細すぎる。軍服着た男の人ばかり、見た目怖すぎる。

緊張しまくっていた私は、飛行機の中に頼まれて持ってきた荷物を置き忘れると言う失敗をし、

「あー、もう私はほんとにアホだ。」
と落ち込んだけど、空港の職員の人がなんとか見つけてきてくれた。ひゅう、最初からこれだもの、先が思いやられるぞ。ボスにも、３０分以上も待ちぼうけを食らわせてしまった。。
　ゲートを出ると、髭の濃い顔の男性が一人と、白人の女性が私達を待っていた。ＭＳＦでのアフガニスタンの生活が、ここからスタートするのだ。

2　Mission　in　Afghanistan

（1）引継ぎ

　空港で私の前任者ジェニーに会ってまず落ち込んだ。彼女はかなり年配で、ほとんど私の母くらいの年齢だった。これはもう、私がほんとうに子供に見られるということが明らかだった。それにしてもこのチームの中では私の年齢でも若い方で、カブールプロジェクトが経験を重視していた事がわかる。ジェニーはすごくナショナルスタッフになれているように見える。
「ねえ、どうして延長しなかったの。」
「もう十分。帰りたいわ。娘がもうすぐ出産するし。私も更年期で辛いし。」
なるほど(笑)ベテランさんにはそれなりの苦労があるのね。
　空港からオフィスまではおおよそ３０分くらいかかった。ボスは早速アフガニスタンの状況とかいろいろ、アシスタントになるカリムさんに聞いている。私はとにかく圧倒されて、窓の外を見て驚くばかりだ。これ、アフガニスタンでは普通なんだろうけど、信号がない。こんなに車があるのに。交差点の真中にどうやら警察の人らしき人達がいて、手信号で車を誘導している。見ると道路の傍らには昔使われていたらしき信号機があった。そっか、本で読んだけど、ソビエトが侵攻していた十年カブールは本当にモダンなところだったんだ。今も使われているマンションのような住宅も、かつてソビエト時代に建てられたものらしい。あちこちで新しいビルの建設が進んでいる。これが戦後の復興の姿。これからまだまだいろんなものが見えてくるに違いない。道沿いにはたくさんの店がひしめき合っていて馬車も走っている。インドネシアのロンボク島をもう少し大きくして、人をベトナム並に増やした感じ。とにかく車、車、車。お店、お店、お店。砂埃、排気ガス、のどが痛い。運転の荒さもこれ、ほんとにすごい。ＭＳＦは本当にすごい車を持っていて、ラジオ通信機搭載のごっついトヨタのランドクルーザーに乗っている。ちなみにこれで２０キロくらい先までは通信可能。トヨタってほんとに世界のいたるところで使われている。私は豊田市出身だけど、こんなとこでこんなにもトヨタの車にお目にかかるとは思ってもみなかった。アフガニスタンって、何もないように思っていた。荒涼とした風景しか知らなかったから、こんなに車が走っているということに驚いた。復興に向ける人々の活気が伝わってくる。人があふれている。これはカブールが特別なんだろう。とにかく、これがアフガニスタン。きっと私が思っていたアフガニスタンと、本当のアフガニスタンとは違うっていうことなんだろう。
　そうこうしているうちにオフィスに到着。なんだかすごい、鉄の頑丈そうなゲートを開けて車は入った。駐車場では、何人かのアフガン人スタッフが砂袋を作る作業に追われていた。銃撃を受けたときのために、砂袋を駐車場とオフィスの間においてガードするらしい。ここまでしないといけないのか。ちょっと怖い。銃撃とか、ロケットとか、ほんまかいな。
　さて、ここからはもう名前攻めだった。
「この人がガードマン、この人は運転手、この人はメカニックで、この人はロジスティックで・・・。」

って覚えられない！しかもみんな顔がこわい！ターバン巻いてる！こういうスタイルってタリバンだけなんだと思ってた。こりゃ、みんながタリバンに見えるよう。ひげも怖いし、男の人ばっかりだ。どうやら、ほんとにこのプロジェクトの多くはアフガニスタン人スタッフで運営されているらしく、とにかく名前を覚えるのも至難の技だ。オフィスに入りまた出会った人に挨拶、挨拶。「アフガニスタンをどう思う」って早速聞かれたけど、どうってまったくわかんないよ。とにかく、私のイメージとは違うって事はわかるけど。今日は早々にもクリニックにいくらしい。ほっと一息つくひまも無い様だ。昨日ほとんど寝てないから少し辛いけど、ジェニーからの引継ぎは彼女の都合で2日しかないから仕方ないのかもしれない。カブールプロジェクトの部屋に入ると通訳のレイリー（現地スタッフ。元英語教師）が満面の笑みで迎えてくれた。

「ようこそ！アフガニスタンへ！」

いきなりほっぺにキス3回。にっこり笑顔でレイリーは

「たまきのために机の上きれいにしておいたわ！私はあなたの通訳です。よろしくね。」

アフガニスタンの女性についてのイメージはあんまり無かったけど、テレビで見るアフガンの女性は伝統的な衣装を身につけていて、ブルカかぶっているイメージだったんだけど、レイリーを見たときは、そのイメージが吹き飛んだ。彼女はとにかくとってもおしゃれで、黒のきれいなトップスにジーンズ、厚底の靴。きれいなコーランをモチーフにしたゴールドのネックレス、つめにはばっちりマニキュア、髪の毛はどうやってやったんだろうって聞きたくなるくらいきれいに纏め上げられている。化粧もきれいにしている。これはこれは、こんなアフガニスタンの女性もいるんだ。彼女はパキスタン帰りで、いわゆる裕福な家庭のお嬢さんだ。すごい、アフガニスタン。みんなが貧しいわけではないんだ。これは新鮮な驚きだな。この先は彼女とほとんど一緒に過ごすことになるらしい。

ＭＳＦは仕事の効率を最優先させるから、必ず通訳をつけているらしい。確かに、私には言葉を覚えている時間は無かったもんな。アフガニスタンはダリー語を話す。ペルシャ語語源の言葉らしい。看板もあの読めそうに無いニョロニョロ文字。あれは右から読むんだって、くる前に本で読んではじめて知った。これは覚えるのは至難の技かも。でも、6ヶ月あるんだ、少しずつ覚えることができるかも知れない。最低、挨拶とかできるようになるといいだろう。

この日はとにかく、怒涛の紹介ラッシュで、本当に覚えきれない人に会った。名前が難しい。日本の名前とはぜんぜん違うもの。こりゃしばらくは、私名前覚えるだけで終わってしまいそう。

「私、6ヶ月いたけど、まだ名前覚えられない人がいるのよね。」

とジェニーは笑っていた。名前くらいはしっかり覚えたいなと思った。

引継ぎは、本当にあわただしく、ばたばたと過ぎていった。私はたった2日でこの引継ぎを終えないといけないんだけど、こんな短時間で仕事のすべてを把握するのは不可能やった。ボスは1週間引継ぎがあるのに。後で聞いたけど、これはとにかくジェニーの都合だったらしい。この人結構いいかげんで

「わからないことがあったら、レイリーが全部知っているから。」

でおしまい。そりゃ彼女はここでの仕事が長いけどさ、資料がどこに入っているとか、コンピューターに入っているプロトコールの話とか、あったでしょうに言うことが。全部後になって見つけ出したものがいくつも・・・。

情けない話、私はミッションの何たるかと言うものを、まったくと言っていいほど知らなかった。いろいろなプロトコールが作られていることも、毎週やると言うトレーニングのことも、まったく理解していなかったのだ。ここでの仕事は、実際の業務のほかに、統計処理をやらないといけなくて、毎月その数値に関しての分析を行うんだけど、それに関しての説明もまったく無し。「聞いてないよー」の世界。月末になって、レイリーから言われて、初めて自分がやらないといけないんだということを知った。何聞いていいのかもわからない状態で、こんなんでやっていけるのか。2日間の引継ぎは、クリニックと搬送先の病院への顔見せで終わってしまい、なんで自分がここに来ないといけないのかと言うことも理解できずに、不安をたくさん引きずったままだった。なんでなんでと聞いても、きりがなかった。

彼女が帰る日の朝、一枚の紙を見せてこう言った。

「じゃあ、今日はトレーニングの日だから、これやっておいてね。」

渡されたのは、抗生剤の使用についてのプロトコールだった。全部のプロトコールも把握していないし、クリニックの状況も把握していないのに。

「書いてあること言うだけよ、とにかくやって。毎週やるって決まっているんだから。」

そうして彼女は帰っていった。

（2）セキュリティルール

アフガニスタンのミッションには、多分ほかのミッションでもそうなんだろうけど、たくさんのセキュリティルールがある。とにかく身の安全に関してルールを無視しては行動できない。もし、何かあれば、その国での活動を休止、中止するに至る。一人の不注意で事故に巻き込まれてしまえば、フランスセクションだけでなく、アフガニスタン全土で活動する他のＭＳＦセクションにも影響を与える事になるのだ。私はセキュリティブリーフィングをボスと前任の責任者から受けた。

アフガニスタンでのＭＳＦ活動の歴史、ここ数年の状況の変化。ＭＳＦの一員として活動する際の注意など。具体的には、外出する時は常に携帯無線を持ち歩き、移動するときは自分の居場所を明確にしなければならないということ、一人では道を歩いてはいけないということ。このラジオが高価で８００ドルするから、無くしたり盗まれたりしないように気をつけること。文化の違いと言う点から、挨拶をするときは女性から握手を求めてはいけないということ、女性はスカーフをかぶり服装はアフガニスタンの服を身につけること。短いのはだめ。などなど、とにかくいろいろある。中でも、これはセキュリティに関することなのか？と思ったのは

「アフガニスタン人との恋愛はご法度」

ということだった。これは他のボランティアもおかしく思っていたらしくて、その後私が

「あの人かっこいいよね、結婚してるのかな。」

と聞くたびに

「たまき、セキュリティルールを忘れたの！？」

なんてちゃちゃを入れられるはめになった。はっきりはわからないけど、アフガニスタンの人達は非常にコンサバティブで、そしてとても信仰が深いイスラム教徒だから、付き合いが深くなると、たいてい家族やらなんやらの間でトラブルになるらしかった。ナショナルスタッフに聞いたけど、アフガン人と結婚したらイスラム教徒にならなきゃだめ！と力説していた。なんでさー。多分、そんな人ばかりじゃないとは思うけど、ぜんぜん無宗教だったり、他の宗教の

人が、結婚したからって改宗するなんて大変なことだと思う。私にはできそうに無いな。
　私がアフガニスタンに行く前に、カブールで国連の女性職員が射殺されるという事件が起きていたので、セキュリティに関してはかなり厳しくなっているようだった。でも、このセキュリティも時々不思議に思うことがあって、毎週木曜日に「国際赤十字」のオフィスで開催されているパーティーには行ってもよかったり、金曜日にカブールから出て、ピクニックに行くことは許可されていた。パーティーなんて、人がたくさん集まってよっぽど危険だと思うんですけど、って。
　セキュリティールールは常に状況に対応するようになっていた。ある時、
「カブールのどこかのレストランに爆弾が仕掛けられたらしい。」
というううわさが流れ、しばらくレストランへ行くことを禁止され、レストランの近くも通らないように注意がなされた。レストランに入るときも、できるだけ窓際は避けるようにとの注意も受けた。また、あるときは
「カブール市内でＮＧＯ職員をねらった誘拐事件の計画がある。」
というううわさが流れ、私達のオフィスから他のゲストハウスまでの、ほんの１００メートルの距離を車で移動しなければならない羽目になった。ただ洗濯物を取りに行くだけのくだらない理由で運転手さんに車を出してもらわないといけないなんて、ものすごく窮屈だった。これも１週間ほどで解除されたが、どこかで「うわさ」が流れるたびに、安全が確認されるまでは「これでもか、これでもか」というほどのセキュリティルールがひかれる。
　私がカブールについたのはまさにロヤジルガの前だったから、ミーティングの際に、どこどこでミサイルが設置されているのが見つかった、とかインターコンチネンタルホテルの近くにロケット弾が落ちたけど、怪我人はなかった、とかまるで日常茶飯事だった。
　毎朝のミーティングで、なにかあったかナショナルスタッフに聞いて常に安全情報を確認していた。怪我人が無いと聞くとほっとしていたけど、戦争は終わったはずなのに、この国には武器があふれていた。戦争は終わっていないんだなと思う。日本人や他の国の人が思うほど、アフガニスタンの状況は楽観的ではない。街を車で移動すれば、必ず国連部隊の大きな装甲車に出くわす。街にはアフガニスタン軍の兵隊も銃を持って立っている。普通に武器を持っているから、慣れてしまいそうだけど、これは本当にすごい光景なんだと思う。普通の街でこんなに軍隊を送り込まないと維持できない平和というのはどうなんだろう。カブールの警備は他の地域に比べると、格段に厳しいらしかった。カブールはカルザイ大統領はじめ、多くの閣僚が居を構えている。カブールの治安の悪化は国自体の基盤を揺るがしかねないということだろう。
　ロヤジルガは、今後のアフガニスタンの政策について話し合う重要な会議だ。みんながどんな政策が話合われるのか注目している。ドクターアミン（アフガン人精神科医）は
「あんなの大した事話し合ってないんだよ。それぞれの県の代表が自分達の県に都合のいいようにいろいろ主張するだけだよ。アフガニスタンにいい政治家なんていないんだから。ホテルで毎日パーティーだろう、そりゃ誰も早く終わらせたくなんて無いんだよ。」
と何やら悲観的だったけど。さておき大変だったのは、信じられないくらいの交通渋滞だった。
　ロヤジルガ開催の１２月１４日はとにかくすごかった。ロヤジルガはインターコンチネンタルホテルで行われるということで、ホテル周辺の道は封鎖。いつもは交通整理の警官がいる

ところにいなかったりして、道は大混雑。それに加えて、ここには譲り合う精神は無い！絶対に譲らない！いつもは長くても４０分でクリニックにつくのに、閉鎖されている道をさけ、大渋滞にはまりながら1時間半くらいかけて通うことになってしまった。これが十日間も続くなんて・・・。ロヤジルガ開催期間中の交通渋滞は初日よりは改善したものの、相変わらず皆の不満をあおり、

「カブールの悪夢」

なんて新聞記事が出たほど。それくらいひどい渋滞で、毎日クリニックに行くだけでどっと疲れていた。

時々遠くでロケット弾が落ちる音が聞こえたり、どっかで爆発音が聞こえたりして、毎朝のミーティングで報告があった。１２月２８日にはカブールで初めてといわれる自爆テロがあり、アフガニスタンの閣僚と犯人を取り押さえようとした人合わせて5人が殺害されるという事件もあった。カブールは比較的治安が保たれているという気持ちでいたから、この事件があった時は空港の近くと言うことで、少し恐ろしかった。毎日の生活は単調で、ともすると自分が危険な状況で働いていることを忘れがちだ。忘れたころに、いつも何か起きていた。不思議とアフガンスタッフは落ち着いていて、誰もロケットが落ちたとか、テロがあった、とかいうことに過剰に反応することは無かった。彼らが平常でいるうちは大丈夫なんだろうと思っていた。彼らの情報はいつも早い。ほんとにどっから聞いてくるのか早い。国で起きている事件は、自分達の生活に関わってくることをみんなよく知っていて、常に情報に関して敏感だった。アフガニスタンの人はそうやって戦争も切り抜けてきたんだなと思う。

とにかく、悪夢といわれた渋滞が緩和するまではしばらく時間がかかり、はじめは１０日といわれたロヤジルガも、結局3週間以上続いたのだった。

（3）スタッフ構成

私が派遣されたときの外国人スタッフ構成は、ミッション責任者（ボス）とアドミニストレーター（人事会計管理。以下アドミ）メディカルコーディネーター（以下メディコ）からなるコーディネーションチームと、カブールプロジェクトを任されているフィールドコーディネーター（以下フィルコ）、心理療法士（クリス）、医師（小児科医　カリン）助産師(私)、の4人だった。他には私達のゲストハウスの移動と冬の難民への配給のために2ヶ月だけロジスティシャンがいた。

コーディネーションはＭＳＦフランスがアフガニスタンに持っている3つのプロジェクトの管理をしている。私達のカブールプロジェクトのほかに、ガズニプロジェクト（治安の悪化により外国人スタッフ撤退。現地スタッフのみでの活動を行っている。結核のコントロールが主な仕事。）、バーミヤンプロジェクト（病院の管理運営）があった。バーミヤンの病院は近々イスラム系のＮＧＯに引き継ぐ予定だった。アフガニスタンでの活動が縮小する中で、カブールプロジェクトは、ちょうど女性の心理療法プログラムを中心に、活動を拡大するところだった。ＭＳＦでの活動では、数人の外国人スタッフが派遣されて、スタッフの教育管理を行い、実質的な仕事は現地スタッフによって運営される。私達はカブールプロジェクトチームでひとつの家に住み共同生活をするのだ。コーディネーションは別に家を持ち、ＭＳＦフランスのデスクからの訪問者が泊まったり、ゲストを招いたりしていた。時々一緒に食事をするけど、現場チームとコーディネーションはやっていることがかなり違っていた。フランスのミッションだとどうしてもみんながフランス語を

話して、フランス語話せないスタッフは辛いと言うことを聞いていたけれど、私達のチームではあまりそう言うことを苦痛に感じることはなかった。たまに他のＮＧＯの人を招いたときに、英語が話せない人がいたり、フランス語で盛り上がったりしていたけど、私はあんまりそういうのも気にならなかった。多分知らなくていいこともあるだろなという感じで。仕事以外のことに関してはあまり気にしなかった。

私達のカブールプロジェクトにはナショナルスタッフとして、外国人ボランティア（以下エクスパット）のために通訳が女性の通訳が３人。アドミ、薬剤師、ロジスティシャン、精神科医、大工、あとドライバーが3人いた。このほかにも門番さんや、クリーナーさん、コックさんを含めると、このプロジェクトに関わっている人の多さがわかるだろう、運転手さんやクリーナーさん達を除いて、みんな英語を話すので仕事は比較的やりやすかった。クリニックで働いているスタッフのうち、数人は保健省（以下ＭＯＨ）からの雇用だが、ほとんどはＭＳＦが雇っていた。医師６人（院長含む）、助産師１６人、看護師１５人、検査技師１人、薬剤師２人、クリーナーさんや門番さんあわせて１０人以上。とにかくクリニックの雇用は増える患者さんに合わせて増大傾向だった。

ＭＳＦは単独でクリニックを経営しているわけではなく、建物はドイツの建築系ＮＧＯであるＧＴＺが請け負っていたし、クリニックで働くスタッフの給料をエコーと言うＥＵの人道援助機関が負担していた。そのためエコーから時々視察の人が来て、クリニックの運営状況を見学に来ていた。

そんなわけで、仕事をはじめるにあたって、この人事構成を把握するのにかなり時間がかかったのである。

３、クリニックでの日々

（１）番号を配るという診療

ＭＳＦで働くようになって、クリニックでまず驚いたのは、診療の始まる前に番号を配るということだった。クリニックには、女性外来・婦人科外来・小児科・男性外来・ファミリープランニング・助産師外来・心理療法プログラムの各セクションがあり、すべてをＭＳＦがサポートしている。雇われている医師は合計６名。診療は朝の８時半から始まるが、その前に患者さんは番号をゲットしなければいけない。いわゆるトリアージと言うやつだ。優先順位をつけて比較的重症の人を早く診察できるようにする仕組みだ。ところが、このトリアージが難しい。なんといってもみんなが診療を受けたい。当たり前のことだ。午前中２０人、午後は１５人とかドクターごとに人数を振り分けるわけだが、すべての人に番号を渡せないことがある。そういうときは、重症のケースを除いて午後の番号をわたすなり、それもだめなら翌日戻ってくるように説明しないといけない。一応クリニックにはトリアージナースなるものがいるわけだが、なかなか難しい仕事である。ナジーはかなり体格のいいごっついおっかさん的な女性で、彼女が朝のトリアージの責任者である。だが、患者によっては番号がもらえないとわかっても

「遠くの村から来ていてとてもじゃないけど明日来ることなんてできない。」

とか、ほんとはそれほどひどくなくても

「ものすごく痛い！」

と騒ぎ出すケースがあるので難しい。私もよく患者さんにつかまっていた。はじめ私は番号を渡す、診療にリミットをつけることに疑問を感じたが、働くうちに納得した。人数を限らずにすべての人を診ていたら、ドクターが潰れてしまう。診療時間は昼の４時（冬は３時）までだが、それまでの勤務は本当にきつい。次々に患

者を診なければいけない状況でもし残業なんてくり返していたら、続けていくことはできない。

実はクリニックにくる患者のほとんどが大した事の無い病気だったりする。大人で多いのは

「ジェネラルボディーペイン」

なにかって思うけど、多分いわゆる筋肉痛とか関節痛とか、どここと痛いっいうケース、もしくはいわゆる

「風邪」

そして、夏になると増える

「下痢」

子供にいたっては、風邪が多く母親が

「肺炎だ！！」

といってつれてくるパターンと

「おなかが痛いようだ」

といって新生児を連れてくるなど、よくわからないけど泣き止まないというケース。そして

「下痢」これも成人同様季節によって増加する疾患で、大人に比べ脱水になりやすい子供には深刻な病気である。そんな中から、たまにほんとの重症がいたりするので、やはり簡単においそれと番号が無いからといって追い返すわけにはいかず、くたくたになっているドクターに

「そこをなんとか」

とお願いして、患者さんを連れて行くことも少なくなかった。クリニック周辺には市場があり、民家が密集している地域ではあるが、水汲みようのポンプはバザールのあちこちにあり、安全な水を得られる状況にあるだけ、難民キャンプより恵まれていた。ただ、この水も、そのまま飲んで安心なほどきれいなわけではなかったと思う。少なくとも私が生水をのんだら、間違いなく下痢になっていただろう。

所で、アフガニスタンの人は、私達とは違って、同じものを食べてもおなかを壊さない人が多くて、おかれている環境の違いをしみじみ実感した。いちいち食べ物でおなかを壊していては、生きて行かれないってことか。私とカリンはしょっちゅう下痢で苦しみ、

「学ばないやつら。」

といわれていた。とほほ。それでもやはり子供は、同じように下痢になったりすることが多いので、クリニックでは患者教育に力を入れていた。下痢の多くなる時期には、その話題をメインにして、下痢の予防法について話をしたりしていた。難しいのは、字が読めない人達に教えるということだろう。長年続いた内戦のせいで、この国の人達は十分な教育を受ける事ができず、特に女性の識字率はものすごく低い。そして、曜日感覚もあまり無いし、何月何日というのも知らない人が多い。そのため、次にいつクリニックに帰ってきてもらうかということを説明するのが難しい。クリニックではアフガンカレンダー（アフガン歴、西暦とは異なる）を渡して、1日ごとに日を消していく方法で次の受診日を伝えていた。

無料で診療を提供するＭＳＦのクリニックはこの地域の人達には無くてはならないもので、朝の6時から番号を得ようと毎朝人が集まってくる。冬の朝ともなると、カブールでも気温はマイナス5度以下である。そんな中やってくる人たち全員に番号を渡せないときはとても心苦しい気分ではあったが、より重症の人に優先的に診療が行き渡るようにしていたシステムは、効率的だと思った。実は、実際に現場に出て、働くスタッフの環境を知る前は、番号を渡して制限をつけるということに違和感があった。どんな人でも医療を必要としている人は患者である。でも、現場の許容量を越えるようなやり方は長続きしないのである。

助産婦外来でも同じ事がいえた。スタッフの人数を増やし、番号を増やしたりして、毎月増加している妊婦検診に対応したが、いくら人の

役に立ちたいと思っている現地スタッフでも、次々やってくる妊婦達に、ついには嫌気が差してきてしまうのである。フィルコは
「一人の患者につき診療１５分として計算して、４人は１時間に診れるんだから、そのように番号を与えて、助産師も診療をてきぱきと」
と、常に助産師外来の診察患者数について、意見をしてきたが、実際のところ医者と違って、すべて（カルテを探すところから）やらないといけない助産師外来は、なかなかに効率が上がらなかった。レジスターナースを置くことを提案したが却下され、助産師の数を２人から３人に増やして対応したが、それでもカルテを探すということになれないのか、もたもたとしている感じであった。私が来てから１ヶ月はこの助産師外来のチャート整理でつぶれてしまったくらい整理整頓のできていない状態だった。こういう整理整頓の能力のある人がいなかったらしく、チャートは番号ごとに並んでいない状態で、いったいどうやってやってきていたのかと思ったくらい。チャートのすべてを整理し、ファイルごとに仕分けすることをはじめ、診療の手順を見直すことで、なんとか助産師外来の患者数の増加にも対応する事ができるようになった。月平均８００件前後だった診療数を１０００件以上にまで対応できたのはうれしい出来事であった。
「番号が得られなかった人は次は戻ってこないかもしれない、そのまま妊娠中異常があってもこないかも知れない」
そういうことを常に頭において働く姿勢を助産師に教え込むのにもかなり時間がかかったが、最終的には
「できるだけ多くの人に妊婦検診を」
という考えで一致し、助産師達は黙々と働いてくれた。
　アフガニスタンでは、できるだけサボろうという考え方があって（どこもおなじね）、同じお金をもらうなら楽なほうがいい。ってどこの国でも同じだなあと思うことが、かなりあからさまに主張されていて、おもしろいなあと感じた。私が顔を出さないときと、いるときとでは診療患者数が違う。これははっきりしていた。午前中お産で忙しくて、外来をのぞきに行けなかったときに、午後ひょっこりのぞいたらおばちゃん助産師がベットでいびきをかいて寝ていた。さすがに苦笑したが、そのときはそれまでに診た患者数が十分だったので、あえて起こさずにそのままにしていたことがあった。
　はじめのころ、何かって言うと手を抜きたがる現地スタッフに、いちいち頭に来ていたが、しばらくするとそれは無くなった。あまり期待しなくなったといえなくも無いが、これがこの国のペースなんだと受け入れることにしたからだ。多分どこの国から来ても、こういう仕事をしたら、まず
「現地スタッフが働かない」
という不満が出てくる。これは確かにもっともだけど、実は私達は自分達の時間感覚を押し付けていることに気づかされる。その国にはその国のペースがあるのだ。アフガニスタンでは、道端を歩いていても、買い物をしていても、はたまたクリニックで他のセクションに顔を出したときも、とにかく
「お茶飲んでいかないか」
と声をかけられる。なんでもないことをつらつら話してお茶を飲むのだ。たまにそれは仕事中にも、疲れたと思ったら何はさておき「お茶」なのだ。命に関わる重症の患者が目の前にいない限り、私は特にこの「お茶タイム」を否定しない様にした。こうして休憩を取らないと仕事の集中力も長続きしない。
　多分、他の国からくると自分達の現在の状況と比べてしまうから
「なんでこんなに働かないんだ」

とか
「なんでこんなにレベルが低いんだ」
っていらいらすることがあると思うけれど、そこはそれ、国それぞれ。それに、私達の国だって長い年月かけてここまで成長して来たんだし。怒られるかも知れないけれど、クリニックで働き、病院にも訪問に行く中で、その国の医療のレベルが見えてきて、助からない命と助かる命がはっきり見えてくる。もし、それが日本なら助かる命としても、私は常に
「今は仕方ない」
と心の中で思っていた。今この国は、失ってしまったたくさんのものを取り戻している最中なのだ。医療のレベルだけ生活のレベルを越えて飛躍的に改善するなんてありえない。自分達の活動の限界を知ること、そしてそれは常に変わっていっていることを知ること、それはとても大切なことだ。
ただがむしゃらなだけじゃなく、ここでの活動はとてもゆっくりとしていた。毎日繰り返される平凡な毎日が、普通の生活というのを感じさせた。
「あー、こうして続けていくしかないんだろうな。」
多分誰でも、助けられるのに、助けられない。と言う状況におかれたら、すごくもどかしい思いをするし、じぶんのしていることがすごく小さなことに思えて、がっくりしてしまうだろう。でも、もともと自分のしていることなんて小さなことなんだと思う。小さなことの積み重ねで、だんだんと地元の人間が育っていくのだ。多分こういうとこで必要なものって
「冷めた熱意」
って感じかな。変な言い方だけど、本当にそんな感じがした。熱いだけで空回ってはだめだし、冷たすぎて熱意もないようじゃ伝わらないし。そういう微妙な感じがあるんだ。続けることって大きいんだろう。やはり淡々とやることなんだ。そういう背中からきっとみんなは何かを感じとってくれるんだろうなと思う。

(2)血液検査もない検診

クリニックで働き始めて驚いたことのひとつに、検診期間中血液検査をしないこともある、ということだった。日本で妊婦検診といえば、血液検査で感染症の有無、貧血の有無、糖尿病など病気の有無を確認することができる。血液型の検査はもちろん、妊娠中毒症の際の悪化の状況や、肝機能もろもろ血液検査で得られる情報は多い。だが、このクリニックで検査できるのはかろうじて血球検査（赤血球、白血球、血小板の数など）と後は糞便の検査程度であった。妊婦検診では、顔色でまず貧血が無いかを予測する。見た目貧血そうなら検査してみる、といった具合だ。全例に行うわけではない。アフガニスタンのこの地域に住む人達は、ほとんどが慢性的に貧血の状態である。そこへきて、普通正常でも妊娠すると血液量の増加に対し、血球の増加は緩やかなため、自然に血液が薄まり、元が貧血気味の人は重症化しやすい。検査では主にヘモグロビンの値を見るのだが、普通日本人女性で１１から１４くらいのヘモグロビンの値も、ここでは１０以下が普通で、妊娠すると９以下８以下というのは普通の状況だ。こちらで出せる薬は硫酸鉄と葉酸のコンビネーションピルで、それでも回復せずにヘモグロビン６なんていう状況で、フラフラで病院に搬送するケースもたびたびあった。
基本的に皆が貧血と言うのには、さまざまな要素がかみ合っている。まずは、貧困。お金が無いから、食べ物が買えない。後は、知識不足。妊娠中どんな食べ物が好ましいのか、ということを知らないから、食生活に偏りがでる。主食はナン（アフガニスタンのパン）でおかずがご飯、なんてよくある話。あとは、夫の不理解。

妻が妊娠中でも、だいたい妻の健康に気を使う夫はほとんど見ない。ほとんどの人は職がなく、毎日日雇いの仕事で家計を支えている。自分のことで手一杯なため、妻の健康にまで気が回らないというのが現実だ。それと同じくして、家族計画の問題。毎年毎年、貧血になりながら、その回復を待たずに次の妊娠を繰り返していては、健康を回復する時間が無いというのもうなずける話である。全体的な健康のレベルが明らかに違っていて、妊婦検診はアフガニスタンの女性の置かれている状況を知る上で、とても役に立った。みんな服をたくさん着ているから、外からは良くわからないけれど、女性の多くはとてもやせていて、おなかだけがポーンと目立つ妊婦さんがほとんどだった。

中には初めてクリニックを訪れた妊婦さんで、以前に子供を2人3人と原因不明で亡くしているケースがあり、バザール（お店がたくさん集まっている市場みたいなところ。プライベートのクリニックもある）に血液型の検査に行ってもらったら、Ｒｈマイナスの血液型である事がわかり、そのために子供を亡くしていたという事実が判明したことがある。日本で言う市場で血液型検査がビジネスとして行われている。もし、前回の妊娠から血液型の検査をしていたら防げたかもしれない。そのような事例から、これまで全員に行ってこなかった血液型の検査を、初産婦と血液型を知らない経産婦すべてに行うことになった。実はＭＳＦで行っている援助は完全ではなく、

「なんでこれはやっていないんだろう」

と疑問に思うことも多々ある。そうしたときに、もし本当に必要なら新しいことを取り入れていくように、コーディネーションに掛け合わないといけない。できることは実現できるし、それほどの必要はないと判断されれば却下されるが、常に現場の声は発信しつづけなければならない。不思議なもので、人間は置かれた状況にすぐに慣れてしまうから、問題点をすり抜けてしまいがちだ。自分でも

「あれっ」

と思ったことを大事にしないと、解決の糸口をつかめないまま過ぎてしまうのである。

血液検査をできないかと言う提案も、現場のアフガン医師から出てきた意見で、はじめそれが出たときフィルコは

「なんで全員に必要なの？」

と、わからない感じだった。実際に現地で働いていると、以外に多くＲｈマイナスの妊婦さんに出会う。国によって血液型の比率は大きく異なると思われるが、アフガニスタンにいて、結構Ｒｈマイナスの血液型を持つ人に出会った。どうもそれほど珍しくない血液型らしかった。ちなみにレイリーのお姉さんもＲｈマイナスのＢ型だった。

以前にパキスタンに行っていた人、イランから戻ってきた人のなかに自分の血液型を知っている人がいた。本当だったら、すでに知っている人を除いて、全員に行うのが望ましい。そのことについて私も意見をし、じゃあ、やってみましょうかという話になったのだ。

必要最低限と言うのは難しい。でも、それをしなければ赤ちゃんの命が危険にさらされると言う面から、この血液検査項目がひとつ増えるのは当前のように思われた。実は妊婦検診というのは、女性にとって健康診断を行うまたとない機会である。妊娠は病気じゃないし、健康な人が病院で診察を受けると言う考えは、ここでは普及していないし、そんなことできる余裕のある状況じゃないからだ。妊産婦を取り巻く環境の厳しさを実感する。

ともあれ、これから検査キットを取り寄せたり、検査の仕方を習ったりで、実際にできるようになるまでには、まだまだ時間がかかるようだ。

（4）妊娠週数の不思議

アフガニスタンで、正しい妊娠週数を把握するのは難しい。妊娠週数というと、まず前回の月経の初日から満２８０日ごろを予定日とするが、月経周期の不順な人もいるので、超音波で胎のうの大きさを計ったり、頭臀長を計ったりして補正をかける。それでたいてい妊娠週数は正しくなる。あとは妊娠初期には４週間ごと、中期には２週間ごと、後期に入ったら１週間ごとに検診を受けてもらうことになる。

ところが、アフガニスタンでは、妊娠週数を知るのはとても難しいことなのである。まず、女性のほとんどが最終月経の日を覚えていない。先に述べたように、日にちの感覚が無いのである。毎週の出来事で金曜日はイスラムの休日にあたり、その日は家族全員が集まったり、親戚の家をたずねたりするので今日は何曜日ということは知っている人が多いけど、何日かという質問には答えられない人が多い。そこで、クリニックではおなかの大きさで妊娠週数を決めていた。これがかなり難しくて、触る人によって診察に差が出るから、おかしいときには４週間前に３６週だったのが、今週来ても３６週ということがおきていた。こんな感じだから、実際にいつが予定日なのかはっきりせず、時には予定日超過した例があっても、分かっていなかった例があったものと思われる。中には、自分の出産予定日をはっきり知りたいということで、バザールに出かけていって、超音波検診を受けてくる人もいた。超音波の検診が受けられるということ自体驚きだが、

「あるところにはある」

というのがアフガニスタンである。毎日食べるのに困る人がいるかと思えば、携帯片手に国連関係で働いている人もいる。

ところで、この妊娠週数に関わる話は他にもあった。アフガニスタンは、非常に貞操を重んじる国で、表向き結婚するまでは肉体関係を結ぶというのはありえないこととされている。昔は、結婚前の娘が恋人と肉体関係を持ったことに激怒した父親が、娘もろとも殺したと言う話が、聞かれるくらい。殺すまで行かないにしても、結婚前の娘が妊娠、出産するというのは、アフガニスタン人にとって許しがたい行為なのである。

そう言えば、処女かどうかと言うのも、大きな問題で、初夜で出血がなかったといって大問題に発展しているカップルがいた。彼女は間違いなく処女だったのだが、初夜で出血をしなかったために、夫から疑われ、義母に連れられて病院に検査に行くことになったのだ。たまたま夫の妹が助産師だったので、彼女も兄嫁に付き添い病院に行ったそうだ。

「誓って私は貞操を守ってきた。」

と兄嫁は泣いていたそうだ。なんとも気の毒な話である。いったいどうやって検査したのかが謎のままなのだが、

「彼女は処女だった。」

という結果が出て、夫の疑いは晴れたのだった。そんな目にあうなんて、ちょっと信じられない話である。男性は初めてだろうが、何人と関係を持とうが、何の問題もないというのが全く腹立たしい。

ある日クリニックに行くと、ちょうどお産が終わったところで、満期で産まれたらしい元気な女の子が泣いていた。

「この子は３４週で産まれた」

と助産師長がいうので

「なんで？どう見ても満期だよ。」

と答えた。すると

「彼女が結婚したときから数えると３４週って事になるのよ、親戚にはそうやって伝えてって言われてるの。」

とのこと。なんだか拍子抜けすると同時に、そこまで体裁を気にするということに驚きを感じた。満期でぷくぷくの赤ちゃんを抱きながら

「この子は早産だったの。」

と皆に話さないといけない母親も気の毒だが、まあ、ここはこの子の将来のためにも話を合わせておこうかと2人でうなずきあったのだった。

その辺の厳しさはどこから来ているのかな、私はコーランを読んでいないから良くわからないけど、レイリーに言わせると

「伝統」

と言うことだった。伝統ってなんか技術を伝えていくって感じで違う気がするしなあ。

こういう結婚前の妊娠が原因で中絶するケースもあると聞いた。アフガニスタンで中絶すると言うことを考えていなかったけど、あるらしい。結婚前の若いカップルで結婚の話もないのに、肉体関係を持ってしまいやむなく中絶という話になるらしい。結婚できればいいけど、結婚には親の承諾も必要になるし、経済力も必要になるし、好きなら結婚できると言う簡単なものではないようだった。

そんなわけでアフガニスタンには、３４週で丸々した元気な赤ちゃんとか、存在しちゃうことになるんですね。

（5） 年齢を知らない女性達

アフガニスタンの女性の中には、自分の年齢を知らない人が多い。この国には出生届なるものが無い。だから、国民の人口を把握するのも、死亡率を把握するものとても難しい。産まれた赤ちゃんは登録もされず、病気で亡くなればこの世に産まれてきたことさえ、抹消されてしまうような状態なのだ。両親が高学歴で、海外での生活経験があったりする家庭に育った人は、自分の誕生日を知っているが、それ以外は自分が産まれた年も知らない。

そんなわけで、検診の際に年齢を聞くのは大変野暮な気がするが、一応聞くことにすると

「結婚したときが3歳だったから、今は7歳だ。」

とおおまじめに答えられてしまう。初産婦じゃないし、見た目そんな年でもなさそうだし、いっか。とそこは聞き流すのみだ。この手の話に、私は笑うことができないのである。そういう環境に育ってきたから仕方のないことであって、詳しい年齢がわからないからといって騒ぐほどのことじゃない。

不思議なことにクリニックの助産師たちは、こういう人達をある意味見下している感があった。助産師たちは自分達とそういう人達を区別して

「ノンエデュケイテッド」

と呼んでいた。

「教育のない人達」

という意味で。自分達は

「エデュケイテッド」

である。アフガニスタンの教育の格差はとにかく大きい。戦争中、内戦を恐れてイランやパキスタンに逃れることができた人達は、まだ恵まれた生活層の人達であった。彼らはパキスタンやイランで高校や大学に行き、英語が話せるようになって帰ってきた人達なのである。実はこういう階級意識は、アフガニスタンにいると強く感じる。どうしてもクリニックの中でも、医者と患者の立場はイコールではないのだ。だから、なかなか生活指導をしても、理解してもらえずに

「私達がいくら説明したって、あの人達は理解できっこない！」

ときれてしまうこともたびたびあった。

ところで、実はその助産師たちも年齢に関しては結構適当なところがある。ある日オフィス

から頼まれて、マタニティスタッフ全員の年齢と経験年数を聞いてくるようにいわれて、スタッフルームに張り紙をしておいた。多分ある人は正直に書いて、ある人はさばをよんでるという感じでなかなか興味深かった。たとえば、サフィナは２９歳なんだけど、経験年数が１６年と書いてあり、いくらなんでも１３歳から助産師はないやろう、という感じだったし。老眼でチャートの字が読めなくて困っている、見た目おばあちゃんのセイダが３８歳とか書いていた。孫がいるでしょうが！！と思わず突っ込みが入ってしまう。どう見てもぴちぴちギャルのファトマと、マタニティの師長の年齢がひとつしか違わないというのにも納得がいかなかった(笑)　まあ、

「若くありたい、でも経験年数はあるってところを見せたい。」

というわかりやすい心理に触れた気がして、とても面白かった。ちなみに、私は赴任時いつもジーンズにプルオーバー、ノーメークと言う格好だったので

「２２歳くらい」

とか

「１８歳くらい」

とか言われて、とにかく甘く見られていたので言いたくもないのに

「２９歳です！」

って力説する羽目になったのだった。女性としては若くいたいけど、仕事の面では若いっていうのはマイナス要因になるんだよね、ここは。それにしても、ビビグルの若々しさには目を見張った。彼女は5人の子持ちの助産師なんだけど、見えない！夜勤明けでも疲れひとつ見せず、ばっちり化粧して若い！レイリーはいつも

「アフガニスタンの男性は自分の妻にはいつもきれいでいてほしいと思うんだよー。結婚するときも、ちゃんと身なりに気を使うことができるかって言うことが、家事をきちんとやっていけるかって事の指標にもされちゃうんだから、毎日の化粧だってちゃんと意味があるのよー。自分のこともケアできないって思われちゃうもの。彼女みたいになるのが私の目標なの。仕事もできて、素敵な旦那様がいて、たくさん子供がいて。結婚したからって気を抜いていると、セカンドワイフにとられちゃうんだから！」

なんて、妙に実感こもっている。ありゃりゃー、わたしはいっつもノーメークだけどねえ。とにかく、マタニティの助産師たちは、みんなスーパーウーマンなのだ。年齢なんてわからなくても良いのかな、なんて思ったりして。

（６）ＴＢＡ

開発途上国に行くと、必ず聞くのがこのＴＢＡという言葉。ＴＢＡは

「トラディショナル・バース・アテンダント」

の頭文字を取った言葉だ。この人達は、主に何をするかというと、自宅でお産の手伝いをするのである。アフガニスタンの女性のほとんどは自宅で出産をするといわれている。クリニックにくるのはほんの一握りの人達で、みんな自宅で出産することに抵抗はない。クリニックのコンクリートの壁や、分娩室の手術室みたいな雰囲気に気おされて、マタニティーから産婦さんが逃げ帰ってしまったこともあった。そういうわけで、自宅出産をする女性にとってＴＢＡは心強い見方なのだろう。所が、近年このＴＢＡが問題になっている。彼女達は十分な医療の知識がなく、地域によっては

「お産に立ち会ったことがある」

というだけで、ＴＢＡを自認してお産の手伝いをしている人もいるのである。最近問題になっていたのは、ＴＢＡによるオキシトシン投与であった。

アフガニスタンの薬局はただ薬を売ってい

るだけのところである。実は処方箋がなくても誰でもどんな薬でも買うことができる。ただ風邪を引いただけでも、薬局はたくさん薬を買わせたいために、2・3種類の抗生剤を一度に平気で処方する。アフガニスタンの薬信仰は絶大だ。誰でも病気になると、沢山の薬を飲めば治ると思っている。

「様子をみましょう」

とか

「よく休めば治りますよ」

なんて言葉では人々は到底納得しない。薬をくれない医者はやぶ医者なのだ。

「医者のくせに薬も出せないのか？」

という世界である。たまにクリニックにも薬局から買ったという薬をどっさり持って

「これを打ってくれ。」

とやってくる人がいた。クリニックに来れば薬はただで手に入るのに、中には「ただのものはよくない。」と硬く信じている人もいて、日本で言うところの

「安かろう、悪かろう。」

の考え方なんだろうなと、妙に親近感が湧いたものだ。

さて、そのＴＢＡで一番困るのは、出産を早く終わらせるために

「オキシトシン」

注射を頻繁に使うことにあった。オキシトシンは日本でもよく使われる薬で、主に微弱陣痛の際の分娩促進や、産後の子宮収縮を促し出血を最小限に押さえるために使われるものだ。分娩促進に使われるときには、当然終始モニターで陣痛の状態と、胎児の状態を監視しながらのお産になる。点滴に混ぜて微量の調節ができるポンプで、陣痛の状態や、胎児の状態をみながら慎重に投与されていく。もちろん何かあればすぐに帝王切開に切り替えられる設備がなければ通常行われない。それがここでは量も適当に筋肉注射で使われてしまうのだ。普通この薬は分娩促進目的で筋肉注射はしない。点滴と違って、微量の調節ができないからだ。だが、ここでは当たり前のように筋肉注射で行われてしまうのだ。注射神話は本当に根強く、マタニティにくる産婦の家族が

「早くお産が終わるように注射をしてくれ。」

と要求することが多かった。産婦本人が希望しないと言うのが面白いところである。アフガニスタンは義母の言うことに、嫁は逆らえないのである。

ある夜勤の日、一人の産婦が半狂乱になりながら、家族に抱えられてマタニティにやってきた。彼女は昼間ＴＢＡのところにいき、オキシトシンの筋肉注射を一度に3アンプルも打たれたというのである。なかなかお産にならず、あまりの痛さのため半狂乱になったため、ＴＢＡがクリニックに行くように言ったのだそうだ。診察しようとすると、外陰部は紫色に腫上っていた。子宮口が開いていないのに、無理やり陰部を押し広げようとしたのだろう。医療の知識があるものには考えられない処置である。

「病院に送ろう。」

という助産師を説得し診察すると、子宮口は全開大、児頭も下降しており、そのまま分娩室へ移動し分娩となった。そのように無管理に注射を使ったことで、過強陣痛だったため、胎児には大きなストレスとなっていた。仮死状態で産まれてきた赤ちゃんの蘇生をし、無事泣き出したときは心底ほっとした。

日本では考えられないことがここでは当たり前のように行われている。またあるときは、同じようにオキシトシンを打たれた女性がクリニックにやってきたが、子宮口はまだ3センチほどしか開いておらず、胎児の心音が著しく下降していたため、救急車で病院に搬送したことがあった。救急車を待つ間も、唯一クリニックにある子宮収縮抑制剤のサルブタモールを

使っても過強陣痛が収まらず、子宮破裂の危険もあったため、スタッフ全員祈るような気持ちで救急車を待った。彼女は2回目の妊娠ということだったが、はじめの子供をお産のときになくしていた。なんでＴＢＡのところに行くんだと、ものすごく腹がたった。この子も助からないかも知れない。

カブールは首都というだけあって、農村部に比べれば比較的医療は整っているほうだ。市内にはいくつか緊急の手術ができる病院もある。私の滞在中に、アフガニスタンの保健省はカブール市内のＴＢＡの活動を制限し始めた。政府の認めた「免許を持った助産師」以外、医療活動をしてはいけないという通達を出した。実はこれはカブールだからできることであって、農村部ではいわゆる

「資格を持った助産師」

を探すのは不可能に近いので到底無理な話である。が、ことカブールに置いては妙案のように思われた。通達が出てからクリニックの院長が、周辺のＴＢＡとプライベートで分娩介助をしている助産師に注意をして回っていた。

「分娩の前にオキシトシンを使わないこと」

「異常があるときはすぐにクリニックに紹介すること」

で同意したが、果たしてどこまで効果があるか疑問ではあった。分娩は自然なことで、注射を使わなくてもたいてい自然に産まれるものだ。それなのに、わざわざ必要ない注射をして助かる命を縮めるなんて、やるせなくなる。アフガニスタンの保健省は、資格を持つ助産師の養成と同時に薬局の管理をしなければいけないと思う。完全に破壊されてしまったシステムの立てなおしのために苦労しているのはわかるが、有害な薬が出回り、簡単に入手できる状況をまず変える必要がある。

あるＭＳＦボランティアの医師は、田舎の薬局を訪れたときに、数種類の抗生剤と少ない薬の中に

「バイアグラ」

があったといって驚いていた。農村部では、今でも権力者の老人が少女を妻として迎え入れることがあるという。そういう男性のためになくてはならない薬なのだそうだ。が、なんだか聞いててクラクラしてしまった。ＴＢＡだけではない、この国のおかれている状況は一言で言い表すことはできない。

（7） 医療知識のない中で

アフガニスタンでは、男性は一家の長として絶対的な権力を持つ。女性は常に影の存在である。マタニティで働いていて、夫と関わる中でさまざまな問題に直面した。私達のクリニックはベーシック・エマージェンシー・ケアユニットと呼ばれていて、基本的に手術を必要としない程度の症例のみ取り扱えることになっている。したがって、もし手術が必要な状況だと判断された場合、手術可能な病院へ搬送することになる。そこで、必要になるのが夫の許可だ。こちらからは状況を説明し、病院へ搬送したい旨を伝える。だが、そこからがなかなか進まない。たいていの場合、夫は妻を病院に搬送することをいやがるからである。理由は様々だが、多くは病院の内情を知らず、

「男性がいるんじゃないか」

とかいう理由で拒否することもある。

「なんだそりゃ」

って思う人もいると思うが、アフガニスタンでは日常茶飯事だ。マタニティをオープンしたとき、はじめ産婦本人ではなく、義理の母達が視察にやってきたそうだ。

「ここのマタニティには男性のスタッフ、医師はいるのか。」

と聞いて、いないとわかると嫁を連れてきたそうだ。

アフガニスタンの家庭に招待されるとき、普通男性と女性は別々の部屋に通される。ＭＳＦのスタッフは外国人慣れしているというのもあるから、一概には言えないが、男性は家に招待されてもその家の女性に会うことはない。その点私達は女性子供がいる部屋に通されて、その家の中をもっと深く知ることができるのである。

一般にアフガニスタンでは、結婚後の女性は他の男性に顔を見られないようにする。他の男性に妻を見られるというのを嫌うのである。そのためなのかどうか、アフガニスタンにはブルカとかチャダリとか呼ばれる被り物が普及している。タリバンがアフガニスタンを支配していた時は女性は必ずブルカをかぶらなければならなかったそうだ。あるスタッフは

「私は外を歩くときに男性に見られるのはいやなの。なんか居心地が悪くて。あと、外に出るときに化粧はしないわ。夫の前以外で魅力的である必要がないからよ。もし、化粧をして、他の男性にアピールするようなことしてたら、トラブルの元だと思うわ。私の夫は外に出るときは、わたしにブルカをかぶってほしいって言うし、私もそうしたいと思ってるわ。」

なるほど、一理あるような。アフガニスタンに離婚がないわけでも、不倫がないわけでもないと思うけど、私達の国に比べたら、そのチャンスは格段に低いといえる。

話がそれたが、そんなわけで

「男性職員が働いている」

病院に搬送すると言うのはなかなか難しい事になってしまうのである。

「命に関わることです。」

と説得したことも一度や二度ではない。

ある日いつものように師長とミーティングをしていると、外来の助産師が駆け込んできた。子癇発作を起こしたらしき女性が担ぎこまれたというのである。すぐに女性を運び入れると、彼女はいびきの様な呼吸をしており、意識はまったくない状態であった。脳内出血の可能性がある。救急搬送しなければならないのは確実だ。すぐに救急車の依頼をし、その間処置にあたる。血圧は上が２２０、下は１３０。降圧剤を使ってもなかなかすぐには下がらない。彼女が以前にクリニックで検診を受けたことがあるかたずねると、１ヶ月前に

「重症妊娠中毒症」

の診断を受け、紹介状を持って病院に行くように進められたという。しかし彼女は病院には行かなかった。なぜか。助産師たちはてきぱきと処置をしながらも、ちっ、ちっと何度も舌打ちを繰り返していた。彼女は夫の許可が出ずに、病院に行けなかったのだ。夫になぜ病院に行かなかったのか聞くと

「妊娠出産なんて、誰でもすることなのに、なんで病院に行かないと行けないんだ。大したことないと思っていた。」

という答えだった。アフガニスタンにいるとこういう出来事にしょっちゅう出くわす。男性に限らず、家族の無理解も大きく関係してくる。この女性は結局分娩後に脳出血の手術を受けたが、意識は戻らないまま１週間後に病院で亡くなった。

クリニックには、分娩のためだけにやってくるいわゆる

「飛び込み」

も多い。大体全分娩数の半分を占める。たいていは正常な妊娠分娩経過をたどるが、１０％くらいは異常で、多くは高血圧を主とする妊娠中毒症だ。中には、義理の姉と一緒にクリニックにやってきて、高血圧のために病院を紹介されたときに義理姉が

「私にも小さい子供がいて忙しいのよ。病院になんて行かないわ。」

と言ってそのまま産婦を連れて帰ろうとした

例もあった。そこは、とにかく状況を説明して、病院に行くことを納得してもらわないといけない。

「もし家に連れ帰って、そのままお産をしたら、この人は出血多量で亡くなるかも知れません。それか、高血圧のために脳出血を起こして亡くなるかも知れません。」

と結構きつく話をする。そうしないと必要性が伝わらないからだ。助産師の中には気の短い人もいて

「勝手にすれば！！」

と、説得するのを諦めてしまう人も出てくる。そこをなんとか説得して、私達の目的はなんなのか改めて話し合いをしたりもした。私達の活動の目的は、アフガニスタンの人達の命を助けること。それを忘れては、活動はできない。人々が置かれている状況にいらいらしているのは私達だけじゃない。だけど、今置かれている現状を踏まえて、やれるだけのことをやるだけなんだ。

クリニックの活動では、保健指導も大きなウエートを占めている。受診に来た人はまず保健指導の教室を通らないといけない。1日に何度かグループに分けてヘルスエデュケーターと呼ばれる人が指導にあたる。季節ごとにクローズアップされる話題が変わったり、いろいろと工夫を凝らして行われている。アフガニスタンで活動をしてみて、保健指導なくしては、援助はありえないと言うことを実感した。ただ薬をもらって帰るだけの活動では、また同じ病気にかかって戻ってくるだけだろう。しかし、予防法対処法を伝えることは他の多くの人を救うことにつながる。妊産婦検診にしてもそう、同じような指導を繰り返すだけだけど、それが次の妊娠の安全にもつながってくる。こうして考えてみると、外国で医療活動をすると言うのは本当に根気のいる仕事だと思う。その人達の文化的背景や、生活状況を踏まえた上で、その人達にあった指導方法が出てくる。食事指導にしても、その人達が食べている食事を踏まえた指導が出てくるのだ。しごく当たり前の事だが、

「繊維を摂りましょう」

といって

「ひじき」

を薦めたって役に立たないということなのだ。

（8） 子供事情

アフガニスタンの女性はたいてい子沢山だ。多産多死なので沢山産んでそのうち死んでしまう子供も多い。子供は家族の宝だ、そして大切な働き手だ。そのためアフガニスタンの人々は子供をできるだけたくさんほしいと考える。7人8人子供がいると聞いても、私も驚かなくなってしまった。ただ、体調が戻る前に次々妊娠したりするから、女性の命を守る意味でも家族計画が非常に重要になってくる。未熟児が産まれる確率もぐっと高くなる。家族計画と言うのも、なかなか難しくて、前にも書いたように夫を巻き込んで女性主体で家族計画を進めるのは簡単ではない。クリニックに毎月家族計画のために訪れる人は３００人程度、大分認知されてきていたが、その人に適した避妊法を勧めるのがなかなか大変だった。女性は家族計画に訪れる際すでに夫と話し合いをしてきていて

「夫は注射がいいって言ってたから、注射にして。」

とか

「コンドームがほしい。」

とか、とにかくその人にあったものを薦めたくても、すでにがっちり意見を決めてきてしまっているので、こちらの意図はなかなか伝わらないのである。女性は常に自分で何かを選び取る権利がないように思う。夫の意見に従うのみだ。知識がなければなおさらそうだ。それでもまだ、ちゃんとクリニックにくるだけ良いほうで、飛

び込みで9人目とか10人目とか、まさに産み落としにくる人達よりはいいかなあと思っていた。

クリニックにいるときに2例ほど産まれた赤ちゃんをいらないから誰かにあげてほしいと言う人がいた。理由は

「夫が精神異常でとてもいっしょに暮らしていけない。暴力も振るわれ命の保証もないので、実家に逃げるつもりだ。」

と言っていた人。2番目は、ただ

「子供が多すぎて、貧しくて育てられないからもらって。」

と言う人。アフガニスタンにはそうやって放棄された赤ちゃんのための制度とか組織はない。だから、院長が知り合いの中で誰か子供がほしい人はいないかどうか聞いて、その中から里親を選ぶという具合だ。

赤ちゃんをほしい人は山ほどいる。ぽんぽん10人とか産んでいる人がいる反面、不妊に悩む人がいるのも確かだ。アフガニスタンでは、結婚後できるだけ早く子供ができることを希望する。特に本人達よりもその両親にあたる人達からのプレッシャーは大きい。結婚後1年以内に妊娠しないとそれだけでかなり女性はあせるのだ。アフガニスタンでは男性は一応何人でも妻をもらうことができる。ただ、コーランによると、すべての女性を平等に扱って同じようにお金をかけないといけないから、貧しいひとは2人も3人も養うのは難しくなってくるが。さておき、子供ができないということは離婚にもつながるため、大問題なのだ。運良く妊娠出産できれば良いが、そうでなければ辛い日々を送ることになる。外来で結婚十年にして、初めて妊娠した女性がいた。妊娠がわかったとき彼女は涙を流して喜んだ。それでも悔しそうに

「もし、もう少し早く赤ちゃんができていれば、夫は2人目の妻をもらったりしなかったのに。」

夫の愛を独り占めしたいと思うのは当然の感情で、アフガニスタンの女性のほとんどは夫が2人目の妻を迎えるのはいやだとこたえている。彼女達には反対する権利がないだけなのだ。もし、彼女に子供ができなければ、離婚もやむなしと言う状況であり、セカンドワイフをもらったところで、離婚されないだけマシなのである。なんだかやるせない話だなあと思う。

あるときは、子供のためのNGOでお母さん達を対象に家族計画の指導をしたことがあるが、中に一人不妊症の女性がいて辛い身の上を話された。

「私は、実のならない木のようなものです。私には子供ができません。夫は2人目の妻をもらい、子供が生まれて私の居場所はますますなくなってしまった。2人目の妻と一緒に生活するのは辛い。義母は実のならない木に栄養は必要ないと言って、みんなの半分しか食事をもらえません。」

これを聞いたとき言葉が出なかった。彼女の置かれた状況が痛いほど伝わってきた。アフガニスタンで、不妊のしっかりとした原因を確かめて、それにあった治療ができるとも思わなかったし、私はその人の前でものすごく無力だったから。それがその人の置かれている現実なんだと受け止めるほかないのである。その人の家に行って、義母と話したいと思ったが止められた。家族内での彼女の立場が悪くなるのに変わりなかったからだ。

アフガニスタンでは、家での出来事、家族の不和など恥ずかしいこととして、口外することは善とされない。彼女がそこでその話をしたのは、そこが唯一話すことを許された場所だったからだ。家でも、近所でも話すことのできない胸のうちを、外国のNGOの所でやっと話すことができるのである。自分たちが活動すること

の意味をそこからもひしひしと感じた。社会の負の部分に風穴を開ける事を、無力な人達はＮＧＯに期待しているのである。自分達で変えられない何かを、変えてくれるんじゃないかという期待である。自分はちっぽけな存在だと、しみじみ思い知らされたが、この国では本当にたくさんの人達が心に傷を抱えて生きてきているのだ。村に生まれた女性のいきる意味は、結婚して夫に仕え、子供をたくさん産んで、育てることなのだ。産めない人に権利はない。貧しい家に生まれて、小さな村から出ることもなく、いとこと結婚して一生その村で生きていく。そう言う現実がウワーッと迫ってくる気がした。幸せの形はいろいろだけど、選択肢のない人生なんてどうやっても私には理解不可能だった。そういう人生を受け入れようとしても無理だった。

彼女は自分のことを話して、幾分すっきりしたようだった。私はクリニックの産婦人科の医師を尋ねてくるように彼女に伝えた。きっと同じような境遇の人はたくさんいるんだろう。どれだけの人の心に触れられるんだろうと思った。できることなんて、何もないのかも知れないなと思った。女性の権利に関することを取り扱っているＮＧＯはいるが、社会全体を変えるまでにはまだまだ時間がかかるだろう。

９人目の出産が双子だったお母さんに声をかけた。

「かわいいねえ、おめでとう。」

「それならあなたに一人あげるわ、誰にもあげちゃだめよあなたが育ててね。」

子供を巡る環境も本当に様々なのである。

（９）家族の中の女性の立場

アフガニスタンの女性は、非常に厳しい規律の中で生活している、と前に書いた。夫の意見は絶対であるし、義母の意見にも逆らうことはできない。以前のボランティアの中に、現地人と恋に落ちて彼と結婚したいと考えた女性が、結婚早々にあたっての必要なことがあまりに多くて、ギブアップしたと言う話を聞いて妙に納得した。たとえば、一人で外出したい時のこと。まず、夫に許可を得ないといけない。もし夫がいなかったら義母にお伺いを立てないといけない。で、義母もいなかった場合義理の姉に聞かないといけない。と言った具合だ。ありえない、でしょう。しかし、アフガニスタンでは普通らしい。このカップルの彼はパシュトゥーン人だったが、パシュトゥーン人は特に厳しいと言っていた。

家事全般を女性が担当すると言うのは、なんとなく昔の日本もおんなじだが、女性はよく働いて、料理がうまくて、気立てがいいのがいいと言う、ほんとに日本とおんなじようなことを言っているからおかしい。一般的に女性は結婚すると男性側の家に入って暮らすことになる。核家族と言うものはなくて、大家族みんなが一緒に暮らせるというのがアフガニスタンの人々にとってすごく大切なことなのだ。通訳のレイリーが、パキスタンにいた時のことを話してくれた。

「パキスタンでは、私達はすごく良い暮らしをしていたし、私も英語の先生で結構良いお金もらっていたの。でも家族みんな心から幸せじゃなかったの。みんながアフガニスタンのことを思っていたし、アフガニスタンに残っている親戚のことを思っていた。タリバンが崩壊して、父がアフガンに帰ると決めたときは、みんな反対しなかった。家族親戚が一緒に暮らせないと言うのは、アフガニスタン人にとってこの上ない不幸なのよ。仕事はなかなかなくて、弟はまだ失業中だけど、私が働いてなんとかなっているわ。私達はやっと完全な形で暮らすことができるようになったのよ。」

こんな話からも、アフガニスタンの人々の家族に対する考え方がよくわかる。日本人の私からみると、アフガニスタンの家族の関係はあまりに密で窮屈だけど、アフガニスタンの人にとっては家族はかけがえのない存在なんだ。そうそう、イスラムの休日は金曜日なんだけど、その日はみんな家にゲストを迎えたり、自分達が親戚を尋ねていったりと忙しい。

「金曜日が唯一友達と会えたり、親戚に会える日なのよ。」

ってレイリーは言うけど、私だったら毎週会わなくても良いかな。その辺が感覚の違い。思うに、長く内戦の続いてきたこの国では、いつ誰が亡くなるかわからない状況だったのではないか。だから、次に会える事はないかもしれないという思いもあったんじゃないか。とにかく週末と言えば家にいてゲストをもてなすって言うのが当たり前で、土曜日に

「週末はどうだった?」

って聞いても大体

「たくさん親戚が来て忙しかったよ。」

と言う答えが返ってくる。女性はゲストをもてなすために食事の準備をしたり、お話に参加したり忙しいのだ。このときに未婚の女性で、働き者で料理上手な人がいたりすると、それをみたゲストが自分の親戚を紹介したりして、縁談になることも多いようだ。そうでもしなきゃ、確かにうちで家事を手伝っている女性だったら人に会う機会もないだろう。

私達の通訳のひとりシャイマのうちに招待されたときは、たくさんの美人さんに囲まれてびっくりした。シャイマの兄弟、いとこ、姪っ子さんと言われる人達がみんな私たちのいる部屋にやってきて話に参加するのだ。子供もなんとなくその場に居合わせる感じで、自然に大人の話を聞いている。若い子でも話の腰を折らないようにちゃんと話しに参加してくる。とても社交性があって、自分の１０代のころと比べてしっかりしているんで驚いた。日本では大人の話に子供は口出さない、っていうか同席することはあまりないので、子供は子供っぽいままになってしまうけど、ここではみんながごちゃっと一緒にいて、子供達も大人のおかれている環境や、社会情勢について自然に感じ取っている。金曜日はさしずめ社会性を磨く日でもあるわけだ。

クリニックにくる人達と、オフィスで働くスタッフの生活には大きな違いがある。オフィスで働いている人達は、英語を話し、コンピューターを使い、きれいに化粧して、結構良い服装をしている。女性でも教育を受けており、いわゆるエリートである。外国のＮＧＯのオフィスで働いて、生活に十分な給料をもらっている。だが、私達が働いている地域の女性は、貧しい家にすみ、教育も受けていないから字も読めず、特に技術も資格もなく家事をするのみだ。

こういう生活の格差は本当に大きい。女性は子供の世話もするから、子供が病気になればクリニックに連れてくる、夫の調子が悪ければ夫を連れて病院にくる。だが、だれも女性の体調を気遣う人がいない。妊娠中でも重たい荷物を持たないようになんて気を使ってくれる人はいない。栄養のあるものを食べないとだめといわれても、十分な量がなければ夫と子供に与えるのみで、自身はパンとお茶だけと言うことがざらにあるのである。そう言うことに関して、夫は関心を持っていないから、妻が家事のために体を酷使していても、妊娠中でも気にもとめない人がいるのである。

ここで女性の権利についてとやかく言い出してしまうと、私達の仕事の趣旨からずれてくるけど、個人的には女性の置かれている状況について、改善していく必要があると感じた。すべては、厳しい生活環境によるものだ。男性も仕事がなく、毎日日雇いの仕事で家族を支えて

いる。戦争で障害を負ってしまい働きたくても働けない人もいる。毎日の疲弊した生活の中で、女性、子供に関心を払う余裕がないということなのだ。なにも教育のみに基づく問題ではない。社会全体の問題なのだ。女性の権利のために働いているＮＧＯもある。だけど、権利だけを声高に叫んでも事態が改善するとは到底思えないのである。私達も、日々もくもくと診察をしながら、アフガニスタンの全体の状態が徐々に改善していくのを手助けするのみである。不安定な社会情勢のなかで、常に弱者の立場に置かれてしまう女性と子供に焦点をあてて、活動していくということなのだ。

（１０）アフガニスタンのお産（その一）

アフガニスタンのお産は概して安産である。クリニックにくる人もたいてい家でぎりぎりまで我慢してからくるから、着いた時には子宮口も全開大で分娩室に直行と言うパターンが多い。

実はアフガニスタンに来て、驚いたことはいくつかあるが、お産に関しての手技で「？」と思ったことは多い。アフガニスタンの助産師は陣痛と陣痛の間の時間にやたら産婦のおなかをたたく。手の甲を使ってさしずめドアをノックするような感じだ。それがやさしくって言うのじゃなく、結構強いから見ているほうも痛くなる

「やめて！さわらないで！」

って拒否する人もいるけど、ほとんどお構いなし。これ、多分陣痛の間が開いて来たりすると、刺激して陣痛を起こさせるって言う意味でやってるのかなと思うんだけど、それにしても痛そう。分娩室に

「パンパンパンパン」

という音が響く。陣痛には間欠が必要だし、ひっきりなしに陣痛が来ていたら、赤ちゃんに酸素がいかなくなるから、そんなに頻繁に陣痛を起こす必要もないんだけど、とにかくお産は

「早く終わらせる」

のがいい、と言う考えは助産師にもあって、待つって言うのが苦手なのだ。さすがにたたかれる側も辛そうなので

「そんなに叩く必要はないと思う。陣痛には間欠も必要なんだし。」

と説明した。が、

「こうしないと陣痛が弱くなってしまう。」

と言う主張はやまず、そのままなんとなくみんな叩き続けていた(笑)　なんでも昔からのやり方らしくて、そうしないと調子が狂うような感じだった。後はとにかくいきみまくる。とにかくいきんでいきんで押し出すようなお産。見ていると自分の方が辛くなってしまって、

「こんなにいきまないと産まれなかったっけ？」

って感じだ。

クリニックには十分な数の助産師がいたけど、たまにお産が重なって私が介助につくこともあった。レイリーの助けを借りながら一緒に介助についた。私がダリー語で覚えた言葉は

「いきんで」「大きく息を吸って」「上手だよ」「この調子」「赤ちゃんは大丈夫だよ」「男の子だよ・女の子だよ」「いきまないで」「終わったよ」「はい、腰挙げて」なんてほんとにお産に関する言葉ばかりだった。スタッフも私が

「いいよいいよ、その調子。はい、ちょっとだけいきんで。」

なんてやってると、脇でにやにやしながら見ていた。私はさすがにおなかをパンパンたたいたりはしないけど、そんなことしなくてもちゃんと産まれてくるし、いきんでばかりじゃ赤ちゃんに負担がかかると言うことを説明するのはなかなか難しかった。自分としては十分な知識を持っていると思っていても、人に説明するのはむずかしい。それに、女性のそばに付き添っ

て腰をさすってと言うのは普通にできるものだと思っていたけど、できない人もいて、そう言うときは私が実際にどう言う風に接するのかと言うことを見せるようにしていた。口で言うよりも実際やったほうがいいのだ。言われるとやりたくない人もいたから。

後はとくに難しいなと感じたのは

「胎児切迫仮死」

について。一応ここには超音波で胎児の心拍をチェックすることができる機械があるけれど（日本のＪＩＣＡからの寄付）継続的に胎児の心拍をモニタリングできる機械はなかった。モニター所見をみながら説明すればかんたんだけど、見たこともないものについて説明を受けても、わかるわけなかったので難しかった。実はクリニックでは、母体に対する対処はまあまあできていたけど、赤ちゃんに対する処置と言うのがてんでだめだった。がんがんいきませて赤ちゃんがぐったり産まれてくることに相関関係を感じていなかったので、そこからまず説明していった。女性に関しても、お産はいきみ倒して終わらせるものだという意識があるから、そこのところ説明するのは簡単じゃなかった。痛みで訳わからなくなっているところに説明をしても、なかなか理解してはもらえない。お産ってほんとにイメージトレーニングなんだなあと実感。妊娠中から分娩についての知識をもって、どんな風に産むのか、良いイメージを持っていないといい分娩はできないのだ。ここでは、とにかく

「安全で清潔なお産。」

と言うのが目標だから、そこまでこだわる必要はないのかも知れないけれど、日本のお産しか知らずに来ているから、見ていて慣れるまでに時間がかかった。

私はこのマタニティに派遣された３人目のボランティアだが、以前のボランティアが教えたことの中にもあんまり意味がわからないものとかもあって、どうしたものかなと思うことがあった。ＭＳＦは半年か１年ごとくらいでボランティアを入れ替えている。厳しい生活環境でストレスが大きいというのと、ずっと同じ人が働いていても教えられることが限られてくると言うのが理由だろう。そのため、スタッフはボランティアが代わるたびにその人のやり方に慣れないといけなくて大変そうだった。私は赴任してから、以前のボランティアが教えたことは、命に関わらない限り変えないようにしていた。混乱させたくなかったし、彼らと築いた関係に水を差したくなかったからだ。そう言う姿勢をわかってくれたのか、スタッフは私のことをすごく好きになってくれたし、私も改善したいことがあるときに相談しやすくなった。

「こうしなきゃだめだ」

とか

「こうするべきだ」

と言うようなやり方はここには合わない。突然外国からやってくると、あまりの違いに愕然として

「これもできていない、あれもできていない」

ってアイデアが一杯出てくるんだけど、実はいまさら始まったことじゃなくて、長年そうしてやっていることというだけのことなんだ。はじめの驚きをそのままに活動に反映させちゃうと、いちいち変えなくたって良いことまで変えてしまいたくなるから、注意が必要。わたしはしばらく見ることに集中しようと決めていた。それはとてもよかった。国の状況、医療の基本的なレベルを知らないと、本当にできること、必要なものが見えてこないのだ。

私が後任の産婦人科医に引継ぎをしたときにそれは本当に強く感じた。彼女は新生児のケアができていないといって、かなり使命感をもっていて、

「たまき、赤ちゃんの挿管ができるようにした

ら、蘇生率が上がるんじゃないかしら。」
といってきたことがあった。
「私は挿管できるし、そしたら助けられる率も上がると思うの。」
私は
「はて」
と考えた。もちろん私に挿管はできないし、でもはたしてそのあとどこで管理するのだ。クリニックに人口呼吸器はない。同僚のカリンに聞いても
「アフガニスタンに呼吸器のある小児科はないよ。挿管したって、呼吸器につなげられるわけじゃないし、すぐに抜かれちゃうだけよ。感染のリスクがあがるだけ、やめたほうがいい。」
と言うことだった。そういうことなのだ。私は、彼女が来たばかりで状況を把握できていない。できること、できないことをはっきりさせるのはこういうところで働く上でとても重要なことだ。できることの範囲も常に変わって行くが、とりあえずはできる範囲でやれることをやるまでなのだ。そういうことは実際に働いてみてはじめてわかったことだった。
　さて、お産の話に戻ると、他にもいろいろあって、村からお産に来た人の中には、おなかに何やらおまじないのやけどの跡がある人もいたし、おなかに鶏の血をつけてくるひともいた。安産を願う心はどこも同じだが、おまじないにはいろいろあるらしい。そう言えば、あるとき早産の妊婦さんが運ばれてきたのだが、なぜだかおなかに紐を二重にまかれていて、その紐に南京錠がかかっていた。なんでも、薬局で薬をもらったが効かず、ムッラーのところに行ったらおまじないとして紐を巻いて、錠をかけられたらしい。頭から否定はしないけど、
「こんなの効くわけないよー。」
って思ったのは私だけじゃないはず。こう言う伝統的なやり方で、人を癒すこともあるのだろう。ムッラーというのはイスラム伝道師のことで、村の有力者で、イスラム教の教師である。科学的根拠のない処置を施したり、アドバイスをしたりすることがあるらしい。人々はいろいろトラブルがあったり、悩みがあるとムッラーのところにいって、意見を仰ぐことがあるそうだ。身内になにかと不幸が重なったときに、ムッラーをたずねたある人は、
「ジニーが悪さをしているに違いない。」
と言われたと言う。ジニーというのは、お化けみたいなものなんだけど、訳のわからない悪いことがおこると、
「ジニーの仕業だ。」
と言われたりするのだ。これに関しても、アフガニスタンの人は結構真剣に信じているので、軽々しくジニーの名前を口にしてジョークにしてはいけない。同僚の友人は、家で不可解なことがおきたときに人から
「家にジニーがいるんじゃないの？」
と言われ引っ越してしまったそうだ。日本でも座敷童子が信じられているし、おんなじような事が信じられているんだなと関心してしまった。
　また話がそれた。とにかく、伝統的なことと お産はきっても切れないのだ。ところで、アフガニスタンでは、男が生まれようと女がうまれようと、産まれた後に大騒ぎすると胎盤が出なくなる、と信じられている。そんなわけで、産まれても母親はすぐに子供を見たがらない。見て男の子でうれしくて喜んでも、女の子が生まれたと言って悲しんでもどっちでも騒ぐのはよくないと思っているからだ。
　また、大事な働き手であるということから、アフガニスタンの人は男の子を希望する人が多い。出産のすぐ後に
「早くこれどけて！」
とお母さんに言われたときは驚いた。彼女は目を閉じたまま、赤ちゃんを見ようともせずに、

早くどけてくれと言ったのである。
　以前、ネパールで活動したことがある助産師さんが同じようなことを言っていた事を思い出した。性別を知ることが怖いのだ。男の子に恵まれていない人や、初めてのお産の人は特にそうなのだろう。産後すぐに号泣している女性もいた。初めての子供が女の子だったのだ。男の子でも女の子でも、大切な子供に代わりはないと思うけれど。日本も同じように男の子は跡取って思われているところあるからね。
「あなたは若いし、また男の子も産めるでしょう。それより、かわいい女の子ですよ。おめでとうね。」
とみんなで声をかけた。義母がとても良い人で
「男の子であろうと、女の子であろうと、大事な私達の赤ちゃんと言うことに代わりはないわよ。」
と嫁を慰めていたのは印象的だった。

（１０）アフガニスタンのお産（その２）

　アフガニスタンのお産って実際にどうやってやるのか、ここに来るまでまったくイメージがなかった。と言うのは、日本では病院であれば分娩台があって、今時だとＬＤＲといって、普通の部屋みたいな所にすべて機材が収納されていて、分娩の時には分娩ベットに早変わりってやつ。でも、助産院とかいくと普通に畳の部屋で、好きなスタイルでお産をしたりできるし、日本でも施設、方針によってずいぶん違うからだ。助産院に行ったときは、実はお産ってものすごく自然なもので、病院みたいに機械につながれっぱなしのお産じゃないって知って、かなりカルチャーショックだったものだ。でも、お産って実はこういうものなのかな？と感じたり。セミナーに行くと
「分娩監視装置を使わない分娩なんて、現在の社会においてありえない。」
とその先生は力説していた。でも、助産院にいくと
「だって、電磁波が出るでしょう。」
とエコーでの診察さえ控えていたような感じだったのだ。なんだかこの差が大きくて、自分としてはどっちの考えに賛同すべきなのかなーと、迷ってしまう感じだった。
　さて、実は私達のクリニックは、いわゆる分娩台を兼ね備えた、病院系のクリニックだった。分娩室には分娩台があって、お産の時は仰向けになって、背中を起こした格好で、脚台に脚をのせて、っていうスタイル。他のスタイルでもやるのかときいたら、これオンリーということだった。なんだか見ていると、２０年くらい前の病院にすごく似ている。分娩室の、ただ機能性を重視した感じといい、剥き出しのコンクリの冷たさといい、切って貼ったようなてきぱきした感じと言い、なんだか医療が人を圧倒する感じね。でも、アフガニスタンはこの必要最低限のものでさえ、ＮＧＯや、他の国からの援助がなければそろえることができないのだ。
　アフガニスタンの女性のほとんどが自宅で出産すると言われている。マタニティにくる人の中には、分娩室を見たとたん怖くなってしまって、知らない間にいなくなってしまうこともある。あの、ひんやり冷たい感じと、分娩ベットの異様さに圧倒されてしまうらしい。だいたい見たことがないもの、分娩台なんてさ。はじめに見たお産は、分娩室に入ったとたん
「怖い、怖い！」
とおののく産婦さんを、むりやり分娩台に押し付けて、
「がんばって！」
というお産だった。なんか、違う。でも、何がナンでも分娩台なのか？ここで産まなきゃだめなのよねえ・・・。ちなみに私にはフリースタイルの分娩の経験がない。要するに私が勤め

た病院でも、普通に分娩台でするお産だった。ただ、産む側の女性はそのスタイルを知っていて、それを選んできているという点で違っている。要するにクリニックでのお産に対する情報が十分ではないのだ。産む側の人すべてに説明ができたらいいかも知れないけど、いかんせんほとんどのお産に関しては

「飛び込み」

なのだ。これは難しいなと思った。とりあえず、無理に押さえつけたりするのはやめられないかと思い、まず入院した時点でお産の経過と、分娩に関しての簡単な説明をするように話し合って統一した。

ある日、一人の女性が分娩のために入院してきた。経過は順調で分娩室に移動することになったのだが、説明を行って同意されていたにも関わらず、彼女は急にパニックになり始めた

「いやー！！あんな台に乗りたくない、乗りたくない！私は床で産むわ！」

と座り込んで聞かないのである。

「何いってんの、こんなとこで産めないわよ！ちゃんと台に乗りなさい！！」

師長は強く彼女に言いつけるが、いかんせん座り込んでしまっているから、持ち上げることもできない。かなりいきみが出てきているのに。

「ねえ、あの分娩ベットの大きなマットを下引いてやってみようよ。同じように仰向けのスタイルでいいからさ。台じゃなければ良いんでしょう。」

と、師長に提案すると

「何言ってるの？床が汚れるじゃない！」

と反対な様子。

「床はさあ、後で掃除したら良いよ。プラスティック敷いてさ、ちょっと介助しにくいけど、大丈夫だと思うよ。」

彼女はしぶしぶと言う感じで同意し、私がよっしゃとお産につこうと思ったら、若手のファトマが

「たまき、私がやるわ、いい？」

と申し出てくれた。

「もちろん！」

皆でばたばたと、マットレスを下ろして準備する。床に敷いたあと、清潔野を確保して、準備万端である。普通分娩台は、介助する側に合わせてあるから、結構高めで、そこに上がる産婦さんにとっては楽じゃない。床でやろうと思うと、産婦さんはそのまま寝転んだらいいから楽だけど、変わりに私達はスクワット状態だ。なにせ、分娩室は床から、壁からすべてコンクリだから。

産婦さんは初産ではないと言うことだったけど、とにかく大騒ぎの人で、マットレスからも転がり落ちそうな勢いだったから、みんなで落ちないように支えながら、なんとか無事にお産を終えることができた。赤ちゃんは元気。お母さんも疲れているけど、やっと落ち着いたようだ。こっちもやれやれだ。

「あんたねー、こんなに騒いで、次すぐに妊娠したりしたらただじゃおかないから！」

師長はかなーり怒っていたけど、私はなんだか面白い気分だった。日本でも昔は

「お医者様」

だったでしょう。医療者の立場が患者よりも格段に高かった。ここでも、そんな感じなのだ。だから助産師はものすごくプライドを持っているし、とくに病院からきた助産師は

「自分達がしてやってる！」

という意識が強いのだ。だから、今回は師長にしてみれば自分達の言うことを聞かない患者が疎ましかったのだろう。

「まあ、元気に産まれて、お母さんも元気で、無事に済んだんだから、いいんじゃない？こういうやり方もわるくないんじゃないの？」

というと

「もう！そんな風にやってたら次々来るお産

に間に合わないわよ！もう、これっきりよ！」とやっぱり相変わらずプリプリだった。

そうなんだ、ここのマタニティの難しいのは、本当にお産が多いこと。だから、分娩台を使って、自分達の働きやすいようにやっていかないと、とてもじゃないけど回らないのだ。今、このクリニックでは、最低限

「安全で清潔なお産」

を確保するのに精一杯だ。そのうち、国全体のレベルが上がってくれば、いろいろなスタイルで、産婦さん主体のお産ができるようになるだろう。今回は、とりあえず例外だったけど、主役はお母さんという考え方があるって言うことも、わかったんじゃないだろうか。

「たまき、私のこと嫌いでしょう。」

師長が聞く

「なんで？」

「いつもだめって言うから、私は。」

「だって、それがあなたの仕事じゃない。私よりもずっと経験もあるし、いろんなこと良く知ってるじゃない。嫌いなんて思ったことないよ。」

「うそ、絶対嫌いなはず。」

「そんなことないよー、こうやってやりあうのが、私の仕事なんだよ。楽しいジャン、バトル！」

「また、そんなこと言って。」

彼女は、やれやれもうって感じで肩をすくめて、私達は一緒に分娩室の掃除をした。そうなんだよね、みんなの考えとか、私の考えとか一緒にならないことのほうが多いんだ。だけど、そこを話し合って、やれることはやっていこうって言うことなのだ。

「しかし、彼女はちょーっと騒ぎすぎだったよね。」

「大丈夫、ばっちり説教しておいたから。」

さすが(笑)　こう言う厳しさも、実はとても大事なのよね。私も見習わなくっちゃ。常にやさしく、時に厳しく。

（11）赤ちゃんにまつわること

赤ちゃんの試練は産まれたときから始まる。なんて、冗談だけど少し本当。アフガニスタンでは、赤ちゃんは、生まれてすぐに布でぐるぐる巻きにされる。手はまっすぐに伸ばし、足もピーンと伸ばさせて、びっちり布に巻かれ、最後は紐で縛り上げられると言う具合。所で、赤ちゃんの正常な姿勢といえば

「WM型」

という風に言われる。手は軽くまげて足も開き気味で屈曲している。それが正常な姿勢であり、赤ちゃんの手足の動きを妨げないようにと言うのが現在の考え方だと思う。が、ここでは一応習慣として、きっちり赤ちゃんを巻き上げることが常識となっている。なんでも子供が

「まっすぐに」

成長する様にという願いをこめてのことらしい。一応生後2ヶ月くらいまで縛っておくらしいが、人によってはもう少し長く縛っている人もいる。

はじめどうしてもこれがいやで仕方なかった。だいたいよくないってわかってる事を敢えてするなんて、ちょっと自分の良心に反する感じで。ところで、一応うちのスタッフも赤ちゃんを伸ばして縛り上げるなんて、科学的にはよくないとわかっていたのだが

「これはアフガニスタンの習慣だから。」

とのこと、習慣はなかなか変えるのは難しい。日本も昔は腹帯きっちり巻いていたっけ。いまだったら

「腹帯はしないこと！」

って口を酸っぱくして言われるから、同じようなものか。そんなわけで、この件に関しては何も言わないことに決めた。ただあまりキチキチに巻かないようにとだけ説明した。

ところで、お母さんたちを見ていると、赤ちゃんが泣いても
「まずオムツ」
とか
「まずお乳」
とか思うことがないようだった。赤ちゃんが泣いたら、ただ抱っこして左右に揺らしておくか、すごく低い声で「子守唄」を歌ったりしていた。
「おかあさんオムツ見てみたら？」
とか
「口パクパク探してるからお乳じゃないの？」
とか言わないとなかなか世話をしようとしなかった。初めての子供じゃなくてもこんな具合で、これは外来にくるお母さん達にも同じ事がいえた。
たとえば、赤ちゃんがずっと泣き止まないと言って連れてこられた赤ちゃんが、布でぐるぐる巻きなうえ、ビニールまで巻かれていて、おぬつはぐっしょりなのにそのままでオムツかぶれになっているという具合だ。小児科医のカリンもいつも怒っていた（笑）
「ビニールは巻いちゃだめ。」
「赤ちゃんが泣いたら、まずはオムツとお乳を確認してみて。」
という非常に基本的なことを繰り返し説明していた。
また、ある日お母さんが赤ちゃんを抱いて、義母とともにマタニティにやってきた。赤ちゃんがぐったりして元気がないという。たしかに、見ると赤ちゃんは確かにぐったりしている。黄疸も少しきついのかも知れない。
「お乳は飲めてるの？」
と聞くと
「産まれてから一度もおっぱいはあげていない。」
というのである。えっ、一週間も？じゃあ何あげてたの？仰天して聞くと
「バター」
と言う答え。出た、バター。実はこれもすごく一般的なことで、特に年配の女性は赤ちゃんにバターをあげるといい、と信じている人がいるのである。
「バター以外のものをあげちゃだめだと、義母にいわれて・・・。」
初産婦の彼女は悲しそうに言った。私達は義母に赤ちゃんにはお乳以外のものをあげてはいけないということを説明し。母親にはとりあえず搾乳の仕方を説明した。赤ちゃんは発熱もしていたので、小児科の病院に搬送することにした。義母の理解、知識がないと言うのは赤ちゃんだけではなく、母親にとっても不幸である。前述のように、嫁には義母に意見する権利はないのだ。とにかく、産後1週間で検診にくる母親に、赤ちゃんの育て方、正常異常について、母乳栄養について、清潔について等々、必ず説明することを決めて実行することとした。
そういえば、マタニティで働いているクリーナーさんが、出産後ずっと子連れで出勤していたのだが、3ヶ月過ぎてもぐるぐる巻きのままだった(笑)　泣けばみんなで変わるがわる抱っこして、お腹が空いているようなら母親を呼んだりして、みんなまるでベビーシッターのようだった。日本の病院では考えられないよね。みんなが赤ちゃんをかこみ、大勢で子育てをサポートする。そういう面ではアフガニスタンはとても良い国だ。核家族で、育児の不安を一人で抱え込み、小児虐待のニュースが絶えない日本と比べると、この国の「家族」と言う形態はとてもすばらしいものの様に思えてくる。働く女性のほとんどは、子供を産んでも仕事は続けている。生活が苦しいからと言うのも大きいが、育児へのサポートがあると言うのも大きな理由である。仕事を持つ女性は、一家の大黒柱となりうる大事な存在なのである。子供を取り巻く環境もさまざまのようである。

（12）ある解任騒動

ある朝、クリニックに行くとなんだか大騒ぎになっていた。なんでもスタッフ同士でトラブルがあったようだ。うちのマタニティで働く助産師と男性外来で働く医師とのいざこざらしい。

話はこうだ。昨日外来で働いていたファトマは、診察室を出て戻ってきたときに自分の鞄がなくなっていることに気がついた。同僚のナディアとクリニック中を探し回り、男性外来のほうに停めてあったアリ医師の車のなかに、ビニール袋がおいてあるのを見て、誰かが冗談でビニールに入れて隠したのではないかと思ったナディアは、許可もなく車の中探してしまった。そこを通りかかったアリ医師は、何をしているのだと注意をし、自分が疑われていると思い腹を立てた。ナディアは勘違いしただけだと言ったが、アリ医師はかなり立腹していたようだ。結局ファトマのかばんは見つからず、スタッフは勤務時間を終えてタクシーや自家用車に相乗りして帰宅の途についた。が、アリ医師はナディアの行為に怒りが収まらず、ナディアの乗ったタクシーを追い越し、タクシーを止めた挙句彼女を車から引きずり出し、

「この娼婦め！」

と言うようなことを大声で言いながら、彼女に殴りかかろうとした。というのである。ちなみにこれはナディア側から聞いたお話。なんだか派手なことになってるなあと思ったが、これはまあ、お互いに行き過ぎてしまった結果かなと思っていた。所が、これがそう簡単には収まらなかったのである。ナディアからいわせると

「結婚前の女性が、公衆の面前であんな風に罵倒されて、許すことはできないわ。私はこのこと両親にも話していないのよ。もしこのこと話したら、家の父は黙っていないと思うわ、アリ医師の所にいって彼のこと殴るかも知れないわ。昔だったら、殺しにいったっておかしくないくらいよ！」

と、とにかく話がかなり大きくなってきてしまっているのだ。これにはオフィスも黙っておらず、アリ医師、ナディアの両方と、一連の出来事を見ていた双方の車に乗っていたスタッフの意見も聞くことになった。おかしな事に、クリニックの中でも意見が二つに分かれ「ナディア擁護派」と「アリ医師擁護派」に分かれて中傷合戦のような感じになってしまったのである。

「私はナディアがアリ医師の車を勝手に開けて探しているのを見たわ。こんな風に中をのぞいて捜して、荒荒しく開けたトランクを閉めていて、アリ医師が怒るのもむりないわ。」

「確かに、アリ医師はナディアに殴りかかろうとしたわ、タクシーの運転手が止めに入らなかったら、本当に殴られていたかもしれないのよ。(娼婦)なんてアフガニスタンではこれほど屈辱的な言われ方はないわ。私の夫がそんなことをきいたら、相手を殺すかも知れないわ。」

とにかく話はどんどんヒートアップして、もう1週間近くこの話でもちきりだった。そして、双方の話を聞いてオフィスが出した結論は

「アリ医師の解雇」

であった。私ははっきりいってたまげた。言った言わないの押し問答に、感情の入りまくりの話し合い。だいたいどっちの言い分が正しいかなんてわからないのに、一方的にアリ医師だけを解雇するなんて。日本人的に言わせてもらえば、喧嘩両成敗ではないか。オフィスの言い分は

「アリ医師が怒ったのは無理もないが、行動が常識を超えていた。スタッフに対してこのような態度を取る人間を置いておくことはできない。」

と言うことだった。もちろんアリ医師の側についた人間からは大ブーイングだ。

「もとはといえば、ナディアが勝手に人の車を開けたりしたのが問題じゃないか。それはなにも罰せられないのか。」
「だいたい外来で、部屋に貴重品をおいたまま外に出たと言う、管理不充分から出たことじゃないか。ナディアだけじゃなくファリダの問題だ。」
「もともと、外来に貴重品を入れるロッカーもないじゃないか、そのことが大本の原因だったのではないか。」
等々、出るわ出るわの抗議の嵐で、さすがに一方的な解雇だけではすまなくなってきていた。実はオフィス側は、アリ医師のことを、給料や待遇に関していつも文句を言ってくると言う理由で疎ましく思っており、今回の出来事がいわば好都合に働いたと言う事実があった。しかし、クリニックの医師のほとんどと、看護師のほとんどがオフィスにまで抗議にやってきたことから、クリニックで、一連の処分の説明と、ナディアに対しても二度とこのような騒ぎを起こさない様にとの警告が出された。おかしな話で、アフガニスタンでは、事実はさておき、自分が見方になった人が有利になるようにうそをついてでもかばう、という国民性を垣間見た気がした。事実がどうで、それに対してどういう処分が適当なのかという冷静な話し合いにはならない。
「こんな屈辱は許せない。」
とか、そういうプライドとかに重きが置かれてしまって、理路整然と物事を解決すると言うことが難しいように感じた。オフィス側の判断はアリ医師の解雇という形だったけど、許可なく自分の車を物色されたら誰だって、
「泥棒扱いされた」
と言って不快に思うんじゃないだろうか。この件に関しては、アリ医師は気の毒だった。
　その後クリニックでは、外来担当の新しい医師を見つけるのに苦労し、私達がアフガニスタンを後にする日まで、常勤の医師を見つけられずにいた。何度か新しい医師が来たが、家族の都合でこれなくなったり、突然なんの連絡もなしにこなくなったり、と踏んだりけったりであった。教育するたびに逃げられると言うかわいそうな目にあったのはカリンだった。
　一方ナディアは、その後結婚し、結婚休暇を取ったままクリニックにこなくなってしまった。なんでも旦那の都合でヘラートに転勤することになり、
「もう来れない」
との事だった。こっちもこの勝手なやり方に被害を被った。ナディアが突然こなくなったときに、アリ医師の擁護派だった人達は
「ほら、言わんこっちゃない。アリ医師を解雇しなければよかったのに。」
とナディア擁護派にちくりとやっていた。確かに。こう言う出来事があると、本当にそれをどうやって収集させるかが、上に立つ人間の技量だと思わされる。実際、アフガニスタンにいながら、私達はヨーロッパのＮＧＯで働いているから、その解決法もどうしてもヨーロッパのやり方になってしまうから難しい。私もこの件に関して、何度か意見を求められたが、先にも述べたとおりの
「喧嘩両成敗」
の立場であったので、フィルコには不満だったようだ。白黒はっきりつけたがるのがヨーロッパ人の気質かなと思うけれど、私は生粋の日本人でありますからして（笑）
　それにしても、本当にこのやり取りを通じて、理屈だけでは通らないアフガニスタン人の気質を知った気がした。自分の仲間を庇うためなら、芝居も打つ！というとても人間くさい部分も見えた気がしたのである。

（13）ナショナルスタッフと外国人スタッフとしての私

マリー、シャイナ、ザキアは「納得いかない」という顔をしている。

「私達はしっかりやっているのに、エクスパットは私達の悪いところだけしかみようとしないじゃない。」

話し合いが終わったあとマリーは不満をぶつけてきた。私もなんとなく納得がいかなかったから

「私も納得いってないよ、私はみんなのこと信用しているからね。相手の側に何か誤解があったのかも知れないね。」

と答えた。

マタニティではいつも何かしら問題はあるのだけれど、これはいまいちどちらが悪いとかよくわからない問題だった。

ある夜勤の日、このメンバー3人で勤務中のとき、一人の男性がクリニックを尋ねてきた。

「妻が出血しているので、家まで来てほしい。」

というのだ。マタニティは忙しくいくつか分娩を抱えていたので、外に出ることはできない。安全面からも夜中に女性スタッフが外出することを許可できない。彼女らは、とにかく患者を連れてきて、と男性に伝えた。何分かして女性が男性に連れられてやってきた。診察すると特に出血はなかったという。妊娠しているようだが、週数は浅く妊娠初期だろと言うことだった。下腹部痛があると言うことで、切迫流産かも知れないから、朝になったら、外来の産婦人科医に見てもらうように説明し、帰宅させたと言う。次の日、メディコがたまたまクリニックを尋ねて来ていたのだが、昨夜の女性の夫が

「妻が出血が多くて死んでしまうかもしれない。」

と訴えたため、患者の家を訪ねクリニックにつれてきた。診察で、不全流産と診断されたが、彼女の家族が

「昨日マタニティに来たときに、助産師が診察もろくにせずに帰された。」

といったため、その日の夜勤メンバーが呼び出され、話し合いになったのだ。助産師の言い分と患者から得た情報が違うため、どちらかの言っていることがうそなのか、それとも勘違いから話が食い違ってきてしまっているのかよくわからなかった。

「マタニティに来る患者は、どんな患者であろうと、しっかり診察をしなければならない。診察もしないで追い返すなんてもってのほか。」

というのがコーディネーション側の意見。でも助産師はしっかり診察をして、出血もなかったから翌日戻ってくるように伝えたと主張する。私は、そのときはまだ赴任したばかりだったから、みんなの仕事振りもよく知らなかったし、夜勤がどういうふうに働いているのかも把握していなかった。そのため、どっちが悪いとか、間違っているとか全然わからない状態で、どっちの側の意見も

「なるほど。」

と言って聞いていた。フィルコは

「たまきはアフガンスタッフを買いかぶっているわね。彼らは平気で嘘をつくし、ミスをすればそれを隠す。都合のいいように話の辻褄を合わせることもある。そう言うことを踏まえて、厳しくしなきゃだめよ。」

とのことだった。彼女は珍しい人で、アフガニスタンでの活動経験が非常に長く合計で４年以上働いた経験があった。ダリー語を話すし、アフガニスタンの自然をとても好きだった。だが、私がひとつ好きになれなかったのは彼女はいつも人を信用していなかったところだ。特にアフガンスタッフに対してはそうだった。仕事も人に任せたがらず、一人ため込んでいるような人だった。実は彼女は本当にアフガニスタン人を良く知っていたのかも知れないけれど、や

っぱりそう言う態度はあまり好きにはなれなかった。
　とにかく、今回は3人の夜勤の警告ということになったのである。私はとりあえず、今後そういうトラブルが起きないように、なにか困ったことがあったら残しておくように連絡ノートを作った。そして、実際に夜勤がどういうふうに働いているのか、夜間困ることはどんなことなのか知るために、夜勤に参加することを決めた。私が夜勤をやるといったときに彼女に
「それは良いわ、夜勤がしっかり働いているのかどうか、しっかりチェックしてちょうだい。」
といわれた。私の意図と主旨は違うけど、ＯＫがでたと言うことで、まあいっかと言うことにしておいた。スタッフを信用するのは確かに難しい。私の前任者もレポートに
「スタッフはミスをしてもそれを隠そうとする。ミスから学ぶという姿勢がないので、隠して、また同じミスをすると言うことがありえる。」
と書いていた。アフガニスタンでは、人に批判されていることに慣れていない。日本人もそうかも知れないけれど、人の間違いについて、きちんと言及できる人も少ないし、自分の非を認めて謝る人も多くない。相手から
「自分が間違っていた。」
とか
「自分が悪かった。」
と言う言葉を聞くことが、まずないのである。その代わり言訳がすごい。しばらく働くうちにそういった性質がだんだん見えてきた。絶対悪かったといわないし、なんて傲慢な人達なんだろうって思ったこともあった。でも、おかしなもので、粘り強く話すうちに私もコツをつかんできた。私の意見に同意してくれたら相手が謝らなくてもとりあえずそれでよし。私の言うことが正しいと思ってくれると、ちゃんと次から行動は変わってくる。まあ、時間がたつとまた忘れられちゃうんだけど、それでもまあ、根気よくやるしかないかということにした。日本人は、何考えているのかわからないとか言われることがあるけれど、どの国の人だって何考えているのかわかんないものだ。アフガン人はあんまりストレートじゃないところが、妙に日本人と重なるところがあって、不思議な親近感を抱いたのだった。

（14）働かない人々

　時々なんでみんなもっとバリバリ働かないんだろうという気分になる。だって、診療だって番号限られているし、それ以上働きたくないってみんな思っているし、いえば
「同じお金なら楽なほうがいい。」
っていう感じにみえてくるよね。マタニティだってそうだ、お産の人がいなかったら、掃除に時間かけたり、整理整頓してみたり、空いた時間で勉強すれば良いのにって思うんだよね。なんで時間が空くとすぐに
「お茶」「お昼寝」
なわけ？？アフガニスタンってこんなＮＧＯが一杯入っている国で、みんなほんとに寝る暇もなく働いているのかと思っていたのに、現実ずいぶん違うんだよね。毎週いろいろなトピックスでトレーニングをするけれど、いまだに赤ちゃんの心拍確認する前から心臓マッサージやっちゃうし、なんでか肺のあたりをぐいぐい押して刺激しちゃってたりするんだよね。ため息が出てしまう。毎日おんなじこと口を酸っぱくして言わないといけないなんてさあ。たまたまアフガン人のメディカルコーディネーターにそうやって思っていること話したら、彼は面白いこと言ってたな。
「たまきさあ、考えてごらんよ、この国は２０年以上も内戦をしてきたんだよ。国のシステムは壊れちゃってるし、政治だって安定していな

い。仕事だっていつ失うか知れない状況に皆置かれているんだよね。毎日同じ仕事の繰り返しでさ、モチベーションを保つのだって大変なことなんだよ。ＭＳＦだっていつアフガニスタンから撤退するって言うかも知れないよ。そんな状況で働いているってことをまず考えなきゃ。それに、ほとんどのスタッフは大黒柱として家族を支えているよね、帰ってからもプライベートクリニックで働いたりしているんだよ。こんな状況で働くことはなかなか難しいと思わない？みんな一生懸命やってると思うよ。たまきが期待するほどの仕事のしかたじゃないかも知れないけど、アフガニスタンの中じゃ、一番と言うくらいよくできてるクリニックだと思うよ。」

との事だった。かれはボランティアとして、アフリカでの活動に参加したことがある、アフリカでの仕事振りを聞いてみた

「アフリカ人は働かないって、やっぱりヨーロッパ人は怒ってたよ。でもね、彼らの側に立てば、こんなに暑くて動けるかって感じだよ。でも不思議なもので、僕はヨーロッパのボランティアと違って、いつも彼らと同じ目線で、同じペースで仕事をしてきて、だんだん彼らの仕事に対する姿勢も変わってきたんだよ。大事なのは、その国のやり方に合わせること。上から押し付けるやり方は、やる気を奪うからね。彼らの目線に立ってみたらなるほどって思うこと結構あるよ。」

へえ、ってなんだかしみじみ納得した。私も同じように働いて、相手を理解しようと勤めていたつもりだったけど、ヨーロッパのやり方に感化されちゃっていたのかな。たしかに、急に仕事のしかたを変えられるわけないんだ。所詮私達は、ちらっと来ただけのボランティアなんだ。なるほどね、今日はちょっとお茶に付き合うことにするか。

（15）　国際協力のあり方

カブールには３００を越えるインターナショナルＮＧＯがあるそうだ。そして、アフガニスタン人によるナショナルＮＧＯは１０００を越えるといわれている。すべてのＮＧＯが大きな活動をしているわけじゃないから、実際のところ恐らく名前も聞いたことのないＮＧＯが沢山いるんだろう。実はカブールはＮＧＯの飽和状態だと言われている。すでに市の中心部の物件の多くはＮＧＯの所有になっている。地価が高騰し現地の人には手が出ない状態になっているという、皮肉なものだ。この地域には水道も電気も来るしすごく恵まれた地域なのに。これが、ここ1年の間にアフガン人のＮＧＯに対する印象を悪くした原因のひとつでもある。

　メディカルＮＧＯに限らず、アフガニスタンでは様々なＮＧＯが自分達のポリシーに基づき活動をおこなっている。人道支援の多くは子供や、女性、未亡人など社会的弱者を対象としたＮＧＯで、メディカルＮＧＯもいくつか独自に活動を展開している。ＭＯＨはカブール全体の医療システムの構築に向けて動き出している。すべてのクリニック、病院をＭＯＨの傘下におき、統率を図る。たとえばＮＧＯが援助している病院でも、ＭＯＨが国として全医療施設を取り仕切ると決めた以上、従わなければならない。いままでＮＧＯはサポートする病院を、独自の看護手順基準で運営することができたが、ＭＯＨが入ってくると自分達のやり方にも意見されると言うことになってくる。働くスタッフの数も制限されるし、雇う人間も、今までは経験があれば雇うことができたのに、いわゆる国の定めた「免許」を持っていないと雇えないという具合だ。実はこれは今年に入ってからＭＯＨがカブールに限って出した取り決めで

ある。マタニティにも2人ほど免許のない助産師がいるが、長年ＮＧＯで働いてきたため、知識も技術も申し分なかった。とにかく、アフガニスタンはやっと、なにも規制がなかった状態から少しずつ国の秩序を回復している段階なのである。

そこで難しいのがＮＧＯとの関係である。難しいというのもおかしいが、たとえばＮＧＯによってはいかなる外的制約も受けないという決まりを持つものもいるからだ。ＭＳＦもそのひとつで常に独立性を重視する。つまり、アフガニスタンでは政府軍とタリバンの残党がいまだ戦いを繰り広げているけれど、そのどちらの側についてもいけないということだ。政府の傘下で働くと言うことになれば、タリバンの側からは敵と見なされる訳で、活動の安全を失うことになるのである。これにはコーディネーションも頭を悩ませていた。カブールでプロジェクトを進めていく以上、ＭＯＨの方針に従わなければならない、が公平性、中立性の確立はできるのか。ＭＯＨもまだ力がなく、カブール以外の医療機関をすべて統率するのは難しいようだったから、コーディネーションは政府の傘下に入らず、ニーズがあるところで新しくプロジェクトを開けないかと考えているようだった。時々地図を広げては

「この地域はどこも入ってきてないから、プロジェクト開く余地があるよ。」

とか

「ここはもうすでに他のＮＧＯが入ってきているんだよ。」

とか、なんだか、場所とり合戦のような感じに思えて、不思議だった。その国に入ってきて活動をするのに、その国の方針に従わないっていう考え方もどうかなと思った。まるで陣地とり合戦みたい。どっちでも良いけど、ニーズがあるところに行こうよと言いたい。

他の医療ＮＧＯも同じように場所を探しているようだった。私達が持っているようなマタニティを開きたいと考えているＮＧＯはいくつかあった、がＭＯＨが新しいプロジェクトをカブールに開くことに反対していた。カブールには十分な医療施設があると言うのがその理由だ。その代わり、カブール以外の農村部にプロジェクトを開くように要請していた。日々多くの帰還難民が到着し、人口が急激に増加しているカブールにニーズがないと言うのはおかしいと思うが、まったく病院がない県外の地域をサポートしてほしいと言うのがＭＯＨの意見だろう。私達のクリニックには、多くの見学者が来たが、そのほとんどの団体がクリニックを開く場所を探していた。やはりＭＯＨとのミーティングでカブール市内にクリニックを持つと言うことが難しく、プロジェクト事態の存続が危ぶまれているＮＧＯもいくつかあった。カブールは諦めて、じゃあ、他の地域にクリニックを持とう、と他の地域でクリニック開設可能な地域を探している団体もあった。

アフガニスタンで活動する上で一番のネックは安全面の問題だ。国連軍ががっちり警備しているカブールと違って、安全の確保されている地域を見つけるのは難しい。特に南部カンダハール周辺は不可能に近い。だけど、この軍隊によって保たれている治安なんて、脆いものだと思ってしまう。軍隊の近くにいればいるほど、軍と同一視されて攻撃対象になりうるではないか？一般に安全だといわれている地域はただ単に、国連部隊が駐在していると言うだけのことなのだ。

新しいプロジェクトを開くのに人気だったのは石仏で有名なバーミヤンだった。比較的治安がいい、と言うのが理由だ。だが、カブール以外でマタニティを開こうと思うと難しいのは人材の確保だ。カブール以外で、免許を持った、きちんとした看護教育を受けたスタッフを

見つけるのはほとんど不可能だ。で、通訳だって女性の通訳を見つけるのは難しいだろう。カブールから優秀なスタッフを勧誘すると言う手もあるだろうが、カブールに住む多くの人は、家族親戚から離れるのを嫌がるのでこれもまた難しいだろう。国連や他のＮＧＯでも人材の確保が難しく、平均からすると桁外れに高い給料を提示しているところもあった。それでも家族の反対があって、働きたくても働けないと言う人も多かった。そんなわけで、アフガニスタンで活動の場を見つけると言うのも、簡単ではなくなってきているようだった。

（１６）幸せのかたち

以前、短期間の臨時でメディカルコーディネーターが来ていたことがあった。彼はもともとは国際赤十字で働いていたことがある人で、ＭＳＦでの活動も長かった。経験を生かして、新たにプロジェクトを立ち上げたりするときに、サポーターのような感じで、若い医師のサポートをしたりしていた。彼の子供が３０歳で、私と同じような年だったから、私はひそかに

「お父さん」

と呼んでいた。彼はお酒が好きだったので、よくメンバーで集まって食事をしたりしていた。酔って議論を吹っかけるのが好きで、ちょっとひねくれたところが、自分と通じて結構楽しかった。あるときとても面白い話をしたことがあった。ちょうど、他のフランス系のＮＧＯも交えてちょっとしたパーティーをしていたのだが、彼は

「アフガニスタンの女性と、フランスの女性はどちらが幸せか。」

と言う質問をみんなに投げかけた。

「もちろん、フランスの女性のほうが幸せさ。」

と他のＮＧＯの彼は即答した。

「んー、多分フランスの女性の方が幸せよ。自由があるもの。アフガニスタンの女性には自由はないもの。」

と、クリスは答えた。私は実はよくわからないなあと思っていた。戦争があったから、現在の状況は過酷なんだけど、文化とか習慣の面から、どちらが幸せかというのは簡単に言えないんだよなと言うのが私の考えだ。状況が恵まれているとか、生活が楽だとか、そう言う簡単なことが単純に幸せに直結するのかどうかわからない。水道がないところに水道が通って、暫くは人はうれしいと感じるだろうけど、それがあるから「幸せ」というのとは違うような気がする。幸せってすごく漠然とした質問なんだ。彼はフランス人２人の意見をふーんという感じで聞いていたけど

「ほんとにフランス人が幸せって言いきれる？」

っていって

「フランス人の女性は確かに自由はあるかもしれないよね、でもいわゆる自由でみんな幸せなんだろうか。若い女性が結婚もせずに妊娠して、シングルマザーになることも自由だし、生活に困って娼婦になるのも自由だ。だけど、自由でそんなに幸せだろうかと思うんだよ。確かにアフガニスタンにはすごく厳しいルールがあって、女性は自由に何かすることはできないかも知れないが、一人シングルマザーになって、一人で子供を抱えて育児放棄するなんて事はありえないじゃないか。未亡人になったって、家族が彼女を受け入れて養っていこうとするだろう。そういう家族の形を持っているほうが実はしあわせなんじゃないかって思うんだよ。働く機会も学ぶ機会も失ってきたのは内戦のためだが、それがなかったらこの国の人は基本的に幸せなんじゃないかと思うんだよ、ぼくらよりもずっとね。

なんでも西洋化していこうって考えは、間違っ

ているんじゃないかと思うんだよ。地域のムッラーにおまじないで治療してもらって、それで治らなくたって、本人達が納得して受け入れられればそれで良いんじゃないか。自分たちの社会が正しくて、こっちの社会が間違ってるなんて、言うことはできないだろう。」
彼の言うことは、なんだか私がインドネシアとかベトナムに行った時に感じたことと同じようなことだった。実はこういう質問の形が非常に難しいんだけど。
「でも、やっぱりフランス人の女性が幸せだと思うわ。私達には権利があるから。自分で何かを選んでいける権利よ。」
ってクリスはいくつかまた反論していたけど、権利って言うのもなんだかあいまいなものだな。自由に好き勝手やってきた人間には、自由である権利が大きいかも知れないけど、古くから家族のために働いてきて、そう言う世界しか知らなかったら、自由とか権利とか考えることもなく過ごしていけるじゃないか。
　こう言う話になると、私の偏見なのかも知れないけど、欧米人と日本人の考え方の違いに直面する。特に、自分は多くのヨーロッパ系ＮＧＯの人と一緒になることもあるから、彼らの考え方の強さに圧倒されることが多かった。彼らは、自分達が一番だと思っている。文化的にも、医療の面でも、こういった国際貢献のやり方についても、どこからくるのかわからないくらいの自信に満ち溢れている。アフガニスタンに来たってワインとチーズは欠かせないし、ＤＶＤが見れないだの、衛星テレビが見えないだの、自分達の生活をそのまま持ちこむやり方をしている。私なんかは、無ければ無いでいいんじゃあないの、という考えだから、文句が多いなあと思ってしまう。私やもう一人のアジア人であるカリンは、いつもこのフランス的な考え方と、アフガン人の考え方の間に立って、右往左往していたように思う。自分達のやり方が一番だと思えるのもすごいなあと思うけど、本当にそうなのか？と疑問を持つことは大切なんじゃなかろうか。このチームにいて、この臨時のメディコ以外で、こうした援助の仕方に疑問を持っている人はいなかったと思う。彼は長年あちこちのフィールドをまわり、その土地の人達が、自分達の文化や習慣などに誇りをもって生きているということを、肌で感じてきている気がした。私達の考え方も、良く理解して、何度も話し合いの時間を持ってくれた。
「良い資料がない。」
と言えば、どっさり本を持ってきてくれた。彼のおかげで、何をどう進めていこうかと言うことが少し見えた。
　私はこういう仕事してみて、一番に優先させることはとりあえず「人の命」って言うことで良いんだと思っている。難しいことは抜きにして、人命が脅かされているって言うことが問題なんだっていうことにした。権利とか幸福論とか開発とかそういうのは全部後回しでいいや。まずはそこんとこ、最低限保障されるようにお手伝いしているだけのことだ。緊急医療援助と言うのがＭＳＦの主な仕事のやり方で、危機を脱したと判断されたときに、開発系ＮＧＯに仕事をバトンタッチしていく。開発援助と言うのは、その国の文化的背景や、生活背景を無視しては考えられないから、インターナショナルのＮＧＯよりもナショナルＮＧＯが仕事を引き継いでいくことができたら、なお良いんじゃないかと思う。
　どっちの世界が、いいか悪いかで、簡単に判断はできない。どちらが幸せかと言うのもわからない。アフガンスタッフからすると、この年で結婚もしないで、家族とも離れて生活している私は、幸せには映っていないしね。私の方が心配されちゃってるもんね。自分の基準だけでものを見ていたら、多分きっとなにかずれが生

じてくるんだろうな。

（17）大病院とのトラブル

「DBクリニック（私達のサポートしているダステバルチクリニックのこと）は、患者に対する治療について改め、M病院はじめR病院に治療困難な症例を搬送することを改めること。」

という意味不明な文書がMOHから回って来た時、まったく寝耳に水の出来事だったので、はっきり言って驚いた。これは一応MOHからの警告ということだ。実はこれは非常にややこしい出来事だった。

まず、DBクリニックは知ってのとおり本当に基本的な処置を施すところであって、手術施設はないので、手術が必要な患者さんは搬送しないといけない。マタニティに関しても、正常分娩のみを取り扱っているので、異常がおきたときは大きな病院に搬送しないといけない。（吸引もかんし分娩も行っていない。）こちらには十分な設備がないんだから、当然手におえないときには搬送することになっている。実は以前から、病院の方からはたびたびクレームが来ていた。

「DBクリニックは重症例ばかり送ってくる。」

という、ものすごくくだらない理由だった。

「重症じゃなきゃ送らないでしょ。」

ってスタッフ全員思っていたが、病院側はこのクリニックで、助産師が間違った処置を行って、患者を重症の状態にして、手がつけられなくなって、さじを投げて病院に送ってくると勘違いしていたらしかった。本当にそんな風に思われていたんなら心外だが、実はいろいろと面倒くさいことが隠れていた。カブールには大きな病院はいくつかあるが、産婦人科で手術もできる、重傷例の受け入れができる病院は3つしかない。そのうちひとつは、工事中で実質2つの病院が主に機能していた。スタッフはMOHに雇われたスタッフであるが、問題はMOHがきちんと仕事量に見合った給料を支払っていないと言うことにあった。私は病院に患者さんのフォローアップに行くたびに

「DBにいま求人はないか。」

と何度も聞かれた。MSFは他のNGOの支援もあり、助産師たちが受け取っている給料はこの病院の2倍近かったのである。うちのマタニティを開設するとき、ほとんどのスタッフがM病院からやってきたそうだ。どう言う基準で選んだのかわからないが、病院側からすれば、多くの優秀なスタッフを急に引き抜かれたのである。私の前任者との話し合いで、以後M病院からスタッフを雇わないということを約束したようだった。何度かクリニックで雇ってもらえないかとたずねていたスタッフも、私がここからは雇えないということを再三伝えていたので、諦めていたようだった。だが、こうした病院側のスタッフからの不満が、思いがけずこちらにぶつけられてきたのである。クリニックにくる患者の中には、状態が悪いのに、遠くの村からやってきて瀕死の状態で運び込まれてくることも多い。そういう場合、とにかく応急処置をして、状態を安定させてすぐに搬送することになっている。しかし、病院側はこんなことにもいちゃもんをつけてきた。

「なんで、点滴なんてやってるんだ、時間を無駄にしているじゃないか。」

って、点滴しなかったら病院の間までに死んじゃうよ。と言う感じでちょっと話しにならないなと言うようなクレームが来ていた。あちらの言い分は

「患者を送るなら、ON TIME で送れ。」

と言うものだった。なんだこのON TIMEっていうのは。患者の状態なんて、来たときが

手遅れなら、それはもう手遅れなんだとしか言いようがない。タクシーで来た患者を車から下ろして診察なんてせずにそのまま病院に送れといわれても、それじゃあ、ただ患者を追い返しているだけではないか。到底納得のできない、言いがかりのような話で、病院のディレクターと話していても、埒があかない感じだった。あげくは

「マタニティには助産師しかいないのに、ちゃんと異常の判断ができているのか。」

と助産師の裁量にまでいちゃもんをつけてきた。そして

「助産師だけでは十分とは言えない。病院から医師を雇わないか。」

と言うのである。結局のところ、ＭＯＨも十分な給料を払えずに、職員の不満はたまっている。数人でも言いからＭＳＦが医師を受け入れて給料も払ってくれるなら、願ったりかなったりだ。そういう問題を「クリニックの対応が悪い。」という問題に勝手に摩り替えるために、いかにもＤＢが悪いクリニックだと言うようなことを言いふらしていたのである。私は到底この申し出を受け入れることはできないと思った。助産師たちの技術、判断力は申し分なかったからだ。（最低限アフガニスタンの全体のレベルから見てと言うことであるが）プロジェクト責任者はこの申し入れを受け入れて、私達は１ヶ月間病院から医師を受け入れることになった。これがもう、散々だった。

契約は一応１ヶ月と言うことだった。シーマ医師は卒後十年以上のベテラン女性医師だ。豪快な笑い方で、見た目穏やかそうなこの人は、実はものすごく傲慢な医者だった。クリニックに来るなり、あれができていないだの、これができていないだのと色々と文句を言っていたが、私はほとんど聞き流していた。口を開けば

「私は経験のある、オンコールの医者なのよ。」

といちいち言うので、レイリーもうんざりしていた。

「ドクター、私もバカじゃありませんから、何度もおっしゃっていただかなくても結構ですよ。」

といったレイリーに「イエス！！」とウインクを送ってしまったりした。期待はまったくしていなかったけど、トレーニングをいくつかやってもらったりした。資料等まったく用意する気配もなかったので、私とレレマで準備をしたりしていた。彼女の話すことといったら、まるっきり教科書の暗記文みたいで、本当につまらなかった。こんな人雇ったって意味ないっていうのに。と私は文句を言ったけど「１ヶ月だから。」と説き伏せられた。私達がしっかり働いていることがＭＯＨに伝わりさえすればいいということだった。

ある朝出勤すると、分娩室に微弱陣痛の産婦が一人。夜勤の助産師は

「搬送した方がいいか、ドクターの指示を仰ぎたい。」

という。私はシーマ医師に任せることにした。シーマ医師は診察するなり

「これは普通には出てこないわ、ここには吸引はないの。」

といった。ここでは吸引分娩ができないということはもともと伝えてあったが、忘れていたようだ。

「だめなら搬送したほうがいいわ。この人は自然には生まれないわ。」

といい分娩室を後にした。夜勤助産師は搬送の準備をしようとした。そこへ、助産師長がやってきて、産婦を診察した。彼女は産婦の膀胱が異様に充満していることを指摘し、導尿を行った。５００ＣＣ以上も尿が貯留していた。そして、導尿後、産婦にしばらく室内を歩き回るよう指導した。そして産婦は自然に出産したのである。私はこのとき本当にうれしかった。彼女

達は助産師としての立場で、医師よりも的確な判断をしたのである。シーマ医師はかなりばつの悪い思いをしたようだ。
　このあと彼女は特に仕事に熱意もなく、なんとなく1ヶ月を終えた。終わるときに
「ねえ、クリニックにあるドップラーを私にくれない？うちのプライベートクリニックにほしいのよね。」
と私に聞いてきたときは、びっくりした。おいおい、これはＪＩＣＡからの寄付だし、クリニックの備品を勝手に人にあげるなんてできっこないよ。すると彼女は
「じゃあ、あなたが日本に帰ったら私にひとつ送ってよ、日本では簡単に手にはいるんでしょう。」
思わず、あんぐりと言う感じだった。あのさ、あなたが本当にいい人で、患者さんのために必死で働いてくれる人なら私も考えますけどね。
「申し訳ないけど、日本からちゃんとアフガニスタンに送れる保障はないから。」
と断った。それでもしつこく
「じゃあ、あなたが日本に帰ったら、次にこっちに来るときはひとつ持って来てね。」
もう、いいかげんにしてくれー。こういう人のこと
「厚顔無恥」
っていうんだよ。苦笑していると、レイリーが
「信じられない、ずうずうしい人。」
といって怒っていた。
　医者にもいろいろな種類の人がいるけど、お金を稼ぎたいと思っている人は多い。アフガニスタンでも、裕福な家庭の人は高い医療費を払ってプライベートのクリニックにいくことがある。シーマ医師は、
「私は自分のクリニックで働いていれば、病院で働かなくても十分暮らしていけるわよ。一日で２０ドルは稼げるわ。」
と言っていた。（一ヶ月の日勤助産師の給料は８０ドルから９０ドル程度である。）
「一月３００ドル払ってくれたら、ここのスタッフを完璧に指導して見せるわ。」
だって、ここではやる気がないわけだと思った。この一連の出来事を通して、私はつくづく自分のクリニックのスタッフが、患者のためにがんばって働いてくれていることを知ることができた。ほんとうに自信を持って
「うちの助産師は優秀ですから。」
といえるようになったのだった。
（１８）女３人集まれば
　普通、恋の話か、エッチな話がはじまる！これはアフガニスタンでもおんなじで、はじめはかなりびっくりしたけど、結構楽しませてもらった(笑)　アフガニスタンは、まだ恋愛があんまりオープンじゃないから、それに結婚までセックスは無しって言うことになっているから（一応）未婚者の結婚に対する好奇心って、ほとんど単にセックスに関する好奇心だったりするんだよね。なんか欲求不満になりそうで、よけい不健康な感じするけど。男性だったら余計にそうなんだろうなあ。
　そうそう、で私はマタニティにきて、二日目に聞かれた質問は
「アフガニスタンの女性のアソコって大きくない？」
って言うものだった(冷汗)　オイオイ、なんてこと聞くんだよー、そうだなー、別にそんなに違わないとおもうんですけど（無難）
「ふーん・・・(やや不満)」
なんだ、どんな答えを期待しているのだ??あ
あ、でもあの、陰部の毛が全部無かったのはびっくりした。あれってお産の前にみんな剃るのかな？お産の時みんなすでに剃毛済みだったから気になったんだよね。

「あー、アフガンの女性はみんな剃ってるよ。イスラムの人は、脇の毛もアソコの毛もちゃんと剃るんだよ。」
ええっ、そうなの？
「知らないのー？イスラムの人で、そこの毛の処理をしていない人は不潔だから、お祈りもできないんだよ。お祈りの前にはちゃんときれいにするんだから。」
へえ、知らなかった。えー、でもほらすぐに生えてくるジャン、つるつるじゃないとだめなの
「えー、うーん、そんなにつるつるじゃ無くても良いけどね、最低1センチ以下かな。」
なるほどー、でつかぬことを聞くけどさ、男の人もそうなの？
「知らないよー、私見たこと無いもん！！男性の裸なんて！（未婚）」
（一同大爆笑）
でもさ、男の人も剃らないとだめって言ったら、アソコだけ剃るの？変じゃない？だって、みんな胸毛すごいよ、もじゃもじゃだよ。足もすごいけど、それはいいわけ？
「ぎゃーっははは（大喜び）」
「やっぱり男の人は剃らなくて良いのよー。」
「だよねー、私毛深い人が好み！胸毛がもじゃもじゃのほうが好き、たまきは？」
えー・・胸毛もじゃもじゃねえ(苦笑)　そう言うのに特に好みは無いんだよなあ。たまたま好きになった人が胸毛濃くっても別に良いし。しかし、みんないっつもこんな話しているわけ？
「もちろーん！」
そうなんだ、どこの国も一緒ねえ(笑)
「一番はじめのエクスパットはね、南米の人だったんだけど、ものすごくオープンでねえ、いろいろ話してくれて、すっごい楽しかったんだから！」
マジですか？いやー、私はみんなに話せるようなそんな武勇談（？）は無いんだけどねえ。
「彼女がいろいろ教えてくれたから、私達だって性生活について結構知ってるんだから！」
なるほどね、そりゃ興味深いよね。
「前ここにいたスタッフがね、夫婦関係で悩んでいてね。旦那さんのほうがなかなかできなかったみたいなの。お互いに初めて（もちろん？）なんだけど、うまくできなかったみたいで。で、新婚だったんだけど、1ヶ月くらいセックスレスになってしまったんだよ。それで、スタッフが彼女に相談してね、どうしたらいいかって。彼女は　（まず旦那をしっかり寝かせること！）って言って、（で、夜中に突然起こして誘うと結構成功するわよ。）
って教えたの。それで夫婦関係うまくいったんだから。」
ほー、すごいね、初めてで気合入りすぎてたんだろうね。しかし、やっぱ南米の人はあっけらかんとしているよね
「ねえ、たまきこのジョーク知ってる？ある新婚カップルの話なんだけどね。」
ふんふんなあに
「この2人結婚したんだけど、旦那がいつまでたっても手を出してこないのよ。で、彼女が痺れをきらして、彼に聞くの
（ねえ、ダーリン、あなたに唇はあるの？）
（もちろんさ、僕の唇は牛のようにぶ厚いぜ）
（ねえ、ダーリン、あなたに手はあるの？）
（もちろん、僕の手は働き者の手で、立派だぜ）
（ねえ、じゃあ、はじめましょうよ）
そこで彼はねえ、自分の手で唇ブルンブルン鳴らして遊び出すんだよー！」
（大爆笑）
なるほどね、これうまいねえ、これってアフガニスタン人がそれだけ性に対してオープンじゃないことの比喩話だね。アフガニスタンの女性ってさ、こんな話しないと思っていたよ。びっくり。でもさ、ふつうだよねそう言う話に興味あるのって。うんうん、それでもそんな話ジ

ョークにして笑えちゃう彼女達って素敵。ちょっと、また面白い話があったら教えてほしいなあ。一応、私半年はいないといけないから、変な想像されちゃうのいやだし、全部は話せないねえ(苦笑)残念ながら。

（19）マタニティの夜は長い

ＤＢクリニックのマタニティは２４時間オープンで、いつでも分娩に対応できるようになっている。昼間は、外来3人、マタニティ3人で仕事を回し、夜勤は3人人グループで回している。夜の勤務は長い。冬は昼の3時から翌日の朝8時まで。夏は4時から次の日の8時までだ。今まで夜勤に参加した外国人スタッフはいなかった。セキュリティの問題が一番で、今まで外国人スタッフにとって安全かどうかの判断は難しかったようだ。カブールの中心部と違って、国連部隊のパトロールも頻繁にあるわけではない。私が夜勤をはじめたのは2月に入ってからだった。一番の目的は、夜間どのくらいの患者がいて、助産師が十分に対応できているのかを知るためだ。夜間に病院に搬送された患者の中には、なんで搬送したのかはっきりわからない例や、異常を発見してから搬送までにやたら時間がかかっている場合があって、対応が不充分なんじゃないかと思ったこともあったからだ。とにかく、一緒に働いてみて、何か改善できることや、困っていることを知れたら良いなと言う思いが大きかった。

夜勤に参加して、良かったことはやはり、実際に夜中にどんな患者さんがかけこんでくるのか、良くわかると言うことだった。昼間よりも常に内容が濃かった。夜勤の患者数は昼間よりも多いのだ。平均して、夜中の勤務帯に１０件くらいのペースでお産があった。マタニティのベッド数は１１床。うちでは夜間にお産になった人は、朝まで入院してもらうことになっていた。新生児検診とワクチン接種を行うためだ。朝8時すぎ頃から、小児科医がやってきて診察を行っていた。お産の後もとりあえずいてもらわないといけないから、患者数が１１人超えてしまうとベッドをシェアしてもらわないといけなかったり、診察室のベッドを仮に使ってもらったり、ストレッチャーをベッド代わりにしてもらって対応することもあった。そんな風だから、夜間はお産が忙しくて、次々に生まれていくし、重なるときは重なるのでその辺の仕事のやりくりが大変なところだった。

夜勤のメンバーは3人ずつの固定チームで、3日に1回の夜勤を定期的にまわしていた。夜勤専門と言うことだ。多くはＭ病院で働いたことのある経験のある助産師達である。

今日はラジアとサフィナとシーマだ。もちろんレイリーにも一緒に夜勤をやってと頼んで（もう、私達一心同体ですから）。夕方のマタニティは静かだ。昼間にお産をした人達は帰ってしまったので、今は誰もいない。ちょうどこのゆっくりした時間は、ガーゼや機材の滅菌など、雑用業務をこなすのにちょうどいい。みんなで、スタッフルームで話をしながら、手際良くガーゼを織ったり、臍の緒を縛るための紐を紙に包んでいく（これをまとめて滅菌するのだ）夜勤の良いのは、空いた時間にいろいろな話ができることだ。中でもラジアはマタニティのなかで結構年配の方で、経験が多い分いろいろな話を聞くことができた。彼女はタリバンの統治時代、病院で働くことができなかったのだが、アフガニスタンの女性達のために、お産があればどこにでも出かけていった訪問助産のようなことをしていたのだ。女性が病院やクリニックに行けないで、自宅で出産をする母親にとって、彼女のような存在はどれだけ心強いものだったろう。ある時は、ロケット弾が外をとびかっており、とてもじゃないが外出なんてできない夜があった。そんな時、少し離れたとこ

ろにいる彼女の友人の家族がお産になりそうなので、助けてくれと彼女のところにやってきたそうだ、乗っていける車はぼろぼろの軽トラックだ。危険だから行くな、という教師をしている夫の声を背中に受けながら

「でも、私が行かなくちゃ。」

とトラックの荷台に乗り込み、タリバンに見つからないように、荷台に隠れてお産に向かったんだそうだ。自分の危険も省みず、簡単にできることじゃない。

「ちゃんと元気に産まれたのよ。」

と誇らしげな笑顔で、こともなげに言う彼女に、本当に感激した。ここにもこんなすばらしい人がいるんやなあと、本当に私は思わずラジアをきゅっと抱きしめてしまった。年齢でいけば私の母親のようなラジアは、日本からきたこんな小娘の私にとても優しかった。彼女はいつも産婦さんの横に寄り添っているイメージだった。夜勤をやっている中で感じたのだが、彼女はいつもどんなときも、常に女性の側に立っている。決して産婦を責めたりすることはなかった。

夕飯の準備もはじめながら、私達の話は尽きない。こんな辛かったころの話でも、ニラやラディッシュを洗いながら歌うように話してくれる。彼女達は本当にしなやかで強い。夕飯ができるころから、ちらほらと産婦がマタニティに来始めた。夜中で一番忙しいのは夜中の２時ごろなんだそうだ。今入ってきた人は初産婦で６センチ（子宮口の開大）なので、夜中のお産になるだろう。陣痛はいい痛みが来ている。食事を勧めて、時々歩くように説明する。そうこうしているうちに次の人がやってきた。こちらも初産婦で４センチ。少し時間がかかりそうだ。アナムネを聴取して、部屋へ案内しとりあえず、自分達も食事をとることにする。食事の間も交代で、産婦をのぞきにいく。お産までの経過はパルトグラムを使って定期適に観察するように、何度かトレーニングを行ったが、以前は入院から分娩まで１回も胎児の心音をチェックしていなかったこともあったようだ。この辺はちゃんとやれるようにしないと。分娩数が多いからこそなおさらだ。忙しくてちゃんと観察ができないようでは意味がない。メンバー間で、いかに情報を共有できるかと言うことが、少ない人数でやっている関係上、とても重要なのだ。

食事が終わるか終わらないかくらいで、８センチの経産婦がやってきた。分娩室に直行だ。すぐに産まれるだろう。みんなが分娩室に集中してしまうので、待機室にいる二人の様子を観察する。分娩はラジアが担当している。ラジアならまかせて大丈夫。また、一人入院だ。どうやら破水らしいけど、陣痛は無いようだ。児頭も固定していない。ＣＰＤ（児頭骨盤不均衡）かなと思う。初産婦かあ、これは多分搬送したほうがいいな。ちょっと太っているし、むくみもある。よし、搬送。

急ぎではないので、紹介状を書いて病院に行くように説明する。分娩は１件終わったようだ。正常分娩、出血も正常。赤ちゃんも問題なし。よし。

また入院だ。ちょっとこの人はおかしくない？顔色がめちゃくちゃ悪いね、土気色？性器出血がある？腹部触診で明らかな板状硬をみとめる。血圧は１４０・９０ｍｍＨｇ。これは多分、常位胎盤早期剥離だ。すぐに救急車の手配をする。意識ははっきりしている。おなかが痛いという。児心音がはっきりしない。うまく聴取できない。赤ちゃんはだめかも知れない。サフィナが紹介状を準備する。夜中だから救急車はすぐにくるだろう。

叫びながら別の産婦が、家族に抱えられながら入ってきた。４経産、そのまま分娩室だ。サフィナに早剥の患者を頼んで分娩室にいく、ラジアはお産に入ったばかりで、まだ産後の処置をしている。シーマと一緒に分娩に入る。分娩

セットを大急ぎで開ける。シーマちゃん手袋すぐつけて。産婦を分娩台に上げ、児心音を確認、オキシトシンの筋肉注射を準備し、呼吸法の説明をする。落ち着いて、大丈夫ですよ。シーマの準備ができた、早剥の人が気になって診察室をのぞく。もう、救急車で運ばれたよ。そっか、速かったね救急車、大丈夫だといいけどね。たまき、こっちもお産になりそうだよ。6センチの初産婦が全開で分娩室に搬送される。サフィナがお産につく、ラジアが外回りできるみたい。おっけー、レイリー私達はこっちにつくよ。シーマの分娩介助も丁寧にやっていて大丈夫。産休明けだけど、全然問題ないね。赤ちゃんは元気だね、よしよし、泣いてるね。急がなくって良いよ。ん、私が赤ちゃん処置するし、お母さんよろしくね。おーおー、元気だねこの子は。レレちゃん、ちょっと赤ちゃんの服家族からもらってきてもらえる？あれ、そっちももうお産になったの？早かったねえ。さすが、ロジアは赤ちゃんに服着せるのもなれているよねえ。私はどうしてもこの赤ちゃんぐるぐる巻きがにがてなのよね。いやー、やっぱり手際が良いわ。ねえ、ごめんレイリー、ここちょと持ってもらっていい？ありがとーねー。そっちも赤ちゃん大丈夫だね、ん、少し寒いからしっかり毛布でくるんでおいてね。そういえばもう一人残ってる初産婦さんは？いま8センチかあ、1時くらいになるかね。多分ね。お産後の人達は問題ない？バイタルオッケーだね。

「患者さんが来たよ。」

クリーナーのアワグルが呼びにくる。若いな、初めての妊娠？あれ、何週なの、出血？はー、流産かな。出血いつから？量はそんなに多くないね。昨日かあ、最後の生理はいつ？おぼえてないよねえ。んー、でもこれはまだ週数浅いね。なにか固まり出ましたか？出血だけ？そうか、ま、とりあえず出血多いし、流産は間違いなさそうだから、病院に搬送だね。バイタルは問題ないね。どうする？救急車でいく？タクシーで来てるからそのままいってもらったほうが速いよ。だね、多分。と言うことですので、紹介状書くので病院ですよ。多分流産で処置が必要になりますからね。しかし、搬送多いね今日。はあ。あ、そう言えば電気っていつまでなの？え、今日は特別12時までなの？なんだ、なに私がいるから？いいのに、気を使わなくって。って普通に使えるなら普段からそうしてもらいたいよね。あ、じゃあもう切れるんだね。もう12時だ。ガスランプ準備しようよ。あ、まってちょっとトイレ。行きたかったのに、行くの忘れてた(笑)　いつもこんな風なの？ひっきりなしだね。これは大変だわ。レイリー大丈夫？しんどかったら休んでてね。私必要なときは呼ぶから。ね。

　産婦と褥婦さんたちがいる部屋で、ラジアとサフィナは授乳の指導を一人一人行っている。産後できるだけ速くおっぱいを含ませる。口をパクパクする赤ちゃんの口元を指でつつくと一生懸命探して吸おうとする。ガスランプの光が、あったかくて、光に照らされながら授乳している姿がすごくきれいだ。

　ラジアちゃんつかれない？大丈夫？サフィナは元気そうだね、すごい体力だね(笑)　シーマは機材の滅菌？3つセット使ったもんね。そろそろ、交代で休憩とってね。持たないから。あ、ぼちぼちあの人お産になるかな？よかった、順調に来てるね。

　この後、全部で4件の入院があり、そのうち2人が分娩室に直行だった。夜のマタニティはそこだけが別世界みたいに忙しい。朝5時にまたジェネレーターがつく、薄明かりに慣れていたから、思わずまぶしくって目がしばしばする。サフィナは分娩後のナートを手際良くやる。日本の病院では助産師はナートしないから、いつも感心してみる。さすが。シーマは赤ちゃん一

人一人チェックして、へその緒を結んだ紐が緩んでいないか確認する。今日は正常分娩ばかりで楽だったね。空がうっすらと明けてきた。

「たまき、ちょっと外の空気吸って来ようか。」

レイリーに誘われてマタニティの外にでると、朝6時と言うのにすでにたくさんの患者さんが番号待ちをしていた。空気がひんやり冷たいのに、乾燥しているからそんなに寒く感じない。体はつかれているのに、頭だけ妙に冴えている。夜勤明けの感じ。マタニティに戻ると、産婦、褥婦さんたちは朝食の時間だった。朝はナンと卵二つの目玉焼きなのだ。クリーナーさんが手際良く準備する。食事の準備が終わると、みんながいっせいに化粧をしだす。アフガニスタンの化粧は、アイラインがばっちりですごいんだよね。おー、みんなどこかいくの？えー、別に特にないけど、化粧はちゃんとしなくっちゃ。人前でやつれたところなんて見せられないもの。そうなんだ、わたし疲れまくってるんですけど(笑)

たまきもちょっと化粧する？ほら口紅だけでも。たまき白いからね、顔色悪く見えるよね。そう？じゃ、お願い。でも、なんか変じゃない？変じゃないよー、このほうがいいよ。ふふ、アフガン好みとしてはでしょう。いいの、いいの、私はこのままで。はい、ありがとね。たまきは朝ご飯は？卵食べる？んー、疲れて食欲がない(笑)　だめねえ、食べないと元気でないわよ。みんな元気だねえ、ほんとに。感心するわー。

申し送り前に、もう一度患者をすべて回って状態を確認する。使った備品をきれいにして、元の場所に戻す。使ったものを補充する。分娩室に血液汚れが残っていないか確認する。そうこうするうちに日勤がやってきた。もう8時なんだ。おはよう、忙しかった。うん、まあまあお産があったよ。いくつか搬送もしたし。でも、なんとか回ったわ。お疲れ様ね。じゃ、申し送りやろうか。今一人分娩室に入っているから、そっち誰か一人代わってくれる？了解。こうして夜勤は終わる。レイリーと車に乗り込み、オフィスへ戻る。帰りの車で横になったらそのままオフィスまで熟睡してしまった。マタニティの夜は、長く濃いのである。

（20）自分にできることできないこと

MSFではたとえば長期の派遣になると、3ヶ月に一回は国外に出て休養を取るように言われる。自分の国の環境とは違う環境に置かれて、異文化の中でぶつかりながら仕事をするというのは、思った以上に疲れるもので、さすがに3ヶ月も立つとなんだ集中力が切れているのである。アフリカのように暑いわけでもないけれど、なんといっても

「自由に行動できない。」

ストレスは計り知れない。この3ヶ月、誰かと一緒にいないときがなかった。自分の部屋で寝るまで、とにかく誰かと一緒にいる。ちょっとそこまでっていう買い物さえできないような状況だからやはり息が詰まるのだ。アフガニスタンは危険な国ということなので、アフガニスタンの中で休暇を過ごすことは許されていない。とにかく国外に出ないと行けないのだ。ここからだと、まずバクーの空港までの飛行機代は出してもらえるので、そこからは自費でどこにでもいってこいって感じだ。くる前にまったく休暇について考えていなかったので、どこに行こうかまったく考えが浮かばなかった。たまたまゲストハウスに誰かが置いていったらしい、トルコのガイドブックがあったので、

「じゃ、トルコにでも。」

ということになったのだ。

この旅行の時期、私はかなりへこんでいた。というのは、前述の大病院とのやり取りの中で、自分の力不足を痛感していたからだ。要するに、

初めてのミッションで、甘く見られて、助産師だって言うことでつけこまれて（医者じゃないってことで）、フィルコにも
「たまきの後任は医者がいいと思うわ。」
なんて言われて、これじゃあ、まるっきし私役立たずみたいじゃないですか。ドクターができることはもちろん大きいけど、女性に付き添って、保健指導をメインにした活動において助産師ができることは大きい(と思う)。乳房のケアなど、医者よりも良く知っていることもあるのだ。それでも、アフガニスタンでは、助産師って仕事として、分娩を取り扱うって言うことだけを取り上げていて、保健指導の必要性とかなかなかわかってもらえないのだ。私の場合、自分の直属のボスにも、そう言う風に思われているって言うことで、へこんでしまったのだ。
　トルコはきれいだった。女一人で旅行ができる国だ。信じられない。一応イスラムの国なのに、全然違う。スカーフかぶらなくってもいいのだ。同じイスラムの国でも違うのねえ。男の子達の押しの強いナンパや、お店のおじさんのイスラム原理主義についてのディスカッションなど、リラックスしに来たのに・・・と思わないでもない出来事もあったけど、それはそれで、楽しい経験であった。でも、やっぱり自分のミッションのことが気になっていた。それに、おかしなことに、いつも誰かと一緒にいたせいで、一人が寂しくて仕方ないのだ。3日くらいすると、寂しくて
「アフガニスタンに帰りたい。」
という気分になっていた。自分はたいしたことはできないということは、本当に良くわかっている。でも、私のいる意味があるのかなあ。トルコにいる間中こういうことばかり考えていたので、精神的にはあまりリフレッシュできなかった。
　アフガニスタンに帰ってきてから、いつも通りの生活が始まり、ほっとしたのも事実だ。でも、自分が本当に役に立っているのかという不安が付きまとう。なんとなく、そういう気持ちってうまく表現できないのだ。困った、しかし、何がどう困っているのか。ラジオルームでメールのチェックをしているとボスが入ってきた
「おっ、たまき元気？今まで出かけていたんだ。トルコはどうだった？楽しかった？」
「んー、きれいだったよ。たくさん歩いて、足が筋肉痛になった(笑)　でもね、変な男の人に付きまとわれたり、誘われたりして、ちょっと鬱陶しい感じだった。一人で少し、寂しかったし、一人じゃなかったら良かったな。」
「そっかー、エンジョイできなかったの？」
「一応、楽しかったよ。」
私は笑顔半分で答えた。ちょっとパワーダウンしている。彼が心配して
「たまき、仕事はどう？困っていることはない？」
って聞いてきた。困っていることか、良く分からない。これは困っているのか？
「なんかね、病院といろいろあったでしょ、それで、私は自分が役に立っているのかなって少し疑問なんだよ。なんか私、役立たずな気がするの。」
と言ったら、ボロボロ泣けてきて、すごくびっくりした。仲間のところに戻ってきた安心感で緩んでいたところに、自分が役立たずなのかなーって思っていた気持ちがどどーんとぶつかって、堰を超えた感じ。彼も正直、ものすごい驚いたようだった。
「なんでそう思うの？」
「うちには産婦人科医がいないことをかなり言われたジャン、直接言われたわけじゃなくても、助産師になにができるって感じやったやん。フィルコにも私の次は医者がいいってね、私がいるうちからいわれたら、もうすでに役に立ってないから早く帰れって言われているみたい

よ。やりたいことはたくさんあるし、保健指導の面でまだまだトレーニングしたいこともたくさんあるのよ、でもそう言うの大事じゃないんやろうか？アフガンスタッフも技術的なことに集中していて、ちっとも保健指導の重要性とかわかってくれないし。」
なんか心につかえていたことを全部吐き出すみたいに、ばーっとぶちまける。いやだ、もう、ほんとに子供みたい。
「誰かひどいこと言った人がいるの？」
違う違う、誰かが悪いとかそう言うんじゃないの。ただね、自分がこの状況におかれて、すごく役立たずに思えるのよ。
「そうかー、たまきさあ、深刻に考えすぎなんだよ。病院がいろいろ言ってきたのも、結局はうちで何人か医者を雇わせたかったから、だっただろ。そういう政治的な圧力って働くんだよ、こういうところではね。たとえば、確かにたまきは初めてのミッションだし、若いし、つけこみやすいよね。でも、それを間に受けて、たまきが罪悪感もつ必要はないんだよ。だって、相手が言っている事は、実際、事実とは違っていただろ。たまきが悪いんじゃないんだよ。自分を責めて、自分のせいにして抱え込むのは良くないよ。こう言うのはチームで解決していくことなんだ。病院との事は、コーディネーションに任せてくれればいいんだから。保健指導はこういうミッションではすごく大事だよ。たまきができることはいっぱいあるよ。いいんだよ、ファーストミッションなんだよ、とにかく。始めっからからなんでもできる人はいないんだから。アフガンスタッフに伝わらないときもさ、とにかく、大きな壁があるとするだろ、はじめは崩せなくても、とにかくたたきつづけたら変わるんだよ、いつか。そういうもんだよ。」
そういうもんかな？なんかまだ、半泣き状態なんですけど。それにその押しつづけるって言うのも、なんか私的にはちょと納得できないような・・・。
「たまきさー、もっと気楽にミッションを楽しむこと考えて良いんだよ。フランス人の女の子なら、ただ、アフガンライフを楽しむことだけに集中するよ(笑)　なにって特別なことができなくてもね、アフガンスタッフと一緒に汗を流して働くことが大事なんだよ。そこにいること、それがなにより大事なんだから。ＯＫ？」
ん、わかったようなわかんないような。
「ごめん、泣いて。」
恥ずかしい、ホントに。でも、単純に楽しむって言うのも、実はよくわからないんだよ。どうやって？って思ってしまうのね。
「それはそうと、ほんとにいじめられたりしてないだろうね。」
「ないない、それは、大丈夫(笑)。私、スタッフのことはみんな好きなの。」
「それは良かった。それにしても、君はこんなこと旅行の間もずっと考えていたの？ほんとに。誰かと一緒に行けるように手配したら良かったな。」
「ありがとう、今すっきりした。聞いてくれてありがとうね。」
「お安いご用。困ったことがあったら、いつでも言ってよ。」
ミッション中に人前で泣いたのはこれがはじめて。いつもニコニコが普通の状態だから、彼はかなりびっくりしていたけど。私はなぜかすごくすっきりした。
　私にできることって、あるって言えばあるのかもしれないし、ないって言えばほんとないのかも知れない。ああー、泣き疲れた。久しぶりに泣いた。いろいろ溜まった心のクリーニングの時期だったんだろうな。日々目にする厳しい状況と、自分の小さな悩みのギャップにいつも感情がセーブされていく。自分達の恵まれた生活と、現地の人の生活の違いに心が痛むし、自

分の悩みは下らないって思ってしまうからね。でも、わかりきったことなんだ。私の考えることなんて、まったくもってくだらない些細なことなんですよ。さて、ちょっと、自分のこと考えるのはお休みにするか。肩の力抜いて、深呼吸して。はあー。また明日、いつもどおりの一日が始まるのだ。

（21）板ばさみ

アフガニスタンに来て、しばらくは状況を把握するのに時間がかかって、レイリーに助けてもらうことが多かった。大体、前任者は大した引継ぎもせずに

「あとはレイリーに聞いてね。」

だったからな。私達はいつも一緒で、彼女なくしては私の仕事が成り立たないような感じだったのだ。レイリーは一言でいうと、はっきりした性格でものすごくわかりやすい人だった。うれしかったら10メートル先からでも幸せオーラ全開なのがわかるような人で、落ち込んでいると一言もしゃべらないから。

そんなレイリーとはじめ一緒にやっていくのは結構大変だった。私がやりたいと思うことでも、レイリーが「うん」と言わなければできなかったからだ。それに、以前のエキスパットと私のやり方を比べて意見することが多かったのだ。

「ナタリアのときは、こんなに毎日クリニックにずっといるなんてなかった。バザールに買い物行ったり、パーティーもよくやったんだよ。」

「ジェニーはよく病院に行くって予定表に書いて、こっそりバザールに行ったよ。たまきももっと遊びに行こうよ。」

いったい前任のエキスパットは何していたんだって思うでしょ。いつもじゃないですよ、もちろん。ちなみに私達の直属のボスであるフィルコは、ものすごく厳しく毎日の予定を事細かく報告させる人で、常にみんなの動きを監視している人だった。自由奔放のレイリーとこういうきちきち人間のフィルコの相性が良いはずもなく、はじめっからレイリーは反抗的な態度だった。

「あんな風に毎日、人のやることを縛ろうとするなんて信じられない。自分のやるべきことなんて、みんな自分でわかっているわよ。なんでいちいち命令されなきゃなんないの？」

と言う具合だ。フィルコの彼女が来てから、いろいろなあなあになっていたことが、かなりしっかり整頓されたのは事実だ。でも、レイリーはとにかく気に入らないらしく、口を開けば

「前任者は最高のフィルコだったわ。彼女みたいに人にものを言いつけるようなやり方絶対にしなかった。」

「彼女がくる前は本当に楽しかったのに。毎日みんなに会うのが楽しくて、うきうきしてきたものよ。でも、今はねー・・・。」

こんな具合で私にとってもこれは他人事ではなかった。なんにせよ、私はこのフィルコの下で働かないといけないのだ。それに上に立つ人間が厳しいのは当たり前じゃないのかなって私はフィルコについて、わるい感情は持っていなかった。最初これがどれだけ大きな障害になるかってこと、気づいていなかっただけだけど。

フィルコはレイリーの強い性格をあまり良く思っていなくって、彼女が私にとって通訳以上の存在になっていることが気に入らないようだった。

「彼女はたまきをコントロールしすぎるわ、あの子は強いからってたまきは良いなりになっちゃだめよ。」

とくぎを刺され、レイリーからは

「彼女の言うことばかり聞いていたら、たまき楽しんで仕事できないよ。もっと強気で自分のやりたいことやれば良いのに。」

といった具合。私とフィルコの関係は別に悪くなかったし、私とレイリーの関係も悪くないのに、いつもどちらかの文句を聞く羽目になったので、結構辛かった。決定的になったのは病院とのごたごたがあった時だ。ある病院のディレクターと話し合いをするの言うので、うちのフィルコとメディコが一緒に出かけることになったのだ。私もマタニティに関しては大きく関わっているので、話し合いに参加したいとフィルコに言ったが

「たまきはこないほうがいいと思うわ。くる必要もないし。ただ、通訳が必要だからレイリーを貸してほしいんだけど。」

とのこと。残念。まあ、いいけど。

「えー、なんでたまき来ないの？」

とレイリーに聞かれたが、フィルコの判断だし仕方ない。

「私オフィスで待っているし、終わったらＤＢに行こうね。」

と伝えて、オフィスでプロトコールの作成とか、トレーニングの資料を作っていた。多分話し合いが終われば、連絡をくれるだろう。車で彼女を拾ってそのままＤＢに行けばいいや、と思っていた。すると突然レイリーが帰ってきた。

「ただいま。ねえ、私どうやって帰ってきたか聞いてくれる？一人でタクシーに乗って帰ってきたのよ！信じられる？彼女、ここから先はあなた必要ないから一人でオフィスに帰ってくれるっていったのよ！こんな目にあったのはじめて！」

と、かなり怒り狂った様子。話し合いが終わってから、フィルコとメディコはそのまま難民キャンプに向かったそうだ。が、そのときに

「ここから先はあなた必要ないから、タクシーで帰ってくれる？」

という言い方だったそうだ。信じられない思いだったけど、わかったと言うと、メディコが気にして

「女のコ一人で大丈夫？」

と聞いたそうだが。彼女は

「あら、大丈夫よね。たまきが待っているし、急いで帰ってね。じゃあね。」

とバザールに残されてしまったそうだ。女一人タクシーに乗るというのは、最近では珍しいことではないだろう。でも、要するに言い方である。こんな風に扱われたということだけで、彼女は憤慨しているのだ。“必要ないし”は、まずいんじゃないの。

「なんだ、私を呼んでくれたらそのまま迎えに行ったのに。なんで呼んでくれなかったの？変ね。で、レイリーお金どうしたの？タクシー代。」

「自分で払ったわよ。そんなことも気にしてくれなかったんだから。」

「本当、それはちょっとひどいね。聞いてみるよ、ちゃんとタクシー代は出してもらわないとね。」

「もう、良いのどうでも。この事はもう言わなくて言いから。」

彼女は相当頭に来ていたらしく、その日は結局午後仕事にならなかった。マタニティで会う人会う人にその出来事を話して回っているような状況で。これはちょっと不味いなあとおもい、フィルコに聞いてみることにした。

「ねえ、今日レイリーが一人でタクシーで帰って来たんだけどさ。」

「あー、私達行く所があったから、あそこで降りてもらったのよ。」

「うん、でもね、なんかすごくショックだったみたいよ。一人でタクシーで帰されたってさ。」

「なにいってんの？時間もなかったんだし、仕方ないじゃない。」

「ん、でも、私も車で待っていたわけだし、私を呼んでくれたほうが良かったと思うよ。一人でタクシーに乗るのは抵抗があったみたいよ。

タクシー代とかも。」
「彼女が大丈夫って言ったのよ？タクシー代？そんなこと気にしてるの？アドミのほうから出すようにするわよ。」
なんだか、あんまりレイリーが怒ったこととか気にしていない様子。この人はほんとに人の気持ちに鈍感なのか。それにしてもこの威圧的な言い方、本当になんとかならないのか。私まで腹立ってきた。もう、話すのもあほらしかったから、そこで切り上げてしまった。
「レイリー、ねえ、お金は出してくれるってよ。」
私も何気なく不機嫌になっていた。
「何、どうしたの？」
「別に。ねえ、彼女が特別なわけ？ヨーロッパの人ってああ言う風なわけ？」
「絶対彼女だけ特別だよ。今までヨーロッパの人たくさんいたけど、良い人ばかりだったんだから。」
ふーん、そうか。まあ、良いや。どうも彼女の上から言い付けるやり方が気に入らない。これではみんないやな思いするんじゃないか？でも、普通フィルコってこういうもんなのか？ダリー語話せるのに、もったいないよなあ。
なんでもかんでもすぐに
「ＮＯ」
を連発する彼女に、ナショナルスタッフがつけた名前は
「ネネ（ダリー語でＮＯ・ＮＯということ）」
やっぱり、聞く耳は持ちたい。人の振り見てわが振りなおせというし、反面教師と言うことだ。この出来事に限らず、この後も彼女のやり方に反発するナショナルスタッフは多く、私は常に彼女の悪口を聞かされる立場だった。私は一緒に住んでいるわけだし、オフィスでは間に立って気を使うし、家でも彼女と一緒に過ごさないといけないしで、リラックスできることがなかった。私より一月あとにやってきたひさみさんはもっとストレスを感じていたようだった。英語で思うように言い返せない分、不利だったようだ。女ばかりだと」ぎすぎすしてしまうものなのだろうか。
毎朝のミーティングから、スタッフの表情は硬い。
「あの件についてはどうなっているの？そっちが優先よね。」
「何言ってるの、全員に車があるわけじゃないのよ、今日じゃなくても良いことよね。他の人の動きも見て予定を決めてちょうだい。」
自分の予定が最優先で、他のスタッフの仕事内容にまで細かく注文をつけてくるもんだから、アフガンスタッフはいつもうんざりしていた。
「全員に車はないだって??車をアレンジするのがコーディネーションだろう！」
と、ブーイングの嵐。そして、彼女はそんなことどこ吹く風。はああ、これ疲れる。何が疲れるって、彼女に言っても、私の意図するところがまったく伝わらないし、感覚が違いすぎてダメなんだよ。
アフガンのナショナルスタッフに対する評価表作成の時は、私はレイリーの評価を一緒にやることになったんだけど、彼女はレイリーが通訳以上の仕事をすることをいやがっていたから（仕事内容について、私にアドバイスするなど）
「これはトランスレーターの仕事じゃないわよね。」
なんてはき捨てるように言ったりしたものだから、私は内心レイリーが怒り出すのではないかとどきどきしていた。私は、どうしても争い事が嫌いなのだ。事なかれ主義と言われても、争い事はきらいなの！
「あの人は私を押さえつけようとしている！」
レイリーの反感は大きくなるばかりで、正直困ってしまっていた。

あることがきっかけで、ボスがレイリーの話を聞くことになり、すべてのスタッフを巻き込んでかなり険悪な人間関係だということが発覚し、コーディネーションで話し合いを持つことになった。今までのいろいろなことを指摘された彼女は

「ナショナルスタッフにきつく当たり過ぎた。」

と謝罪することになったのだった。レイリーは自分の不満をコーディネーションが取り上げてくれたと言うことで満足し、彼女のスタッフに何か頼むときの態度も改善し、一時期ほどのぎすぎすした関係はなくなった。だが、彼女は自分の任期が終了するときに、スタッフに挨拶もせずに、フランスに発ってしまった。スタッフは

「お別れも言えなかった。」

と残念を通り越して怒っていた。アフガニスタン人にとって、別れの挨拶をし、旅の安全を祈ると言うのは大切なことなのだ。例えば、関係の良い人じゃなくても。だけどさあんな風に気まずい目にあったら、こっそり帰りたくなるサー（苦笑）ほんとに勝手なんだから、もう。アフガンスタッフと一緒に働くのは難しい。相手の言いなりになるわけにもいかないし、でも相手に自分を好きになってもらえないと、仕事は進まない。で、エクスパットに何を一番望むのか聞いてみた。

「良い人であること、かな。技術とか知識じゃない、人として優しさにあふれた人。実は技術的なことはあまり望んでいないのよね。だから、たまきは大好きよ！」

なるほど。はあ、これ、よろこんでいいのかな、しかし。ふう。

（22）訪問診療できますか

クリニックで働いていると、クリニックの中だけでやることに限界を感じてくる。地域にかなり認知されてきているとはいえ、まだ人々に対する教育が行き渡っていないなと感じるからだ。先にも触れたように、家族の理解がなくて病院に行けなかった例がいくつもあった。こういうことから、継続して患者をフォローアップできないだろうかという話が持ち上がった。私が問題のありそうな人を全部フォローアップしてもいいけど、実際私の仕事がマタニティ全体のスーパーバイズだから、こればかりに集中してもいられない。それで、特にフォローアップをできる人を一人雇ってはどうかと言う話になったのだ。

フォローアップとか、家庭訪問をしようと思ったときに、一番面倒くさいのは車の手配だ。カブールプロジェクトで自由に使える車は3台。そのうちの一台がロジスティックにとられてしまっているし、フィルコがミーティングで車を使いたいと言えば、クリニック組の使える車は1台だ。その1台を使って家庭訪問に行かれてしまっては、クリニックには車がない状態になる。エクスパットは必ず車と一緒に行動しないと行けない。不測の事態に備えて、いつでも避難できるようにするためだ。すると、コーディネーションがもっている車を借りる事になる。それでもコーディネーションは、他のＮＧＯやアフガニスタンの保健省とのミーティングなどに出かけることが多いので、いつも空きがあるとは限らず、毎朝の車のやりくりは、非常に面倒なものだった。

それに加えて、仕事をし難くするのはセキュリティルールだ。どこかで事件が起きるとしばらく家庭訪問など、コミュニティに入っていくことを制限されるのだ。そういうわけで、実際患者フォローアップのプロジェクトを立ち上げても、足止めを食らうことが十分にありうるということで、なかなか前に進まない話ではあった。以前ＤＢエリアで地域の人を雇って、教

育グループを作ったことがあるようだ。定期的に人を集めて教育をしたり、調子の悪そうな人がいれば、クリニックに来るように薦めるなどして働いていたようだ。

「あのグループがあったときは良かったわよ。家族の理解がなくて病院にいけないなんて聞かなかったもの。」

とレイリーが教えてくれた。では、なんで活動中止したのだろう。実はこれもなかなか難しかったのだ。報告書によると、コミュニティに入っていく活動で、毎日地域の家々を訪ねて回っていたらしいが、本当にちゃんと仕事をしているか管理するのが難しかったそうだ。要するに、現地のスタッフに任せることになるんだけど、本当に活動しているのかチェックするのが難しかったらしい。日がな一日どこかでお茶を飲んでいても、わからないということだ。しかも、そのグループメンバーの親戚ばかりを訪問して、平等に活動するということができなかったと言うところがアフガニスタンらしい。ありがちな問題だが。とにかく、身内に都合の良いように動いてしまいがちなのだ。そんなわけで、その活動も中止となってしまったわけだが、コミュニティグループを立ち上げる必要性はやはりあるのではないか。とにかく、ハイリスク妊娠の人達だけでも、ちゃんと病院に行っているか、その後どうなっているのかフォローしていきたい。そこでフィルコが、あるＮＧＯを紹介してくれた。ＴＤＨというスイスのＮＧＯで、おもに助産師による家庭訪問を行っている団体だ。ＤＢ地域でも活動を展開しているこのグループは、カブールに事務所を構えてアフガン助産師を雇って仕事をしていた。

ＴＤＨは、カブールのいくつかの地域に分かれてグループで活動している。ＤＢエリアで働いている助産師は2グループ4名。地域の各家庭をひとつひとつ回って、妊娠している人や、産後すぐの人、さらには今お産になりそうな人を見つけて、定期的に訪問するやり方だ。グループは保健省の管轄にあるＭＣＨクリニックを拠点としており、病院からの紹介状を持ってフォローアップの依頼を受け付けている。朝の9時までは、こうした新しい依頼を受けるためにクリニックで待機し、9時からは家庭訪問に出かけていくのだ。家庭訪問はそうした紹介された患者さんのほかに、患者の家族が直接クリニックにやって来たり、近所の人からの情報をもとに患者の家を訪ねたりしていた、私達のクリニックでなかなか病院に行ってもらえないケースがあるのと同様、家庭訪問でも、さまざまなリスクを負った妊婦さんが病院に行くことを拒否している場合が多く、その家族を含めて説得することも仕事の中に含まれていた。ＴＤＨで働いている助産師の多くはかなりの年配助産師であるため、家族の説得ということに関しては適任のように思われた。アフガン女性の年齢は見た目からはわかりにくいのだが、明らかに６０は越えている人が現役バリバリで働いている。彼女達は教育を受けた助産師で、病院での経験がある人もいたが、多くはプライベート助産師として、家庭での分娩を請け負ってきた人たちだ。アフガニスタンのお産の状況を知り尽くした人達が、家庭訪問をしてくれるということは、女性にとってはさぞ心強いことだろう。一日に5件から１０件の訪問ができればいいと言っていた。時々ちょうど分娩に遭遇して介助にあたることもあるといっていたが、主な仕事は妊婦検診、産後検診、新生児検診、家族計画指導であった。

彼女達が拠点にしているクリニックのひとつを尋ねて、活動について質問をしてのだが、ＤＢクリニックとは比べ物にならないほど、設備は不充分で、クリニックにあるトイレも、使用後手も洗うところがないような状態であった。いまにも崩れそうな小さな建物の2階が、

クリニックだ。ＴＤＨ助産師の他に、保健省から派遣された予防接種班が、子供達に予防接種を行っている。小児科の医師が一人駐在していたが、診療の数自体は多くないようだった。ＴＤＨの部屋には一応診察用のベッドがおいてあるのだが、それ以外の備品は一切なし。窓にガラスが入っておらず、ビニールをテープで貼ってしのいでいるような状態、床はタイルがはがれているし、壁には無数に亀裂が入っている。もちろん電気はない。この設備の違い。ＭＯＨはすべてのＭＣＨクリニックをサポートできるほどの十分な財力がないのだ。よって、ＭＳＦのようなＮＧＯが支援して設備面でもサポートしてもらえない限りは、こんなレベルでしか運営できない。ＴＤＨ助産師の使用している備品はいろんな団体から寄付されたものだが、十分とは言えない。必要最低限の備品で、なんとか回しているという感じであった。

「ＭＳＦがこのクリニックも援助してくれるといいのに。」

とＴＤＨ助産師は言っていたが、距離的にもそこそこ近くに位置するこのクリニックを支援するよりは、患者を受け入れて今のＤＢクリニックを充足させたほうが懸命だと思われた。

ともあれいくつかの話し合いを経て、ＤＢの患者で病院に紹介したケース、病院から退院したケース、家族の理解が十分に得られなかったケース等フォローアップの対象として受け入れてもらえると言うこと、病気の患者を見つけた場合はクリニックに紹介してもらって構わないということなどで合意した。こうやって少しずつ、クリニックの外での活動にも関わっていけるといいのだが。

ちょうどそのころＤＢのクリニック付近で、強盗事件があり、それを捕まえようとした警官一人が殺された。そのために私達はますます、クリニック以外での活動は中止された。アフガンスタッフのみで運営ができて、活動の中断の心配がないこのような組織に、仕事を依頼できるのはほんとうにありがたいことだった。たったひとつの事件が活動内容を常に左右するような状況で、仕事を続けていくのは本当に大変なことだ。外国人ボランティアが入ることで、活動をスムーズに回せることもあるけれど、近頃のアフガニスタンの状況だと、外国人がいること自体が危険に結びついている感もあり、プロジェクトの運営の障害になってきている。自分の身に何か起きれば、アフガニスタンで活動しているすべてのＭＳＦチームに影響を与える。自分一人の問題ではないのだ。

「これじゃあ、全然仕事にならないわ。」

家庭訪問を活動の重点にしている、心理療法士のクリスは不満のようだったが、コーディネーション自体も、カブールで何か事件が起きたときに、安全レベルをどこまで上げるかということに苦慮していたようだ。

アフガニスタンにいて、どんな時に身の危険を感じましたか、と言う質問を何度も受けた。私は実際に身の危険を感じたことがない。私は常にアフガンスタッフと働いていたし、彼らと一緒にいて、地域に入って行っても、珍しがられるけど何かひどいことをされるなんてことはなかったからだ。みんないつも、どちらかというとボランティアの人間を大切に扱ってくれた。夜勤をしていたときも、マタニティのスタッフは

「夜中は危ないから、たまきは絶対に外に出ちゃだめよ。」

と、とても心配して、マタニティに私がいることを知られないようにしてくれていた。地域の人の近くで、地域の人のために働いている分には、攻撃の対象にならないような気がしていた。地域からはなれて、活動を事務的なものに限れば限るほど、ボランティアの存在が実態の見えないものになっていくのではないだろうか。難

しい問題である。訪問診療も簡単なことのように見えて、あちこちに障害があるのである。

（23）クリーナーさんたち

ＤＢクリニック、マタニティは管理運営の面で、いろいろなＮＧＯが参考にしたいと見学に来ることが多かった。特にマタニティは、多くのＮＧＯが母子保健関係の活動をしていることもあり、見学者が多かった。ＤＢのマタニティは、ＭＯＨがカブールにはこれ以上病院は建てないと決めるぎりぎり前にスタートしていたので、幸運にもプロジェクトのオープンができたのだが、新しくクリニックを建てたいと思っているほかのＮＧＯはＭＯＨの許可が出ずに苦労していた。

見学にくる人は、皆クリニックの清潔に保たれている様子に感心していた。他の病院などを見学に行っても驚くぐらいきたないからだ。Ｒ病院に行ったとき、トイレを借りようとして、あまりの汚さに躊躇した。水浸しの汚れた床に、汚物は散らばったまま、ドアはしまらないと行った具合だ。病院でこれじゃあ、とがっくりきたものだ。産科の病棟にいたっては、あちこちがとにかく血なまぐさい。血液の腐ったような臭いが、病棟中に充満していて、酔いそうだった。これが普通なのかも知れないけど、とにかく清掃が行き届いていない、というのが一般的だった。

ＤＢマタニティはその点、かなり清潔には注意をはらっており、毎日の清掃、分娩後の清掃のほかに、毎週水曜日に大掃除を行っていた。全員で物品の点検もできて、きれいにできてとてもよかった。すべては徹底したクリーナー教育の賜物だ。

一度、みんなが勝手に大掃除をキャンセルしようとしたことがある。私が赴任してすぐで、私のことを試していた時期だったろう。当日にクリーナーさんたちが

「今日はみんなが集まらないからやめる。来週やる。」

と言い出したのだ。こういうことはしょっちゅうで、少しでも仕事を減らそうとする。私は、自分が甘く見られているのはわかっていたけど、これはもうマタニティ創設以来続いている仕事で、やめることに同意したら、なし崩し的になってしまうことが目に見えたので、断固反対した。

「みんながやらないなら、私一人でもやるから！」

と譲らずに掃除をはじめた。助産師たちは驚いていた。アフガニスタンでは、職種がしっかり別れてくる。掃除は助産師の仕事ではないのだ。要するに私の仕事でもないのだ。助産師に掃除でもさせようものなら

「私はクリーナーじゃない！」

って反発されてしまう。だけど、マタニティの運営に関する仕事の責任は私にあるし、助産師だって、マタニティを清潔に保つということに関しては責任があるはずだった。レイリーは私に付き合って掃除をする羽目になり

「わたし、こんなデッキブラシもって掃除するのはじめて。手にマメができちゃったわ。」

とぼやいていた。アフガニスタンでは、教育を受けた人と、そうでない人の立場がはっきり別れるから、助産師がクリーナーと一緒になって掃除をするなんてなかったのだ。私は人の仕事を取るのは良くないと思うけど、教育の有無で立場がはっきり分かれてしまう状況はあまり良くないように思えていた。助産師によってはクリーナーさんを、使い走りにしている人もいて、なんだかちょっと違うなと感じていた。

アフガニスタンでは、年配の女性を呼ぶとき敬意を表して、名前の上に

「ホラ」

という言葉をつける。

「ホラ　たまき」
と言うような感じ。
「たまき　おばさん」
と言うような意味。ほとんどのクリーナーさんは年配の方で、みんな厳しい生活環境に置かれていた。アフガニスタンでは、教育を受けていない人で、クリーナーなどの仕事につける人はラッキーだ。ほとんどの人が職につけない。DBマタニティで雇われているクリーナーさんは、ほとんどが貧しい生活をしている人だ。ある人は、働いていたパン屋を突然解雇されていたが、そう言う人を選んで雇っている。みんなを雇うことができないのが残念だが、少しでも助けになれればと言うことだ、その中の日勤クリーナーのモセナは未亡人で5人の子供を女手ひとつで育てていた。モセナは夫を病気でなくしている。その後5人の子供を育てるためにクリーナーになったのだが、彼女は時々精神的に落ち込んで、泣くことがあった。彼女は、人に大きな声で
「ホラ　モセナ！」
と呼ばれたりすると、精神状態が不安定になるのだ。
「私は、時々自分が情けなくなるの。なんで、夫は死んでしまったんだろう。彼が生きていたら、私はクリーナーになんてならなくて良かったのに。こんな仕事をすることになるなんて。恥ずかしい。」
と言いながら、シクシク泣くのである。とても気の毒だと思った。彼女はとてもりっぱに子供を育てているのに、自分の仕事を恥じているなんて。未亡人の女性の置かれている状況はとても厳しい。
「あなたが5人の子供を立派に育てているんじゃないの！クリーナーであることを恥じることなんてない！あなたはすばらしい女性なんだから。」
と言って、レイリーと2人励ました。私みたいに、養わないといけない家族もなく、根無し草みたいにフラフラしている人間とは、背負っているものが違うのだ。本当に頭が下がる。アフガニスタンには、戦争などで、夫を失った女性たちを支援するNGOがあるが、未亡人の数が多すぎて、すべての人を援助できる状況にはなかった。ほとんどのクリーナーさんは裕福とは言えない生活をしている。でも、みな、本当にお母さんのようにやさしかった。夜勤のときにも疲れて少しの間横になっていたときに、そっとブランケットをかけてくれた。彼女たちは本当は働き者で、夜勤の時も常に掃除や洗濯をしていた。
　こうして働いてくれる女性たちがいるからこそ、このマタニティを運営できるのだ。こうした女性たちを支援する仕組みが必要だと感じた。

（24）偏見
　ここに来て非常に強く感じたのは、国籍に対する人々の偏見である。特に歴史によるもので、イギリス、ロシアの印象はもちろんあまり良くない。それでも、今一番アフガンの人が偏見を持っているのがアメリカである。アフガニスタンの人は、アメリカの空爆によってアフガニスタンが解放されたと思っている人はそれほどいない。それよりも身近に誰かが空爆で怪我をしたとか、亡くなったとか言うことが彼らを傷つけている。それに他の国に干渉されているということは十分不快なのだ。
　自己紹介をするときに、国籍を言うのにいつも結構勇気がいる。ことさら自分が日本人であることを意識してはいなかったのに、国籍のイメージだけで結構受け入れられたり、られなかったりすることがあるからだ。アフガニスタンでも日本はアメリカに協力しているにもかかわらず

「日本はアメリカに脅されているんだろう。かわいそうに」
とか
「日本人は良い人達だ。アフガニスタンをたくさん助けてくれている。なんで日本はそんなにアフガニスタンに親切にしてくれるんだ。」
と聞かれて、妙に罪悪感があったのも事実だ。うがった見方かも知れないけど、政治において無償の親切ってありえないんじゃないか。間違いなく国益と言うものが見え隠れする。だから各国の援助でも、自分達が建てた建物や寄贈したものに、いちいち自国の国旗をつけてしまったりするんだろう。
　アメリカと言う国に対して、自分自身もかなり悪い感情を持っていたことに気づかされたのは、病院であるＮＧＯの人に会ったときだ。病院に搬送患者さんの情報を得るべく出かけていったときに、総看護師長室に2人のＮＧＯ職員がいた。
「ねえ、話しかけてみようよ。」
とレイリーに押されて、二人に話しかけてみた。彼女達はアメリカのキリスト教系のＮＧＯから派遣されている助産師だった。アメリカ人と聞いてレイリーの顔が引きつっていたけど、話してみるととても気さくで良い人達なのだ。なんでもこの秋にマタニティのプロジェクトを開きたいと思っていて、その視察に来ていると言うことだった。
「それなら是非、うちのクリニックを見にきて！参考になるよ。」
というと、びっくりした様子だったが、是非にとあちらのほうから申し込みがあった。
「ねえ、たまきアメリカ人にも良い人はいるのね。」
とレイリーに言われて、私も同じように感じていることに気がついた。アメリカ人でもって言うのも変な話だが、ここ最近のアメリカの国としての態度が、アメリカ人を見る私の目を変えてしまっていたのだ。ちょっとショックだった。
　数日後、約束通り彼女達は私達のクリニックを見学に来た。ちょうど夜勤に入っているときだったので、夕方からの訪問だった。夜勤のスタッフもアメリカ人と聞いてはじめ顔が引きつっていたが、しばらく話しをするうちに打ち解けていた。アメリカのイメージが圧倒的に悪いこの国に来て、ＮＧＯとはいえ活動をすると言うのはとても勇気が要ることではないだろうか。アメリカ人と聞くだけで、敵意を剥き出しにする人もいる中で、自分達の良心に従って人を助けたいという純粋な気持ちから活動をしている人もいるのだ。話していて、実は本当にアメリカの人というのは大らかで明るい人が多いんだよなあと言うことを感じた。その人達が特別なのかも知れないけれど、ＮＧＯで出会ったヨーロッパの人達よりも、なんというか威圧感がなくて、人懐っこくて、やさしい人だなと感じた。こんなところまで来て活動しようと言う人に、悪い人はいないようないがするけど、本当にそうだった。
　海外で活動するとき、望むと望まざるとに関わらず、自分の国がどう言う国なのかということを考えさせられる。国として起こしたことは、個人的に私は反対だったと言い張ってみたところで、同じひとくくりにされてしまうのだ。アフガニスタンにとっての日本が良い国であることを願う。それにしても、国のもつイメージだけで、その人を決め付けてしまうというのは、いかがなものか。自分のなかにある偏見にも気づくことができて、なんだかとても貴重な体験をしたように思えた。

4　アフガニスタンライフ

（1）アフガニスタンの朝の挨拶は長い。

　アフガニスタンの朝の挨拶は、長い。みんな

そう感じると思うけど、とにかく長い。
「サラームアレイコム」
から始まって
「おはよう、げんき？調子はいい？幸せ？疲れていない？云々・・・・・(最終的に)
元気です、ありがとう。」
で終わる。それが、会う人会う人繰り返されると言う具合である。これ、結構疲れます(笑)
でも、これを怠っては行けません。礼儀を重んじる国です、アフガニスタン。挨拶もろくに交わさずに
「ねえ、昨日のこの書類の件なんだけど。」
なんてはじめちゃった日には、大変気まずい思いをします。そんなわけで、私も基本の挨拶は結構すぐに覚えた。なんていったって人間関係だからだ。始めはなんとなくうっとうしいと思っていた挨拶だけど、今となるとものすごく懐かしい。女性同士は、挨拶を交わしながらほっぺに3回キスをする。時々それ以上になることがある。うれしいときとか、久々に会ったときとか。確かスイスでも3回だったな。フランスでは大体2回だから、アフガン人が3回キスするから最後のキスのタイミングがあわなかったりしてた。スキンシップはあまりない国だと思ったから、はじめこのキスにはびっくりした。普通アフガニスタンの男性は女性と握手とかしないんだけど、長くＭＳＦで働いているスタッフは外国人慣れしていて、普通に握手を交わしていた。なかに、すごくお調子者のロジスティシャンがいて、彼はいっつも
「たまーきーちゃーん、たまーきちゃん。」
と歌いながら近づいてきて、しなくってもっても良いのにほっぺに必ずチューをするのだった。もお、絶対こんなのアフガンの挨拶じゃないぞ！ってチューされそうになると
「いやー、ひげが痛い！」
ってにげていたけど、そのうち仕方ないから好きにしてって感じだった(笑)
　実は6ヶ月もアフガンにいたけど、私のダリー語はほんとに上達しなかった。途中講師を雇って、みんなでダリーレッスンを受けたから基本的な会話のセンテンスを覚えはしたものの、仕事は英語でやっていくから、どうしても楽なほうに流れてしまって。それに英語だって不自由しているような状態で、なかなかダリー語まで手が回らなかった。門番さんやクリーナーさんは英語を話す人が少なくて、あまりお話ができなかったのは残念だったけど、みんないつもにこやかに迎えてくれて本当に温かかった。独身の若い門番のアシュマット君に、マタニティでの診察で覚えた
「子供は何人ですか？」
なんて聞いちゃっても、笑って
「結婚していないので、子供はいません。」
と答えてくれたりして。その後、彼は面白がって
「子供は何人ですか？」
と聞いて来たりして、笑えた。こわい顔している人でも、みんな茶目っ気があって。
　私はアフガニスタンの挨拶が好きだ。毎日毎日同じ事を繰り返すことなんだけど、実は毎日同じ事を繰り返すことができる幸せを、かみしめているように思うから。日本にいたときには、こんなに毎日すべての人に密な挨拶をしていなかったな。挨拶は一日のウォーミングアップだ。今日も一日がんばろう。

（2）アフガニスタンの人はとにかくお茶
　こっちに来てから、お茶を飲む量が増えた。アフガニスタンの人はとにかくお茶を飲む。水はあまり飲まない。ボトルの水以外は衛生面で問題があるから、煮沸して飲めると言うのでお茶が多いのかなと思う。大体2種類、ブラックティーとグリーンティーだ。私がアフガニスタンに着いた時は冬だったから、お茶と言えばブ

ラックだった。普通の紅茶みたいな感じ。でも強い味はしない。夏になるとグリーンティーが多いらしい。なんでか良くわからないけど、日本で言うところの麦茶みたいな感覚なのかな。暑い地域ではグリーンティーが多いみたいだ。香り付けのカルダモンをいれると本当に良いにおいがする。

アフガニスタンで面白いなあと思ったことのひとつは、どこに行っても、誰に会っても

「チャイ　メホリ？　（お茶のむ？）」

と聞かれることだ。なんだかちょっと日本みたいでしょう。いい感じ。アフガニスタンでは、お客さんにお茶どうですか？と聞かないのは失礼にあたるらしい。そして、お茶のむって聞かれてもはじめは一回断るのが流儀らしい（本当かな）レイリーがいってたんだから間違いないと思う！そう、で、それでも

「そんなこと言わずに是非！」

と言われたら

「そうですか？じゃあ」

といってお茶をいただくんだそうだ。いや、これほんと日本人みたいだね。私は仕事柄病院に行くことも多くて、そこのドクターとか看護師長さんとお話することがよくあったのだけど、お茶するって結構大切。お茶しながら

「最近うちのクリニックから来た患者さんはどうですか？うちの助産師が搬送した例で、処置が悪かったのとかないですか？」

なんて話をして、病院との関係を良くするっていう。お茶を飲みながらって良いんですよ。はじめは

「時間がないから。」

「他に行くところがあって。」

と断ることが多かったんだけど、少しずつ慣れてきたら、ありがたく頂戴することにした。一つ釜の飯を食うって表現があるけど、これとおんなじくらいひとつポットのお茶を飲むって大事だねえってしみじみ思えたね。

道端を歩いていても、手押し車のおじさん達が休憩しているところを通りかかっても、お店で買い物をしても、どこにいてもお茶を薦められる。うちが貧しくても、尋ねてきた人にお茶を必ず出してもてなしてくれる。アフガニスタンは、本当にもてなしの国だ。薦められたお茶は、ただのお茶じゃなくて心なんだなあとしみじみ思うようになった。

で、毎日お茶ばかり飲んできたら、こないだ鏡を見てびっくりした。歯が茶色くなっていたのだ。これって歯磨きの宣伝でやってるステイン(しみ)ってやつ？ひゃー、ちょっと歯磨き真剣にやらなくっちゃだわ。お茶も飲みすぎに注意だな。

（3）アフガニスタンの食べ物事情

アフガニスタンのご飯って想像つきますか？つかないよねえ。私はアフガン料理なんてまったく知らなかった。でも、一応くる前に「旅の指差し会話帳」って本でなんとなくアフガニスタンの食事について調べておいた。見た目あまりヘルシーじゃなさそうだった。で、実際ほんとうにヘルシーじゃなかった(笑)　アフガニスタンの人のコレステロール値を計ってみたい！と思ったくらい。

基本の食べ物から説明すると、主食「ナン」だ。道端には必ずと言って良いほどこのナンのベーカリーがある。でっかい釜の中で壁に生地をぺんっと貼り付けて、あっという間に焼き上げるひらぺったいパンだ。これがなくてはアフガニスタンの食事は始まらないでしょう。で、他にお米も食べる。基本的にピラフのように羊の肉とにんじんとレーズンで炊き込んだ「カブリ」と言われる料理の仕方が多い。肉を加えないと「パラオ」と呼ばれる。あとは肉の煮込み系料理、ナスとトマトの炒め煮みたいな料理。餃子みたいに肉の生地を小麦粉の生地で包ん

で蒸した「マントゥ」肉の代わりにニラを刻んだのを包んで、ひき肉のソースをかけた「オシャック」サラダはあまり出てこないんだけど、レストランでサラダというと、ただの玉ねぎのスライスとねぎを切ったのと、トマトのスライスとコリアンダーが出てくる。結構香菜が使われていて、においの強い野菜も生でそのまま食べていて驚いた。ニラって生で食べたことなかったからな。あとは良く出てくるといえば、以外にフライドポテトが多かった。あとは、フライドチキンとかも。なんかファーストフードって感じじゃない？そして、羊の肉をこれでもかって食べたのは、アフガニスタンに来てはじめてのことだった。

知ってのとおりイスラム国家のアフガニスタンでは、豚は絶対食べないので、その代わりによく羊がでてくるのね。道端の肉屋さんのリアルなこと。今首を落とした、まだ皮もはいでいないような羊さんや牛さんがブラーンと。その下にはきれいにこっちを向いて並べてある羊の頭、頭、足、足。こないだは自転車の後ろに何か積んであるなーと思って見ていたら、切り落としたでっかい牛の頭だった。言ってみれば、自分達が生きるために殺して食べているっていう現実を、まざまざと見せ付けられている感じね。だけどこれでベジタリアンになろうなんて、かけらも思わなかったけど。

それにしてもアフガニスタンにきて、出てくる料理がほとんどものすごく油っぽかったので、結構辛かった。健康食好きの私としては、海草とか、根菜とか、揚げ物以外の料理とか食べたいんだけど、日本食みたいな料理は到底期待できなかった。油と言えば、一般的に結構使われているのが、缶に入った固形の植物油。白っぽく固まったそれを、スプーンにこれでもかってすくって使っているのを見たら、なんかカロリーの高さが想像できてしまった。油つかわないと、料理した気分にならないみたいね、

マタニティではどうやら、昼の食事をコックさんが作ってくれていたんだけど、なかなか不思議な組み合わせで、ご飯と豆の煮たのとナン、というこれ全部炭水化物なんじゃないの？、ご飯にほうれん草の炒めたような煮たようなのをかけて食べたり（これもすごい油っぽいです）。しばらくしたら、慣れたけど、さすがにおなかを壊したりしているときは、とてもじゃないけど食べられなくて、ナンだけかじったりしていた。

私達のゲストハウスにはコックさんとクリーナーさんがいて、毎日掃除と料理をやってもらっていたので、かなり楽させてもらった。コックさんは毎日一生懸命メニューを考えて作ってくれていたし、クリーナーさんも季節がかわるごとに私の机に違う布をかけてくれたりしていた。私はＭＳＦのフランスセクションからの派遣だったので、ボランティアはやはりフランス人が多くて、コックさんもフランス人好みに食事を作っているようだった。手書きの、フランス人好みの料理をつづった料理メモを発見し、その

「涙ぐましい努力」

に感じ入ったものだ(笑)

アフガニスタンに来ても、フランス人はフランス人(笑)。食べ物の好みがうるさくて、ものすごくびっくりした。中でもフィルコは、胡椒の入ったスープがどうしても食べられないらしくて、毎日毎日文句を言っていた。そのうちコックさんも味をどうしたらいいのかわからなくなって、水で薄まったようなおかしなスープになってしまっていた。

「彼はアイデンティティを失っちゃったね。」

クリスとカリンと私はしみじみ気の毒に思ったものだ。

「食事はまず、アペリテフからはじめなくっちゃ。」

なんて言われたって、ねえ。さっさと料理をあっためてしまったら
「たまき、アペリテフにはゆっくりお話をしながら時間をかけるものよ、30分はかけなくちゃ。」
って、やってられるか！といって怒りそうになっちゃったり。フランスではものすごく食事に時間かけるらしいね。アペリテフに始まり、デザートに終る。一緒に暮らすうちに慣れたけど、はじめはなんだか面倒くさかったものです。でも、慣れると結構良いんだけどね。ゆっくり話しながら食事するって、実は大切なことだけど、自分はおろそかにしてきたなあと思ったから。アフガニスタンでフランスや他の国の文化を学ぶって感じ。MSFフランスのミッションはフランス語を話されることが多くていらつくって聞いていたけど、うちのチームは比較的そういうことがなかった。ただ、フランス人好みの食事は優先されていたけど。
私実家から送られてきた日本茶を飲ませたことがあるんだけど、その時クリスは
「ねえ、この味何かににてるわよねえ、ええっと、ああー水槽の水の味？」
ってこらあ、飲んだことあるんかい！！とにかく失礼なんだよもー。自分が嫌いでもサー、飲んでいる人がいるのに水槽の水とか言うかな普通。そんな調子で、マイペースな彼女から発せられる言葉にいちいちカチンと来ることもあったけど、何気にちくりとやり返すコツをつかんだ。ただでは黙っておらんぞ。何の話だったんだっけ？

（4）歌と踊りのアフガニスタン

アフガニスタンの人は良く踊る。人が集まるところで、音楽と踊りは欠かせないものだ。かつて、タリバン統治時代、人々は音楽のテープをこっそり隠し持ち、見つからないようにこっそり聞いていたそうだ。タリバンによって没収されたテープが、電線にテープを引き抜いた状態でつるされていた写真を見たことがあるが、それぐらい音楽に対する締め付けは厳しかったようだ。こんなに踊りの好きな人達から、楽しみを取り上げて、一体、何を楽しみに生活していたんだろうって思う。踊らないアフガン人なんて想像できない。
パーティーを開くと、まずはお茶しながらお菓子食べたり、ご飯食べたりして、そのあとみんなでいそいそ場所を片付ける。で、だれともなくカセットを持ち出して、踊り始めるという感じだ。
アフガニスタンの音楽を表現するのは難しいんだけど、タンブールっていう、大きな琵琶のようなギターみたいな楽器とか、太鼓とか、アコーディオンみたいな楽器を使って、メロディーを作る。もともと昔からの音楽があって、音楽ごとの踊りがあるようで、私が好きだったのは、
「タタン」
と呼ばれてた踊り。パシュトゥーン人の人がよく踊る踊りらしいけど、何人かで輪を作って踊る踊り方で、手をたたいて、その手を広げながらステップを踏んで、少しずつ回りながら踊ってく。途中で曲調がかわって、クルッと回ってステップを
「タタン、タタン」
と踏むのだ。結婚式でもよく踊られているこの踊りは、なんだか狩猟民族の踊りみたいって思った。
他の踊りは、好みで好きなように踊って良いんだけど、中には物語を表現するみたいに踊る踊り方がある。二人で踊っているんだけど、一人が女性役一人が男性役で、誘い合うようにして踊るのだ。言うの忘れたが、男性と女性は一緒に踊らない。レイリーいわく
「男の人の前で踊るなんて恥ずかしいことで

きないわ！」
とのこと。でも女性ばかりのパーティーに行くと、女性もすごく上手に踊るんだけど。
そうそう、そんなわけで、踊りの中で男女の物語を表現したりもしていて、奥が深いなあって感心した。私は音楽にあわせて、なんとか体を動かすくらいだから。音楽がなると、誰かが先陣をきって人の輪の真中で踊り出す。ひとしきり踊ると次の人を引っ張って、その人にバトンタッチっていう具合だ。パーティーは食事の後も2時間くらい続く。その間ずっと踊り続けている。踊りはアフガニスタンでは本当に大切な生活の一部分なのである。私達ボランティアにとっても、パーティーでみんなで踊るというのは、楽しいストレス解消法だった。本当なら女性のエキスパットは男性と一緒に踊るべきではないんだそうだけど、例外例外。普段踊るってなかなかないから、私はこのパーティーやるのが結構すきだった。アフガンの音楽にあわせて、アフガンと他の国の混ざったような踊りをする。国際交流っていうんだろうかね、こう言うの。

（5）電気のない冬、ジェネレーターの日々

アフガニスタンには電気が十分に供給されていない。首都カブールにあってもそれは同じ。クリニックのあるＤＢエリアに関して言えば、電気さえ通っていない。夜ともなるとガスランプかろうそくで過ごしているのである。私達の暮らしているゲストハウスにはジェネレーター（発電機）があって、電気が止められちゃってもジェネレーターを使って電機を作り出すことができる。ＭＳＦのすごいところは、こういうロジスティックの分野で、電気がないところに電気を起こし、水のないところに水を持ってきちゃうことだ。これはどこのミッションでも同じはず。
ところで、アフガニスタンの電気はほとんどは水力発電に頼っている。そのため、冬の間は川の水量が減り、同時に電気の供給量も減ってしまうのだ。夏になると、山からの雪解け水で水量が増加し、電気の供給量もふえる。基本的に日中は電気が消えていることが多かった。昼間は明るいから電気がなくてもそれほど困らない。オフィスで仕事をしているときはコンピューター関連の電源に関してはバッテリーでまかなえるので、これも特に苦労ない。フィールドで、コンピューターがこんなに苦労なく使えるなんて思っていなかったから、結構驚いた。以前は衛星電話を使っていたそうだが、今はインターネットの方が普及してきて、格段に安いのだそうだ。良く考えたら、ヨーロッパのメインオフィスと連絡を頻繁にとらないといけないんだから、使えて当たり前と言えばそうなんだけどね。
そんなわけで、自分達の生活をそれほど不便に感じたことはなかった。普通のアフガニスタンの家庭に発電機なんてなく、電気が止められちゃったら
「今日はここまで」
のビデオも、ここではジェネレーターをつければ見れちゃうんだから。
夜のカブールの街を車で移動すると、土でできた小さな家々に裸電球の明かりがともっているのがみえる。山の斜面に沿うように建っている家に小さな電気がついていて、遠くから見ると、まるで大きな建物みたい。よるカブールについた外国人が
「カブールにはものすごく大きなビルがある。」
って勘違いしたという話にもうなづける。
ＤＢには電気がないので、マタニティでは、日没から6時間と、朝はまた5時くらいから日が昇るまで発電機を使う。発電機が使えない間

は、ガスランプをつけて、さながらキャンプ状態。ガスランプで一番困ったのは、色がわからないこと。人の顔を見ても顔色がいいのか悪いのかわからない。赤ちゃんを観察しても同じである。

電気が自由に使えると言うのは本当にすごいことなんだなあ。アフガニスタンの人達はそんな不便の中に暮らしている。

（6）パンシール渓谷へ

金曜日は唯一の休日で、たまにカブールを離れて郊外の村などに出かけて気分転換をするともあった。カブール市内から30分も走るとすぐに町のはずれにつく。うす茶色のごつごつした岩山に、たくさんの家が微妙なバランスで建っている、そこを越えると後はとにかく山の上のまっすぐな道が続いていく。今日はパンシール渓谷に行くのだ。ほんとはサラン峠に行く予定だったんだけど、昨日からの大雪でサランに続く道は閉鎖、パンシールに予定変更したのだ。

カブール郊外に出ると、とたんに風景が変わる。広々とした荒野の向こう真っ白に雪化粧した山脈が見える。長野の山を思い出す風景。季節によるのかも知れないけど、広々とした平原は見ているとものすごく乾いている。道はまっすぐだけど、でこぼこで、ランドクルーザーの横座りは辛いから、靴を脱いであぐらをかいて前を向く。時折白と赤で塗られて石を見かける。このあたりはまだ地雷が撤去されていないのだ。赤い側は危険地帯。白いほうが安全地帯。とはいっても100％安全なんて言いきれない。アフガニスタンは世界でも有数の地雷国なのだ。地雷撤去のNGOが日夜努力しているが、アフガンに埋まっている地雷をすべて撤去しようと思ったら、いつまで時間がかかるんだろう。そんなふうに当たり前のように、戦争の残骸があちこちに転がっている。時々速度を落とすためにある段差は戦車の車輪の一部だ。橋に差し掛かったときにふと見ると、基礎に戦車の車体がそのまま使われていた。パンシールに向かう途中、平原に戦車がたくさん放置されているところがある。村から外れて何にもないところに、それは忘れ去られたみたいにただそこにある。まるで戦車のお墓みたいだ。本当にこの地域は最後までタリバンと戦っていた所なのだ。

北部同盟のマスード将軍は、アフガニスタンではまるでヒーローのように扱われている。マスードの写真を車に貼り付けている人も多いし、あちこちにマスードのポートレートがあるのだ。いろんなアフガン人に聞けば、彼は必ずしもヒーローではない。

「彼はタリバンと戦ったが、多くの人を殺したのは一緒だよ。」

彼は、同時多発テロの前に殺害されてしまったが、最後までタリバンと戦ったパンシールの勇なのである。彼はパンシール出身じゃなかったけど、最後までパンシールで戦っていた。パンシール渓谷のパンシールって

「5匹のライオン」

直訳するとそう言う意味らしい。だから

「パンシールのライオン、マスード」

と言われていたのかな。彼のお墓は結構山深いところにあって、パンシール渓谷の小高い山の上にある。渓谷がきれいに一望できるところに彼は眠っている。カブールを出て3時間くらいかかった。片道3時間は結構な距離だけど、途中舗装されていない道もあって、ばんばん飛ばすわけには行かないから、どうしても時間がかかるのは仕方がない。お墓は思ったよりも立派で、びっくりした。まず大きなマスードの写真が出迎えてくれる。彼がパンシールにこもっているときに、過酷な環境にあっても、常に勉強していたと言うことがわかる写真だ。彼は優秀

な戦略家だけではなくて、かなりの秀才だったのだと聞いた。彼のお墓は、まるで小さなうちみたいな建物の中にあるのだ。外は白い壁、緑色のドーム型の屋根がついたかわいらしい感じの建物。マスードのお墓はパンシールの地元の警察が警備にあたっている。彼らが中に案内してくれた。入り口で靴を脱ぐ。雪は降っていないけれど、ぱらぱらと冷たい雨が降っている。脱いだ靴の泥が気になってしまう。タイル張りの床が冷たい。足がかじかむ寒さなのに、警備に当たっている人達は、靴を脱ぐと裸足だった。アフガニスタンの人達は、この寒さにも適応し、厳しい環境の元で何年も戦ってきたのだ。

マスードのお墓は大きな石でできている。何やらいろいろダリー語で書いてあるけど、何が書いてあるのか、わからない。周りには、いつも誰かが飾るのだろうたくさんの花がある。一緒に来たアフガン人ドライバーは神妙な顔でじっとお墓を見つめている。彼の死を悲しむ多くの人がこのお墓を守っている。たくさんの戦車が残って、戦いの後が感じられるけれど、チャイハナでお茶を飲んでいる地元の人は、にこやかだ。そんな彼らだって、戦争のときマスードを慕い彼についていった、戦士なのだ。

「彼はパンシールの誇りなんだよ。」

とパンシール出身のドライバーのサヒさんが言った。

冬のパンシール渓谷は、寒い。お墓の周りに植えてあるバラの枝が、風でゆれる。春はきれいな花が咲くんだろうなと思う。

（7） 水のないスイミングプール

カブールの市内。中心から見るとやや北東に位置する、ワジー・アクバール・ハーンと言われる地域には小高い丘がある。小高いといっても、結構高い。カブールの中にいくつかある小高い丘のなかのひとつで、上からはカブールの街が一望できる。北東方面には空港がある。木が生えているわけではなくって、ただ、土が剥き出しの丘なのだ。この周囲には大使館関係の建物が多いので、大使館関係の人達が、ジョギングをしたりしている。下から見るとあまりわからないんだけど、この丘にはとてもおかしなものが存在する。スイミングプールだ。これはソビエトがアフガニスタンに侵攻していた十年の間に作られたものらしい。今はプールとしては使われていないが、以前は水をポンプでくみ上げて使われていたのだそうだ。ソビエトの兵士のためのものだったそうだ。今は、地元の若者達がボールを持ち込んでサッカーをしている。ボールひとつあればすぐにはじめられるサッカーはここでも大人気。

ワジー・アッバール・ハーンの地域は上から見ると、大きな均一なビルがずらっと並んでいるのが見える。ソビエトの侵攻の時代、ソビエトスタイルのマンションのようなビルが建てられたのだそうだ。目立った大きな建物は、すべてソビエト時の建物だ。政府の官舎みたいに使われていると聞いた。ソビエトが撤退してから、新しいビルは建てられなかったのかなと思う。そこから、アフガニスタンは世界から忘れ去られてしまっていたのだなと思う。今のカブールの姿からは想像できないんだけど、１９７０年台のアフガニスタンでは、街は美しく整備され、大学には活気があり、街に音楽がながれ、女性ははつらつと外で働き、ヒッピーの憧れの地であったいうことだった。この時代に書かれた本を見ると、アフガニスタンの自然と文化のすばらしさに触れているものが多い。１９７０年代に撮られた写真を見て、どこかなーと思ったら、いまは無残に破壊された、警察署の建物のある周辺のロータリーだった。完璧に破壊されてしまったその場所の以前と今を比べると、しみじみ戦争の凄まじさを見せつけられたようだった。ヨーロッパからくるボランティアの

のなかには、祖父母が以前アフガニスタンに来たことがある人がいたが、美しかった時代と今を比べて、とりわけ心が痛むと言っていたそうだ。

アメリカがアフガニスタンを攻撃したときは、まずアフガニスタンの丘を制覇したんだそうだ。ただの景色の良いところじゃなくて、戦略的にも重要な場所だったらしい。カブール市内でも、軍隊の施設になっていて、上れない丘もある。一応この丘は地雷撤去済みと言うことだったが、なんだかまったく安心ってできないよなあという雰囲気だった。

夕方、夕焼けがきれいに見える。カブールのほこりっぽい空気に夕日がにじんでいる。スイミングプールにあるジャンプ台に上った男の子達が、大きな声で笑いあっている。この子達が銃を持ったり、戦いに参加したりすることがないといい。このスイミングプールはこの先また使われるなんて事はあるんだろうか。本当に不思議な歴史の抜け殻。この先アフガニスタンはどんな色に染まっていくんだろうね。

(8)イーストアレフ

週末になると、余裕があって天気がよさそうなときはどこかにピクニックに行くことが良くある。もちろんこれもセキュリティのきつくないときに限った話ではあるけれど、毎日毎日車でしか移動できない市の中心にいると、とにかく行きが詰まってきて、田舎の自由な空気を吸いたくなるものである。でも、いくら田舎に行きたいとは言え、片道3時間もかかるパンシール渓谷のようなところに毎週行っていたんでは余計に疲れてしまう。ただでさえ運転荒いのに。そこで、カブールから出かけるのにちょうどいい小さな村がイーストアレフだ。カブールの北に車で1時間半くらい。以前はタリバンと北部同盟との戦いがあったところである。マスード将軍の別荘が小高い丘の上にあり、ことごとく破壊されていたが、民兵が武器を片手にのんびり日向ぼっこをしていた。ようやく復興が進んできているとはいえ、むらのあちこちは破壊され、崩れ落ちた壁はそのままである。この村は陶器の有名な村で、イーストアレフで作られたお皿などカブールの市内でも見ることがある。お皿の内側を見ると小さく3箇所上薬のはがれているところがあるのだが、薬を塗った後に三脚に伏せて干すために自然についてしまう跡らしい。はじめ不良品かと思った。以前はもっと店が並んでいたと言う小さなバザールにはいろいろな種類の陶器がずらっと並ぶ。どの店も大体売っているものは同じ。値段も大して変わらない。

「何か買うときは、みんな別々の店で買いましょう。みんなが少しでもお金を得られるように。」

とフィルコが言う。確かに、ひとつの店で買ったら喧嘩の元になるかもしれない。大きなお皿でも1枚１００アフガニー。だいたい3ドルくらいかな。日本には持って帰れないだろうけど、ゲストハウスにちょうど良いと思い、２つ大きなお皿を買った。青と緑が基本色のようだ。日本の陶器に比べたら、もちろん質は劣るかも知れないが、素朴な温かみのあるお皿だ。ここで売っているものはすべてそんな感じのものだった。

村の中を少し歩く。バザールを超えて、しばらく歩くと街なんだろうけど、破壊されていて廃墟に鳴ったままの家が目に付く。壊された陶器の釜もそのままだ。時々洗濯物が干してある家があることで、人が住んでいることがわかる。マスードのゲストハウスから見えた、反対側の丘の上にあるちょっとした水のある公園に行く。かなり整備された建物だったけど、そこがホテルだったのか、ただのレストランなのか良くわからない。この村はもともと、休日になる

と多くの人がピクニックにやってきたそうだ。村の中心に側が流れていて、静かなところだ。丘の上に大きな気が茂っていて、木は無事だったんだと思う。丘の上から反対側の山並みが見渡せる。低空で2機並んで飛ぶヘリコプターが音もなく飛んでいるのが見える。近くに軍の空港があるんだそうだ。

イーストアレフには、アフガンにいるうちに2回行った。冬に来た時はすべてが茶色で、なんだか寒々しく見えたのだが、春になると木々が芽吹き始めて、とても美しい緑に覆われていた。ピクニックにくる人も増えていた。こんな風に、多くの人々がピクニックに行こうと思えるような安らかな国ならどんなにいいかと思う。

（9）バーミヤンへ行く

十二月下旬、クリスマスの時期にバーミヤンのプロジェクトを訪ねようという話が出た。バーミヤンの病院は開発系のＮＧＯが引き継ぎたいと申し出てきて、あと1ヶ月で引継ぎ、と言う状態であった。

バーミヤンと聞くと、タリバンに破壊されたことで記憶に新しい石仏が思い浮かぶと思うが、私もその石仏以外は何の知識もないので、どんな人がどんな風に暮らしているかとまったく知らなかった。バーミヤンはカブールから飛行機を使えば２０分だ。国内線ではＵＮの飛行機とパクテックという飛行機と、あとはアリアナ航空が乗り入れている。小型飛行機なので定員は１０人程度。エアバスって呼ばれるタイプなのかな。今回はパクテックの飛行機で行った。予約していたので、みんなでぞろぞろ飛行機のところまで連れて行かれて、紙に名前が書いてあるからそこにサインをする。荷物を先に飛行機に積み込んで、じゃあ、はい乗ってねって言う具合だ。エアバスに乗るのは初めてじゃなかったけど、かなり緊張した。なんか落ちそうで。カブール空港を飛び立つときちょっと祈ってしまいました。ヒンドゥクシュ山脈系の山を越えたらバーミヤンはすぐそこだ。ほんとにあっという間についてしまうのだ。以前バーミヤンから来た患者さんのことを思い出す。彼女はロバに乗って、山を越えて、丸一日かけてクリニックにやってきた。なんだか自分達だけ、恩恵にあずかっている気がして、なんとなく気が引ける。私達にとてこの飛行機に乗るのに９０ドルとかって普通に出せる値段なんだ。アフガニスタンの一般の人には、手が届かない額でも。

カブールを飛んで一気に山が近くなる。今の時期雪が多くて、数日前にどっかり降った雪がしっかりと山を白く包んでいる。すごい光景だ。山の茶色がうっすら見える。雪の白と空の青がまぶしい。上からみるカブール市内も圧巻だ。カブールにかかる空気は曇っていて、毎日さらされている排気ガスがいかにすごいか思い知らされる。このままの勢いで、ディーゼル車がガンガン走って、なんの規制もしなければ、将来本当に深刻な公害になるんじゃないかと思う。東南アジアでの大気汚染が酸性雨を降らせて森を枯らすと言ってたよな。そろそろ、山を越えるみたいだ。眼下に広がる風景ががらっと変わる。何もない土地がぱーっと開けている。多分畑だな。雪で真っ白だ。すごい、空気が違う。飛行機からでもわかるくらい空気が澄んでいる。空の青さも全然違う。雪から反射する光がまぶしい。カブールの標高がおおよそ１８００メートルあるといわれている。バーミヤンは２５００メートル。紫外線も強いんだろう。そんなところに住むなんてすごいなあ、毎日高地トレーニングみたいじゃないか。

「じゃあ、着陸するよ。」

とパイロットが言うんだけど、飛行場なんてない。っていうか見えない。雪で覆われているの

だ。そして、飛行場の建物はない。旗が立っているだけ、そしてゲートが遠くに見えるだけ。すごい、こんな空港はじめてみた。バーミヤンに降りるとそこは一面銀世界で、空気がものすごく澄んでいた。びっくり、カブールの空気とは比較にならない。荷物を下ろしてオフィスに向かう。ここから歩いて行けるそうだ。外を歩いて移動なんてずいぶん違うものである。５分も歩くとそこにアフガニスタンの人達が住んでいそうな、土壁の建物がの家についた。もちろん門はがっちりしているけど、中の建物は地元の人達の家と大差ない。これ、いいわー。カブールの家と全然違う。水道はない。毎日ここで雇われているスタッフが、ロバと一緒に泉まで水汲みにいくのだ。石油ストーブはない。その代わりに薪のストーブで、これが初心者にはなかなか難しい代物なのだ。電気はジェネレーターのみ。なので、夜間は主にランプを使っていた。雪に映えてものすごく幻想的に見えたりして。まったくカブールと比べて別世界だった。カブールにはいろんなものがあふれていて、ともするとアフガニスタンはなんでもある国だって錯覚してしまいそうだけど、実際に郊外の人びとと、そこで働くスタッフの暮らしを見ることができて、非常にラッキーだった。

ここではカブールに比べて、病院がない状態であるので、ＭＳＦが受け持っている病院も非常に小さいのだが、手術可能なまさに病院であった。カブールのクリニックの規模に比べて格段に小さいのに、機能としては上と言うことか。

「君らのクリニックは大きいかも知れないけど、所詮クリニックだろう。うちは小さいけど、病院だからね。」

なんて、バーミヤンのフィールドコーディネーターが自信マンマンで言ってたりしてちょっと笑った。ここにはアジアからの助産師がひとり派遣されていた。彼女は今回でアフガニスタン３回目という人で、彼女からＭＳＦのことについても、プロジェクトの事についてもいろいろと教わった。うちのマタニティではありえないんだけど、助産師が見つからずに、彼女自身が夜勤の当直をやらないといけない状態で、夜中に病院から呼び出され、お産介助をするとか、患者の診察をするというようなことをやってのけていた。すごい！この地域では助産師に限らず、看護師も不足しているような状態で、男性の看護師が多かった。通訳も、女性の通訳が見つからないと言うことで、若い男性が助産師の彼女について仕事をしていた。大変じゃない？と聞くと

「はじめは、夫婦生活のこととか、避妊のことか、聞きづらかったんだよね。でも、不思議なことに、驚くぐらい女性はオープンに話してくれるんだよ。」

「彼は見た目もごつくないし、ソフトだから女性も安心して話してくれるよ。」

と彼女も言っていた。それならカブールもそうやってオープンにやっていけるんじゃないかって思うけど、もう少しこれは複雑かも。それにしてもお産はどうしてるの

「お産の時はさすがに足元に立つことはできないけど、女性の頭がわに立って見えないように通訳してるよ。」

なるほどね。いやー、これは私には逆にカルチャーショックだった。カブールでのきちきちの体制で働いていると、それが当たり前のようになっているけど、同じアフガニスタンでも所変われば、なんだね。お産は多いほうではなくて、毎日あるわけでもなさそうだった。件数でいけばうちはものすごく多いけど、こんなところでゆったりと患者さんに関わっていけたらいいなと思った。

「ＤＢってまさにお産工場だよね。」

と言われて、本当にその通りって思った。ここは住んでいる人も、働いている人も本当にのん

びりしていると言うのが印象だった。
　次の日の朝、みんなでバザールに行こうという話になった。雪の積もった道をどうやって行くのかナーと思ったら、歩いて。そうなのだ、ここでは外を歩いて動き回ってもいいのだ。村の人たちもＭＳＦがそこで活動しているのを良く知っている。ほかにもいくつかＮＧＯが入っているが、本当にここは治安の良いところだった。で、私達はあるいてバザールまで行くことにしたのだが、家を出て、すぐに目の前に広がる畑の向こうに石仏のある岩山が見えるのだ。感激。すごくきれい。畑でおじいさんが何かしてる。まだ雪が積もっているのに。
「ジャガイモを植える準備をすすめているんだよ。」
とのこと。おじいさんもにっこり、ゆったりしていて、ギスギスした感じがない。この辺の人達は遊牧か農業で生計を立てているから、カブールみたいに失業者がすることもなく大勢集まっているという光景は目にしない。みんな何かしらやることがあるのだ。まあ、ちらっと訪れただけだから、他にもいろいろきっと問題もあるんだろうけど。
　雪の道を歩きながら右手に「嘆きの丘」って呼ばれているお城のような丘が見える。ロバを釣れて人が同じ方向に向かっている。みんな泉に水汲みにでているらしい。バザールまでは、歩くと３０分近くかかってしまう。雪がすごいからだ。この下に地雷とかないわけ？って思うけど、地元の人が大丈夫と言ってるところは大丈夫なんだそうだ。アフガニスタンは乾燥しているから、雪もべったりしていない。さらっとしている。雪だまをつくってぶつけようとしたら、形にならなかった。時々雪に埋まりながら、膝までずっぽりはまりながら、バザールまでなんとかたどり着いた。カブールのお店の数たるやすごいけど、ここは通りひとつのみのバザールだ。一応お土産やさんみたいなのもあって、骨董品みたいなものが買える。昔の刀とか、絨毯とか、装飾品がたくさん売られている。モンゴルとか中国っぽいものがあったりすると、不思議。アフガニスタンはまさに文明の十字路と言われるだけあるねえって感心しきり。ジャラジャラしたアクセサリーとか、大ぶりで派手なものが多いのもアフガニスタンの特徴かな。私にはちと派手だな。道で子供に会っても
「ギブミーワンダラー」
というお決まりのセリフを聞かない。その代わりに
「写真を撮って。」
と言われる。なんだか自由にシャッターを切れるうれしさも手伝ってついついたくさん撮ってしまう。カブールにいるときは写真を撮るのにすごく勇気がいる。じっと怖い目で見てくる人もいるから、なんとなく撮るのをためらうし、実はアフガニスタンに着いてときに
「街中でパシャパシャ写真を撮らないこと。」
と以前のミッション責任者から注意を受けていた。ここについたときも
「ねえ、写真って撮っていいの？」
とスタッフに聞いた。
「全然問題ないよ。」
と聞いてうれしくってあちこち取りまくっていたのだ。自然の風景も美しくて、思わぬリフレッシュとなった。当たり前にしてもいいことが禁止されると、やはり窮屈なのだ。ここの状況がわかっていても、なかなかね。以前タリバンの頃は、写真はもちろん禁止だったから、カメラを見つからないように隠し持つのが大変だったそうだ。タリバンに見つかったら、没収はもちろん命の保障がないと言うのだから驚く。今はそこまでの厳しさはないけれど、自分達にカメラを向けられることに抵抗がある人がいるのも事実だ。許可を得てから写真を撮った。どこで自分達の悪い評判が立つともわから

ないから。
　バーミヤンは自然の美しさと、人々の素朴さが際立っていた。私の中では、空気がきれいなのがいちばんだったけど。
　バザールでナンを買って帰ることにした。ナンやさんにいくと
「中で見ていいよ。」
という。ナンやさんの中に入ってナンを焼くところを見せてもらう。次々丸められていく生地を上手に伸ばしながら大きな釜の内側にぴたっと貼り付けて焼くのだ。片方が焼けたら、細長い棒でひゅっと引き上げる。ほんの1・2分ので焼きあがってしまう。あっという間だ。釜の回りは狭くって間違って落っこちないように気を付けながら立ちあがる。立つと煙にやられて目に染みる。目があけられない。
「座って動きなよ。」
とナン屋のお兄ちゃんが笑って言う。みんなにこにこして
「写真とってくれよ。」
っていう。デジカメでとって見せると喜ばれた。
「サンキュー。」
と英語で言ってきてくれる。なんだかほんわかする。
「焼きたてもっていきな。」
と、今焼いたばかりのナンをもらって帰ることにした。ナン屋には子供もたくさん働いている。時々釜に落ちて大ヤケドをすることがあるそうだ。確かにこっちが見ていても心配になるような小さな子が釜の回りをちょろちょろしていた。子供が大人の社会でがんばって働かないといけないようにできている。なんだかたくましい反面、子供にとっては厳しい状況だなあと感じる。子供じゃないような大人びた目で見られることがあって、時々ドキッとした。

（10）ブッダにて想う

　冬のバーミヤンは本当に美しい。雪に埋もれながらゲストハウスに向かう途中しみじみ感じた。生活は大変そうだけど、なんて言うのか人は自然に暮らしている。雪のなか何時間もかけて、なんども水を汲みに往復するのも生活の一部で、きっとそのために使っている時間ってすごい割合なんだと思う。でも、労力を使って毎日の仕事をこなしていくって実はすごく当たり前なのかも知れないな。日本にいて、私達は自分達の労力を使って仕事をしない分の時間をいろんなことに当てることができて、一生の間にできることがものすごく増えたように思うんだけど。当たり前の生活力が落ちてるんだよなあって思う。ここでの生活は本当にシンプルなんだ。
　昼からみんなで破壊された大仏を見に行った。タリバンに破壊されてしまって、ビッグブッダと呼ばれているほうの、大きな大仏は跡形もない感じだったけど、スモールブッダと呼ばれているほうの小さな大仏は少し形が残っていた。ユネスコが大仏の修復保存のために働いているらしい。看板が立っていた。
「中に入れるよ。」
ナジャがかぎを持ってきた。フェンスで囲まれているんだけど、中に入って良いらしい。小さなブッダのほうは、大仏の横の壁をあがって、反対側に回って降りておれるらしかった。左側から上りはじめる。土壁のような乾燥した階段を上っていく。所々ひび割れが入っていて、鉄材で補強してある。崩れたりしないでしょうねえ。あがっていくとバーミヤンのきれいな畑の風景が眼下に広がる。後ろに見える山がとてもきれいだ。
「ここがちょうどブッダの視線くらいかな。」
アルーンがいう。
「ひゃー。きれー。」
みんな思わずため息が出る。本当にきれい。雪

に覆われたバーミヤンの村の風景は本当に美しい。ブッダはこの美しい風景を見てきたんだなあ。ブッダの右側にはいくつか部屋があって、天井画が描かれている。が、すべてが銃で撃って破壊されている。仏が描かれていたらしい壁は仏の顔だけがはがされている。無数の銃弾のあとが見える。他にもいくつか石室のようなものがあったけど、仏像画はことごとく破壊されていて、無残だ。タリバンがブッダを破壊したときの写真をポストカードで見たことがある。こんなのポストカードにするかなと思ったものだ。アフガニスタンに、いま仏教徒っていないと思うけど、それでもこれ破壊しないといけなかったんかね。歴史的遺産って言う考え方はなかったんだろう。文化的なものを破壊すると言うのは、人類を破壊することに等しいように思う。仏像を破壊されるまで国際社会の関心は低かったと言われているから、ブッダは身をもってアフガニスタンの状況を世界に知らせたんだ、と言っている人もいた。不思議な感覚。おかしなもので、本の数年前に破壊されたそこに立っても、あまりこれと言った感情が湧いてこない。現実味がないからなんだろうなあ。ただ、

「高いな、こわいな、すごいな。」

っていう、この語彙のないのが丸出しの言葉ばかり。いろいろな想像力を駆使しても、やっぱり何だか感情が湧いてこない。不思議と心は平静だった。多分私は、人を対象にして働いてて、文化財とかそう言うものの価値を知らない人間だからなんだろうか。

「これを修復して、この先観光地としてはやるようになるかな。」

なんて意見が聞こえたりして。みんな一貫しているのは、現実にここにいて、現実にアフガニスタンを見ているし、現実として人々が苦しい生活をしているのを目にしているから、いつも本当に現実的にどうしたらいいのかっていうことばかりを考えて口にしているのがわかる。妙に現実的なんだよね。だからなのかなんなのか、私はこっちに来ていろんな状況をみても、それで涙を流したりすることもなかった。かわりに

「なんで？！」

って思うことが多くて、いつも怒っていた気がするけど。自分の不甲斐なさに泣けてくることはあっても、人をみて泣けるとかはなかった。淡々と日々仕事をこなしていく中で、人々が今置かれている状況が現実で、そこから逃げられるわけでも、一日ですべてが変わる訳でもないと言うことを、誰に言われるわけでもなく悟ったし、そう言うもんだってなぜか開きなおってしまったりして。おかしなもので、どこかに行って、なにか目にしても簡単に感想を述べるって言うのに、いつも抵抗を感じてしまっていた。物事の背景にはいろいろな出来事が隠れていて、それを全部知らないのに良いとも、悪いとも判断ができないような状況が多かったからだと思う。ただ、みんな黙っていた。そして、いつも考えていた気がする。いったんその国の外に出たら、自分の置かれている立場でできる限り感じたことを整理して、人に伝えようと思うんだけど、その国にいるうちは、なかなか物事を見極めるのが難しかった。もともと、あまり政治についても歴史についても詳しいほうじゃなかったから、アフガニスタンの状況をいろいろな面から理解するのに時間がかかった。単純じゃないんだよな、なんだかいろいろなことが。この国を思って戦うなら、この国を本当の意味で守るように戦えないのかなと思う。アフガニスタンにある、自然も、人も習慣も文化も、すべてはこの国の大切な財産だと思う。なにが欠けてもだめな気がする。国を立てなおすって言うのは難しいんだろうな。ブッダの修復みたいに形あるものなら、わかりやすいのに。

普通の観光旅行じゃない、何かが胸に去来する。こういう思いをたくさんして、だんだん無邪気じゃいられなくなっていく気がして、ちょっと寂しい気がした。でも単純に思った

「すげー。」

っていう感情。素直な気持ちも忘れないでいたい。何も考えずに出る言葉も普通に大事にしたいと思う。ただ、そこにいて、苦境に立たされている人達のそばにいる。私達の原点はそこだと言うことを忘れないでいたい。政治的なこともちゃんと付いてくるといい。ＮＧＯだけじゃ国の置かれている状況はよくならないんだから。いつかその国がその国人を守れるようになったらＭＳＦも撤退するんだろう。そう言う時が早くくるといいなと思う。

（１１）ドラゴンバレー

バーミヤンにドラゴンバレーとよばれる谷がある。なんでそう呼ばれているかというと、長い話になるので省略。バーミヤンの南西方向にある、大きな谷で結構有名らしかった。昼過ぎにそちらに向かったので、日が落ちる前には帰らないといけない。ナジャが

「確かこっちだった。」

と、道案内をする。運転しているのはわれらのリーダーのボスだ。ここでは外国人ボランティアも車の運転をしている。トヨタのごっついランクルをブイブイ言わせて走ること２０分くらい？草原のようなところに出た。するとものすごーくでっかい犬が車をめがけて突進してくる。すごい、でかい！これってアフガンハウンドって言われる種類かな。遊牧民の人達は羊を守るために犬を飼う。普通の農業の人達も、家を守るために犬を飼う人は多いんだそうだ。

「あれ、おかしいな、こんなところに家があったっけ？」

「！？」

どうやら道を間違えたらしい。

「そうだそうだ、こっちこっち、はは、間違えた。」

「ホントに大丈夫かよー、頼むよー。」

みんなから野次が飛ぶ。なんとなく谷っぽくなってきた。そり立つ茶色の壁はブッダの土とおんなじ感じ。びっくりするけど、こんなところにも人が住んでいるんだよ。茶色の山に穴を掘ったような感じで、家にしている。山を利用したマンションみたいだ。もちろん水道があるわけでもないし、水汲みに行く生活はおんなじだろう。すごいところに住めるもんだな。それにしても、日が傾きはじめたこの辺りは、空気が冷たい。ひんやりというか、乾燥しているので油断すると、気がつかないうちに指が動かないくらい悴んでしまう、そんな寒さ。両方にまっすぐにそり立つ壁のような山が見えてる。ここから歩くんだそうだ。アフガン男性陣はぐんぐん山を上っていく。私はこちらに来てからの運動不足がたたって、なかなかさっさとは登れない。これくらいで息が上がるなんて。

上につくころにはドラゴンバレーは夕日に包まれていた。オレンジの光が、谷にさす。頂上を歩いていくと、風が強くて飛ばされそうだ。みんな崖の端まで行くみたいだ。ちょと手の感覚がない。しまったな、ちゃんと厚着してくれば良かった。メディコも寒さにやられてしまったらしい。

「先におりて待ってるからー。」

メディコと一緒に一足先に車にもどる。いや、ちょっと寒すぎた。何度くらいなんだろうか。日が落ちて、谷の温度がぐっと下がってきた。手がなかなか温まらない。みんなもぞろぞろと帰ってきた。ボスがエンジンをかける、出発しようとしたら、ガンガンって感じで大きく車体がゆれた。ハンドルはきかない、なんだ？？

「しまった、ハンドブレーキだ。」

ボスがつぶやく。そうなのだ、この地域は日が落ちたらすぐにもうマイナスまで気温が下がる。ハンドブレーキが、短時間の間に凍ってしまったのだ。どうするの？
「よっしゃ、工具があったね、バーナーと、ロープと、これも出して。」
男性陣はまったく動じない。さすがＭＳＦロジスティシャンチームである。この手のことはお手のものなのだ。かなりしっかり凍り付いてしまっていたらしく、少し時間がかかったが、なんとかハンドブレーキも外れて、出発できることになった。すごい、こういうサバイバル能力見習いたい。
「えー、諸君、このように気温が下がる地域では、車を止めた時に絶対にハンドブレーキを引かないこと！石を車輪の下に置いたりして、ハンドブレーキの変わりにすること。でないと、今回みたいに凍るからね。」
「了解！」
テンションも高く、私達はゲストハウスに向かう。この人たち、ほんとに根っからの冒険好きなんだわ。総勢９名あやうく凍えるところだったのに、こう言うの好きなのよね。
　ゲストハウスにつくと、バーミヤンチームのフィルコが
「もうちょっと遅かったら探しに行こうとおもっていたよ。なに？ハンドブレーキ凍ったの？」
って少しびっくりしていた。
「ロジがカッコ良かったんだよー、私達は中で見ていただけだったけど。」
ちょっとした冒険の気分だった。
　バーミヤンチームの人達がシチューを作ってくれたみたい。素敵。外はすっかり暗くなっていた。雪の残る中庭にオイルランプが灯る。きれい。外に出ると星がとてもきれいに見えた。ほんの数分で頬にちくちくした痛みがさす。マイナス何度くらいかな。寒空に、しみじみ家があることがありがたい。凍えている人もいるのだ。
　明日はカブールに戻る。きれいな空気も吸い収め。また、埃まみれの日常が始まる。

（１２）アフガニスタンの恋愛事情　（その１）

「ねえ、たまき、人は誰かとの恋に破れたとして、また誰かを愛したり、立ち直ったりできるものかな。」
クリニックで、月末の統計処理の仕事をしていた時のことだ。いつになくまじめな顔でレイリーが聞いてきた。なあに、急に。そうねえ、私もちょっと前は付き合っていた人もいたけどねえ。結婚すると自分でも思っていたけど、結局別れちゃったしなあ。あ、でもいろいろやりたいことがあったし、でも立ち直っちゃったよ(笑)　だんだん強くなってきちゃった。失恋しても、そうねえ、また誰かを好きになるよ。多分、いまはないけどね。なあに？誰か好きな人でもいるの？レイリーは堅ーい表情のままだ。
「私には、ハートはひとつしかないわ。一度壊れたらもとに戻らない。だから、恋に破れたり愛を失ったりしたら、絶対立ち直れない！！」
ふえー、そうかあ、私も誰かを好きになっているときはそんな風に思うんだろうけどね。そうねえ、確かに失恋するときは辛かったけど、女って強いんだよ。私だっていい人いないかなーっていつも思っているし(笑)　ほんとうにそうなの？といいたげな表情でレイリーは真剣に話を聞いている。そりゃこの年だもん、恋愛の経験くらいあるけどさ。失恋したときは辛いけど、わたしそのたびに立ち上がってきてしまいましたよ。
「アフガニスタンでは恋愛って簡単じゃないのよ。」
彼女は言う。

「例えば誰かを好きになるとするでしょ。それで、もしその人と結婚できなかったとするでしょ、そしたらそれだけでうわさが立って、次に誰かと結婚するって言うのも難しくなるんだから。」
え、それって肉体関係がないような関係でも、悪い噂が立つわけ？
「当然よ。アフガニスタンの人はものすごくストイックなんだから。男とうわさになるような女って、それだけですごい陰口たたかれるんだから。」
ふーん。でも恋愛しなきゃ結婚もできないじゃないか。
「アフガニスタンでは、気にいった子がいたら、とにかくすぐにプロポーズなのよ。だから、婚約して、それから相手を良く知っていくって言う感じかな。」
　そうそう、そのプロポーズもいろいろで、直接男性からする場合もあるが、女兄弟がいる場合、要するに姉か妹が女性に聞くと言うことが結構一般的だと言うことだった。女兄弟がいないときは、自分の母親に頼むのだと言う。私だったら、お母様からそんな話しされたら引くなあ・・。まあ、アフガニスタンと日本では違うもんねえ。それはさておき、このプロポーズって言うのは、お互いあまり知らなくても突然去れちゃうということね。
「そう言うこと。今はもちろん自由に恋愛する人もいるだろうけど、結婚も考えずにただ誰かと付き合うなんてスタイルはアフガニスタンにはないのよ。」
なるほどね。所で女性は自分からプロポーズとかできるわけ？
「できるわけないよー。女は待つだけなんだから。女性からプロポーズなんて聞いたことないわよ。男性も結婚するにはものすごくお金がいるのよ。アフガニスタンでは結婚式にものすごくお金をかけるでしょう。招待した人達全員分の食事、花嫁に買う宝石やドレス、生活にかかるすべての物を工面できるようになるまで結婚できないんだから。」
それってすごいよね。じゃあ、若い人は結婚なんてできないね。
「若くても、家がお金持ちとかで結婚式をできる人は結婚できるよ。」
ふーん、じゃあ、式をやらない結婚とかってないの？
「家畜じゃあるまいし。そんな簡単に娘をやる親なんていないわよ。」
いや、まあリッチな人達に限ってなんじゃないの？
「お金持ちじゃなくても、ちゃんとした結婚式をするものよ。だからお金のない人は借金をしてでも結婚式をするんだから。」
そうなんだ、借金ってすごいね。日本ではできる範囲での結婚式だな。あまり聞かないよ、借金してまで結婚式なんて。
「ばかばかしいって思うかも知れないけど、そう言う風なのよね。」
そうなんだ。集計の手がすっかり止まってしまっている(笑)　これはもうちょとお付き合いするか。
　話はこうだ、彼女の同僚が、彼女のことを好きになり
「愛している、君の気持ちを聞かせてほしい。」といってきているのだ。実は私の良く知っている人だった。若いけどしっかりしていて、いつも明るくかわいい人だったので、私は一人で盛り上がって
「いいじゃん、ＯＫじゃん！」
なんて言っていたんだけど、彼女は非常に慎重だった。前述のように、アフガニスタンでは体裁をものすごく気にする。結婚前の娘がお互い好き同士であれ、男の子とうわさになるなんてもってのほかなのだ。

アフガニスタンの娘を持つ親は大変だなあと思った出来事がある。夜勤をしたときのことだ。レイリーのお母さんは、夜連絡をとろうと電話をしたらしいが、電波が届かず繋がらなかった。それでも１０回以上電話をかけ、ついに朝５時フィルコに電話をしてきたのだ。フィルコからラジオで連絡を受け

「なにか緊急の用事らしいわよ。」

ということだったので、レイリーを車にのせ、電波の届くところまで行って電話をしてもらった。すると、ただ単に

「電話が通じなかったから、心配で。」

と言うものだった。夜外出を許すというのは、アフガニスタンではかなり勇気の要ることらしい。娘の身に何かあったらというのはわかるが、緊急事態だと思っていた私達は心底がくっときたものだ。

「うちの母親はものすごく心配性なのよね。勤務時間が４時に終わるでしょ、その後まっすぐ家に帰らないと必ず電話が入るわよ。」

とのことだった。

「娘が変な男に引っかからないかって、いつも心配してるわよ。お見合いの話もいくつか来るし、結婚の申し込みも、何度か来たけど、私が好きになれないの。」

レイリーは意思表示のしっかりした子だし、簡単に男の人の誘惑に乗るようなタイプじゃないから心配ないと思うんだけどなあ。結婚するまでは、とにかく娘を傷物にしてはいけないと言うんで、ぴりぴりするのだそうだ。両親は早く娘に結婚してほしいと思っているそうだ。そんな両親だから、結婚を申し込まれたわけでもなければ、彼女も簡単に好きな男の子の好意を受け止めることにもためらっているのだった。好きだと意思表示したところで、もし彼と結婚できなかったら・・・。と言うのが理由だった。

「頭では、彼の好意を受け入れたらきっと傷つくんじゃないかって、しり込みしているの。」

というけど、じゃあ、心はどうなのときいた。

「心は、彼に私も愛していると伝えたい。」

じゃあ、それに正直で良いんじゃないのかな。アフガニスタンにもいろんな恋の形があってもいいんじゃないのかな。こうしないといけないっていうのはないけど、お互いに好きでずっと良い友達としてよく理解しあっている仲なんだから、私は彼を信用していいんじゃないかと思うけどね。彼女の純粋な悩みを聞きながら、自分がずいぶん前の日本にタイムスリップしたんじゃないかという感覚にとらわれていた。私達の社会のほうが恋愛に関する障害は格段に少ないんだけど。でも、簡単になりすぎている感もあるんだよね。レイリーのこんな初々しい悩み事の相談を受けながら、なんかいいなあってほのぼのとしてしまった。こんな清らかな悩みを聞かされると、自分がいかに汚れているかってわかっちゃうわ(笑)

「たまきは彼の言うこと、無責任じゃないと思う？真剣に考えているって思う？」

そうだね、アフガンの女性に愛を告白しているわけだから、中途半端な思いでは言えないでしょうな。

「そっか、考えてみる。」

アフガニスタンの女性にとって、恋愛は一世一代の出来事って感じなんだな。

次の日、レイリーは晴れ晴れとしていた。

「心に素直にすることにしたの。」

彼女は彼の心を受け取ることにしたのだ。よかったじゃーん。うふふふ。二人して怪しく笑いあった。なんだか自分のことのようにうれしかった。うまく行くといいな。

それにしても、それからしばらくの間、彼女も彼も舞い上がっちゃって、仕事中でも電話がちょこちょこかかってくる始末。もう、あんまり押さえつけられていると、その反動が大きいのよね、きっと。あんまり彼が彼女を独占する

もんだから、携帯を借りて彼に一言
「ちょっと、仕事中は私のレイリーなんだから、とらないでくれる？」
彼は電話口で笑い、彼女もニコニコして聞いている。幸せそうだから、まあ、よしとするか。しばらくはね。

（13）アフガニスタンの恋愛事情　（その2）
　彼女のため息が増えている。今日はどうもずっとこの調子らしい。携帯をちょこちょこチェックしているが、またポケットに戻しつつ、表情はさらに暗くなる。この子は本当にわかりやすいなあと思わず苦笑いする。
「なあに、今日はどうしちゃったの？彼から連絡がないのかな？」
彼は新しい仕事を見つけ、最近ＭＳＦから離れたのだ。新しい仕事は大使館の人事担当と言うことで、忙しくなかなか自由に連絡を取る暇もないようだった。
「そう言えばさ、彼も交えて食事会でもしたいよね。私ももうすぐ任期終了するし、帰る前に二人をレストランにでも招待したいなあ。」
実際そうでもしないと、おおっぴらに2人が会える機会がないのだ。二人きりって言うのはまず難しい。するとレイリーの表情がぱっと明るくなる。本当に単純。
「そうか、聞いてみるね。たまきが一緒だったらいいよね。うちの親にもたまきのお別れパーティーするって言えるもの。」
そうだそうだ、と言う感じで彼女はすっかり元気になり、早速作戦を練り始めた。彼に何度もオフィスに遊びに来たらと聞いたが、何度も遊びに行ったら、みんなが変に思うといって聞かない。相変わらず2人は関係を隠すのに必死で、仕事の忙しさもあり、なかなか2人で会う時間を見つけるのは難しかった。そう言うわけで、今回私がひと肌脱ぐことになったのだ。私が一緒なら、レイリーのご両親も心配しないだろうと言うのが大きな理由。出かけるのに、口実を見つけるのも本当に一苦労なのだ。家にいたって、毎日部屋にこもって彼と1時間も電話してたら、ばれそうなものだけどなあ。
　今回は彼の知っているレストランで食事をしようと言うことになった。シャリナウパークの近くの、パークサイドレストランというところ。あまりはやっている感じはないけれど、とりあえず、知っている人にあまり会いそうにないので、と言う理由でそこで待ち合わせすることになった。彼女の希望で、私の同僚カリンを誘うことになった。
「彼女口が堅いから。信頼できる。」
と言うことで。私も一人じゃ心細かったので助かった。しかし、彼女と彼の関係を説明するのが面度くさかったので、
「一緒にご飯食べにいかない？」
と簡単に誘った。他にも外国人メンバーはいるのだが、
「信用できない。」
という理由で却下。代わりに
「信用できる人」
として、私達選ばれたって訳だ(笑)
　彼女はこの日のために、上着を一着新調し、ウキウキだった。家まで迎えに行くと、いつになく化粧に気合の入った彼女が出てきた。
「いやーん、きれいだねえ。その赤い服よくにあってるー。」
誉めると彼女は照れくさそうに
「会うの一週間ぶりなんだもん。」
とはにかんだ。
「ちょと、たまき、うちの両親にチラッと顔出してよ。心配してるから。」
門を少し入り、車椅子に乗ったお父様と、一緒に付き添っているお母様にご挨拶をする。私の姿をみて、ほっとしたようだ。にっこりお辞儀をして

「ちょっと出かけてきます。」
と門を出る。
「今日はたまきの誕生日パーティーだからね。」
彼女がウインクする。ははーん、なるほどね。私の誕生日はもうちょっと後なのだ。
「口実いろいろ大変ねえ。」
「誕生日パーティーだもの、きれいにしなくちゃでしょ。」
気合が入りまくっているこの格好にも、いろいろと口実が必要なのだ。カリンは2人の関係を知らないから、ただ単純に、お洒落してきたなあ位に思っていただろう。
「私ね、今日生まれて初めて両親にうそをついたの。今まで、両親に隠し事をしたことはなかったの。でも、今日はほら、たまきのバースデーね。」
なんだかうらやましいような、ほほえましい感じだ。
「ねえ、私うそをついても良かったのかあ。」
彼女が聞いてくる。ご両親が心配するなら、良いんじゃないのかな。大人になったって事よね。いつまでも子供ではいられないよね。大丈夫よ、神様も許してくれるでしょう。
「だと、良いけど。」
彼女は26歳だ。この年で、こんな風にされるとあまりの純情さに本当にかわいくなってしまうわ。いつも思うけど、この子のこういう素直なところが、すごく好きだ。
　レストランは、何風とは言いにくいあまり特徴のない感じのつくりだったが、奥の部屋があるあたり、なんとなくアフガンレストランっぽかった。アフガニスタンのレストランには、女性専用の部屋があって、女性がいるとそちらに通されることが多い。アフガンレストランは主にそのようなスタイルになっているが、他国料理レストランでも、アフガン人が多く来るようなところには、必ず別室が準備されている。普通のアフガンレストランに行くと、昼間なのに通りに面した窓には、暑いカーテンが引かれていて、外からは食べているところが見えないようになっているのだ。とりあえず、テーブルに着く。レイリーはそわそわと落ち着かない様子だ。窓際をチェックして、開いているカーテンを閉めるなどして、誰か知っている人に見られないかと、落ち着かない。
　それほど時間はかからずして、彼がやってきた。私も会うのは久しぶりだ。いつもはおちゃらけている彼も、今日はいつになく緊張した感じだ。
「久しぶり、元気だった？」
挨拶を交わし、皆席についた。
　食事をしながら、ゆっくり2人の時間を楽しんでもらいましょということで、アフガン料理なのか、中華なのか良くわからないメニューを見ながら、適当に選んだ。久しぶりにゆっくり話ができる二人は、みつめあって
「胸が一杯」
と言う感じ。さすがにカリンも
「ねえ、あの2人っていい仲だったの？」
と、気がついた。そう言うことだから、ひとしきり会話をした後は、2人の世界で楽しく話しをしてもらっていた。はじめは、私達に気を使って英語で話していたが、すぐダリー語での話になっていた。胸が一杯でご飯が食べられない二人に代わって、私とカリンはひたすら食べまくっていた(笑)　アツアツの2人と、寂しい30女2人。これ、すごい図だな(笑)
「いいねー、なんか私達も寂しくなっちゃうね。恋人がほしいなあ・・。」
なんて。
　とにかく、久しぶりに会えて、二人も幸せそうだった。レストランでは、私が招待したのでお金を払い、レイリーを家まで送り届けた。
「彼がね、君とこんな風に会えるなんて夢みた

いだって、ずっと言ってたよ。たまきに感謝しないとって。」
ほんとにねえ、ほんとに感謝してもらわなくっちゃだわ。それにしても、こんな風に出かけることができて、この時はものすごくラッキーだった。戦争中はもっとセキュリティと言う面では厳しいのだろうが、今はまだレストランに行くこともできるのだ。同じＭＳＦでも、活動を取り巻く環境には大きな差があるように思えた。貧富の差も激しい。生活水準の格差はなかなか埋まらないだろう。レストランに行く人もいれば、その前で物乞いをして、生計を立てている人もいるのだ。どうしてもそういう場面に出くわすと、非常に罪悪感にさいなまれる。自分はこんなに恵まれていて、いいのだろうかと思う。彼女の恋に協力できるのはすごくうれしいけど、なんだかいろいろなことを感じることにもなった。
　次の日、彼女は笑いながら
「彼がね、たまきにご馳走になったのに、お礼もいうの忘れたって言ってたよ。」
と教えてくれた。
「そりゃね、彼の目にはあなたしか映ってなかったのよね、ほんとに。」
といやみっぽく返した。
「２人でゆっくり話せてうれしかった。また一緒にご飯食べに行こうよ、いつがいい？」
ってニコニコで聞いてくるもんだから
「えー、もう勘弁してよ。わたしとカリンと、どんな思いで見てたと思ってるのー？次は２人で行ってよね。」
「だめだめ、次はカリンの誕生日パーティーにするんだから。」
だって。もお、勝手にしてくれえ(笑)　彼女の恋愛は、外国人スタッフの協力のもとに成り立っているのでした。

（１４）半年の間に

　アフガニスタンに来て、半年、毎日の生活の中では目に見える変化というのは感じにくいんだけど、確かにいろいろなことが少しずつ変わってきたように思う。
　道沿いにたくさんの新しい建物が建った。冬は寒さで、コンクリートなどがひび割れてしまうので工事に向かない季節なのだが、春になって一気に工事が増えた。壊れた建物の復旧と言うよりは、何もないところに新しいビルがどんどん建っていく感じ。
　病院がかなり変わってきた。はじめは、ＤＢと比べてあまりの汚さにびっくり仰天したのだが、ＮＧＯやＷＨＯがサポートに入り、日本のＪＩＣＡも手伝って、かなり病院の環境は改善された。家族の付き添いを廃止し、面会時間を設けたことで、病院内の生活が保たれやすくなったようだ。開けっぴろげになっていた診察室にちゃんとカーテンがついて、患者のプライバシーにまで配慮するようになったのは、大きな変化だと思う。患者がまるでもののように扱われていたのに比べるとえらい違いだ。
　交通渋滞と大気汚染の対策なのかどうなのかわからないけど、日本から寄付されたきれいなバスが走り始めた。あちらこちらに見える、青いバス停の標識。日本の旗はつけなくても言いと思ったけど、とにかくどこの国も、それをしたのが自分の国だというアピールをしていて、なんだか良くわかんないけど、どうでも良いことのような気がする。
「日本ってお金があるんだね。」
なんてちょっといやみっぽく言われたりして。交通渋滞の緩和になったかどうかはわからないけど、今にも壊れそうなバスに、満員以上の人が乗っていくようなことは減ってきたから、安全の面では効果があったのかなと思う。
　いろいろと復興が進んでいるかのように見えるのだが、人々の生活自体はあまり変化はな

いようだった。ただ、選挙が近づくにつれて、街を走る戦車の数は増加し、セキュリティチェックが厳しくなっていた。空港での出国手続きも、はじめに着たときと、休暇に出たときと、フランスに帰るとき、では手続きの仕方が変わっていた。

細かいことはいろいろ変わっているけど、大まかにはあまり変わっていないって事かな。そう言えばおかしかったのは、私がトルコから帰ってきたときに、信号機が復活していたこと！が、しかし誰も守っちゃいないの。うちのドライバーさんが赤い標識に気がついて、止まったら、

「こいこい。」

と警察は手招きする。あれ、信号が赤やでーと指差すと

「あー、そっかそっか。」

と笑っていた。警察も信号のこと忘れていたのだ。

「おいおいー、大丈夫かよー。」

なんてみんなで突っ込みをいれたものだ。

物が作られれば、それは単純に復興が進んでいると見られるから楽だろうが、実際復興のペースがどうとか全くわからない。言えるのは、人々の生活は大して変わっていないということなのだ。カブールと周辺地域の生活の差はだんだんと大きくなるばかりだ。カブールの市内にいると、本当になんでも見つかる。最近では携帯ショップがかなり拡大してきて、日本でも見たことがないような小さなサイズの携帯電話が、富裕層を中心に売れている。１台買うのに１００ドル以上するのに、売れているんだからすごい。こちらの携帯電話はすべてがプリペイド式の携帯電話である。仕事で必要な人もいるだろうが、普通にいつでもお話ができるから持っている人も少なくなかった。うちのオフィスではコーディネーション以外携帯は持っていなかったのに、働いているスタッフはみんな携帯を持っていた。しかも、会議中に電源を切るというマナーはないものだから、会議中でも平気で席を立つ。話し合い中でも、話を中断して電話に出てしまう。オフィスでスタッフ全員集めて話し合いをしたときに、新しく来ていたアドミが

「携帯電話には電源ボタンがあるのを知ってるか。ここを押すだけで電源は切れる。会議中は電源を切るように。」

とすごくいやみっぽく言って、大ヒンシュクをかったことがあったが、あまりのマナーの悪さには私もびっくりしていた。大病院に行っても、話し合い中にディレクターの携帯が鳴ってそのまま話が中断と言うこともあった。

あとは、電化製品。テレビは裕福な人のいわばステータスで、しかもアフガニスタンには国営放送一局しかないので、衛星テレビをつけるというのがはやりだ。あるスタッフの家に招待されたときに、大きなテレビのある部屋に通されて

「テレビを見ますか？」

と点けられたときはびっくりした。お客さんのいるときにテレビつけなくても、と思うけど、テレビを見せると言うのは、ものすごく贅沢なおもてなしの方法なんだと知った。普通の人は衛星テレビなんて買えないもの。日本の戦後、電化製品が出始めたころに、近所のテレビを持っている人の所に見に行っていたというのと同じようなものだ。だから、彼は自慢げだったんだな。電気は夜中には消えちゃうし、昼間は使えない。電気さえ使えない地域があるのと比べると、富裕層の生活は格段に違う。同じアフガニスタンにいて、同じアフガン人とは思えない。この先発展とか復興とかいう形で豊かになる生活と言うのは、消してテレビを見れる生活にあるとは思えないんだけど。ＤＶＤやＣＤもたくさん店に入荷されるようになり、お店も増

えた。ほとんどがパキスタンからのものだった。
　私がアフガンに着いた時は、ロヤジルガが開催され、セキュリティの問題から学校は休校になっていたが、6月の選挙は延期になったと発表され、3月から学校も再開され、子供達の元気な声を聞くようになった。どこに行っても学生たちは積極的に話し掛けてくる。一人でこっそりオフィスの裏のバザールに文房具を買いに行ったときも、小学生くらいの女の子達が、きゃっきゃと英語で話し掛けてきた。カブールでは学校によっては小学校くらいの年齢から英語の授業があって、ちゃんと話ができるんだからおどろく。子供達は学校で学べることがとてもうれしいようだった。
　アフガニスタンの足元は、まだ安定していない。カブールでは一応に保たれているように見える安全も、いつ崩れるかも知れない。最低限人々が生命の危険にさらされないように、安定して今後発展していけると良いけれど。戦車がガンガン走って、銃をもって見張っている平和というのは、非常に危ういものなのだ。

（15）ピクニック

　春になったらピクニックに行こう！とアフガンスタッフはいつも言っていた。
「去年はたくさんピクニックに行ったんだよ、夏は川のあるところでみんなで水遊びもしたし、すごく楽しかったよ。」
と聞いていたので、私も早く春にならないかナーと思っていた。しかし、そんなのんきなことを言っていられる状況でもなくなってきていて、どうもあちこちで事件が起きていて、ピクニックに関してもなかなかＯＫが出なかった。5月になってやっとピクニックに行こう！と言うことになり、オフィスから４０分くらいの湖の近くに行くことになった。
　ここのスタッフは十年選手もいるくらい、ベテランさんぞろいなんだけど、このピクニックの準備も本当にあまりの手際の良さに目を見張った。料理用の水をコンテナーで準備して、食事係は早めに現地入りして、食事の準備。ビニルシートにマットレス。とにかく準備がいいのだ。余裕のあるミッションだからできるんだろうなと思うけど、これはほんとうにオフィスのみんなが楽しめるイベントなのだ。残念なことに女性スタッフは家の用事やら学校やらで参加できなかったけど、ほかのスタッフはみんな参加で楽しく過ごすことができた。
　湖といっても、なにやら貯水池のような感じの所だ。一応遊覧船みたいなものがあって、他にもピクニックに来ていた家族が乗っていた。ここ数年の雨の少なさで、湖の水位は以前の半分くらいになっているんじゃないかという話しだった。どこに行っても水不足の兆候を目にする。
　ご飯を食べているときに「バーン」とどこかで爆発する音がして、驚いていたけど
「多分地雷撤去しているんだよ。」
とスタッフは言っていた。当たり前の話しだけど、どこにいても緊張を強いられるのは厳しいものだ。それでもアフガンの人達は楽しみを見つけていくんだから、本当にすごいと思う。食事のあと、ある人達は賭けトランプに興じ、またある人達はピンポン玉でバトミントン（？）をし、別のグループはバレーボールで遊び、またある人たちは大きな石をどこまで飛ばせるかというかなり原始的なゲームに夢中になり、そして、私とカリンはおなか一杯でお昼寝する、というそれぞれの楽しい昼下がりを過ごしたのでした。

（16）ストリートの子供達

　買い物に出ると、チキンストリートはいつも外国人ボランティアでにぎわっていた。絨毯屋に、アメリカで起きた同時多発テロをモチーフ

にした絨毯が織られてあって、唖然とした。それが、自分達の国の空爆につながったのに、絨毯に織って、アメリカの旗を織り込んであるのだ。どう言う気持ちでこれを作ったんだろう。同時多発テロに賛同している人なのか、忘れてはいけない出来事としてなのか、大して意味はないのか、なんだか複雑な思いでその絨毯を眺めた。買う人なんているのかしら。こんなの喜んで買う人がいたらそれこそ恐ろしいことのような気がする。

　チキンストリートにはたくさんのストリートチルドレンもいる。外国人と見るや必ずわっと集まって何かを売ろうとする。なかには何も売らずにお金をせびる子供もいる。私はあの辺りの通りが好きじゃない。良心の呵責にさいなまれる場所だから。お金があるだろうと思われて、しつこくついて回られるのもたまらないし、お金をただ上げるなんてしていたら、きりがないし、それが良いことなのかどうなのかもわからないから。子供達は慣れたもので、必ず新聞とかアフガニスタンについて書かれた本を持っている。外国人が買いそうなものをいつも売り歩いている。雑誌とか何度か行くと毎回同じ子供にであう。私がはじめて本を買った男の子は、そのあと私を見かけるたびに

「マダム！」

と声をかけ、

「おれたち友達なんだぜ。」

と他の子達に言いながら、肩を抱いてきた。

　彼について詳しくは知らないが、こういったストリートチルドレンに新聞などを提供し、それを売って生活の足しにするのを助けているＮＧＯがあって、そこから新聞を安く仕入れていると言うことだった。はじめに彼に会ったときは、普通の目がきらきらした子だった。なんどか出会うことはあったのだけど、４ヶ月くらい経ったときに久しぶりに出会って驚いた。以前はかぶっていなかった野球帽をかぶっていた。あれ、と思って良く観ると髪の毛がごっそりと抜けていたのだ。ストレス？栄養失調？

「ねえ、ちゃんと食べてる？頭どうしたの？」

「なんでもないよ、気にしないで。それより、本買ってよ。今日のご飯買う金がないんだ。」

よくよく見ると、目は血走っている。

「そうね、新聞ある？本はほとんど持っているから。」

「あるよ、じゃ、これ。５０アフガニーね。」

５０アフガニーは薄っぺらい新聞には安くないけど、いつも同じ様に買う。彼はこんな生活を長く続けていて、なんだか体も疲れているようだったし、時々話すときの興奮した様子から、なにかヤクでも使っているのかしらと思うこともあった。同僚がＤＶＤを買うのに付き合って、店に入ってなんとなくボーっと観ていたら、ひさみさんが

「ちょとたまき、あれみてよ。あの子何してんの？」

と店の外で待っている彼を見ていった。彼は手をズボンの中に入れて、こっちを見ながら股間を触っていたのだ。目つきが怪しい。彼の年齢は１４・１５歳くらいかなと思う。目があうと、べーっと舌を出して奇声を上げていた。

　アフガニスタンにも、ヤクってあるらしいけど、彼もやっているんだろうか。詳しくは知らない。でも、薬におぼれて働かなくなった夫を抱えた女性に会ったことがある。ストリートの子供達はこうした誘惑にいつもさらされている。安定しない生活、収入、大人だって憂鬱になるような世の中で、自分達に十分な愛情を与える余裕のない両親に育てられていたり、親がいなかったりして、厳しい生活にさらされている子供がたくさんいる。胸が痛む。自分は本当に無力で、全部を助けるなんてできない。でも時々多くの人を助けることができるクリニックの仕事と、一人の人を助ける仕事に違いがあ

るのかと思う。同じくらい大切なんじゃないかと思う。彼のことが心配でも何もできなのだ。彼だけじゃない、本当に多くの子供が生活のために、ストリートに出る。ぼろぼろの服を着て、道路に横たわっている子供もいる。

そんな子供達を狙った誘拐事件も多発していた。5月ごろ子供の誘拐事件が何件か起こっていた。DB近くで発見された子供の死体の目玉がくりぬかれていたという話もあった。恐ろしい話、こういう子供達を誘拐し、臓器の密売を行っている組織があるのではという話だった。子供は保護され、大切にされるべき存在だと思うけど、ここではそうはいかないのだ。すべてがNGOの活動に頼っていて、その活動にも限りがある。子供のためのNGOで働いている女性スタッフが

「アフガニスタンの子供の置かれている状況は最悪よ。」

といった。

「戦争で多くの女性が夫を失った。その後仕事があるわけでも、援助があるわけでもない。道に出て物乞いをする気力があれが良いほうで、本当に多くの女性が生きる気力を失っている。そんな母親が子供に十分な愛情を注げるはずもなく、子供は家庭においても無関心の犠牲になる。道に出て物乞いをすれば、警察官に殴られることもしばしは。絨毯織りの仕事は、休みなく長時間にわたって強要されて肩や腰の痛みを訴える子供が多い。暴力を振るわれても、それを罰する社会的風潮はないから、そのまま。本当に子供達は、この社会の犠牲者になっている。いろいろなシステムや国の建て直しが行われている中で、子供の権利に関することが一番後回しにされている。」

と、憤慨していた。

日本でも幼児の虐待などニュースで目にするが、アフガニスタンではニュースにもならない。そこまで無視された状況なのだ。ストリートで会う子供達とは反対に、学校に通っている子供達の生き生きとしていること。

いろいろな状況の子供達を見た。ストリートの子供、裕福な家庭の子供、難民の子供、農村に住む子供。それぞれおかれた状況は違うが、みんながこれからアフガニスタンの将来を担う存在になっていくのだ。厳しい状況におかれながらも、交わす会話の中で、彼らは希望を失っていないことに安堵する。あるNGOの施設で、勉強をしていた男の子は

「将来はお金を稼いでお母さんを楽させてあげる。」

と笑顔で答えてくれた。

（17）アフガニスタンを去る日

私の任期終了の日が迫ってきた。終わるとなれば半年と言う任期は本当に短い。ミッションを終えたらさらっと帰っていくものだと思っていたが、ここではそうはいかず、必ずみんなを招いてパーティーをしなければならなかった。なんでも、このチームのやり方なんだそうだが、ボランティア自身がお金を出して他のスタッフを招待すると言う感じだ。私の前に帰ったフィルコが、みんなに何も知らせずに帰ってしまったというのがあったので、私はずいぶん前から

「たまき、絶対にお別れパーティー開いてくれなきゃだめよ。」

と、釘を刺されていた。誰かがその地を去るときは、旅の安全とこれからの人生の成功を祈りたいと言う。私はみんなに、一人一人にお礼を言いたかったのもあり、みんなに事前にパーティーを開くよと伝えていた。

いろいろあったが、こんなに恵まれた環境で仕事をするとは思っていなかったので、拍子抜けした部分もあるといっていい。他のミッションのビデオを見たりして、自分達の生活自体も、

ものすごく過酷になることを覚悟していたので、発電機で電気が使えるとか、水がちゃんと出るとか、そう言う基本的な部分で不便を感じなかったところに恵まれているなあと感じたものだ。休みに買い物に行くとか、カブールではないものはない位の状況で、自分の思っていたよりもずいぶん優雅な生活だなと思ったのも事実だ。そういう生活環境が、逆に心苦しく思えたりしたものだ。それに十年以上にわたって、援助を続けているので、プロジェクトを運営するという仕事に関して、アフガンスタッフが十分に育っていたというのがあるだろう。ＭＳＦのやり方を覚え十年間ＭＳＦで働いていると言う人がとても多かったのだ。保健省でも、以前ＭＳＦで働いていたドクターが責任のある立場で働いていた。私なんていなくってもなあと思うことも何度かあったが、国として安定していないので、ＭＳＦもその地を去れないという感じだった。

他のミッションと比べるのは難しいが、アフガニスタンで一番難しいのは、政権が安定しておらず、せっかく築き上げたものが1夜で破壊されうるということではないかと思う。いろいろな省庁や、他のＮＧＯとのミーティング。自分達だけで、かってに動けない状況というのも、恐らくはかなり違っていた点だったのではないかと思われる。いろいろなことに巻きこまれてＮＧＯは働いているんだと言うことを学ぶことができて、ラッキーだった。

今回私は、本当にたくさんのことを学ばせてもらった。パーティーで

「たまきはアフガンスタッフの気持ちを理解し、ともに働いてくれた。」

といわれたが、どのくらい理解できたかわからない。ただ、自分の世界だけを押し付けないコミュニケーションと言うものを学んだと思う。自分達の持っているものだけが正しいと思うのは、危険だということも感じた。話し合いをする中で、本当に必要なものが見えてくるし、現場からも良い意見が出てくるのだ。それにちゃんと耳を傾けて、

「それ、ナイスアイデアだねえ。」

ってやっていくのが、普通のやり方なんだよなあと思った。私達は、短期間で派遣されたボランティアに過ぎない。時間がくれば帰っていく他所者である。それを受け入れて、その都度変わる方針にもついてきていた現地のスタッフに、本当に頭が下がる思いだ。彼らは本当に懐の広い人たちなんだ。

ここで得たものは、出会い。いろんな人に出会えたことが一番大きかった。同じボランティアでも、みな違うポリシーを持っていたし、ぶつかることもあった。でも、毎日生活をともにし、語り合う中で築いていった信頼関係は大きい。

アフガニスタンの人々は、あんなに厳しい環境に置かれていても、まだ旅人をもてなすことを忘れなかった。何度もお茶に呼ばれたこと、ここに座れと椅子を譲ってくれたこと、ここで活動してくれて本当にありがとうといってくれたこと、あまりにもおしゃれに無頓着だからと口紅をくれたこと、すべてが私を励ましてくれた。

「たまきはまた、ちゃんとアフガニスタンに戻って来るんだよ。仕事でも、旅行でも。」

「いい人を見つけて、早く結婚するんだよ。」

「絶対に忘れないで。」

そんな暖かい言葉に包まれて、本当にまた戻ってきますから、と心の底から思った。この経験は本当に貴重なもので、私がここで終わらせてしまったら、それこそただの自己満足なんだろう。何かの形でアフガニスタンに関わっていきたい。それは、私がたくさん与えてもらった事へのお返しなのだ。

続ける事は難しい。でも、続けていきたい。

アフガニスタンで、いろいろな国のＮＧＯを見てきた。国連の組織も見てきた。そのどれも、組織が大きくなればなるほど、実態が見えなくなっていくように感じた。自分は多分、ずっと現場で現地の人と行動をともにする仕事をしていくだろうと思う。デスクにいて、フィールドからの報告を聞いてプロジェクトを組み立てていくと言う仕事は私には向いていない。立てた計画を遂行するのに、どれだけ現地のスタッフと話し合いをしていかないといけないか、身をもって体験した。大変な仕事だったが、そういう仕事が本当に楽しかった。今回の仕事は、私にとって初めての海外での仕事だったけれど、、いろいろな課題を私に与えてくれた。医療者として、指導をすることとその評価方法、実際に医療にかかることができずにいる人達への援助、本当にそこで何が必要なのか見極める能力、などである。今回の活動のフィードバックをしないと次に続いていかないだろう。楽しかったで、終わってしまっては、あまりに表面的で、そのまま次にまた出かけて行くことには不安を覚えるのである。

終わりに

私がアフガニスタンを発った日、実は大変なことがおきていた。ヘラート近郊で活動しているＭＳＦオランダの車が、待ち伏せをされて襲撃をうけ、５人が殺害されたのである。パリについたその足でコンピュータールームにいき、メールを開いたら一番にそのニュースが飛び込んできたのだった。ＭＳＦが攻撃を受けるなんて。軍隊、政府には一切関わりを持たず、独立、中立、公平の立場で活動してきた団体である。この事件を受け、ＭＳＦはすべての外国人スタッフを撤退させ、アフガニスタン国内のプロジェクトの中止、延期を余儀なくされた。（最終的にはアフガンからの全面撤退を決定した。）心が痛むのは、職を失ったＭＳＦのナショナルスタッフと、ＭＳＦに医療援助を頼っていた貧しい人々のことである。行っていた援助を、突然止めてしまうと言うのは、本当に良いやり方なのか？この決定をするまでに、ＭＳＦのほかのセクションも、かなり話し合いをしたようだが、クリニックを攻撃されたら住民も巻き添えになるということを考えると、撤退もやむなしということなのか。

私は日本に帰ってきたので、日本の仲間がアフガニスタンにまだ残留している時は

「早く帰ってきて。」

と思っていた。それは彼らを送り出していた家族も同じ思いだったろう。ＭＳＦは危険地帯に向かっていくといわれるが、今回の事件は他のＮＧＯにも大きなショックを与えていた。一夜にして積み重ねていたものが破壊されると言う最悪の状況になった。ひとつの事件によって、ＭＳＦに頼ってきていた人達は支えを失ってしまった。戦いは何も生まないし、誰も幸せにならない。どうして、こうやって攻撃を受けて人が死なないといけないのか、私にはわからない。戦争は無意味だ。どんな大儀名文があっても、無意味だ。だれも幸せにならない。

人間の命はけして平等ではないと、活動に参加してしみじみ思った。ただ、それは自分の持っている世界と比較した場合のことだが。先進国では助かる人が、紛争地では助からない。でも、本当は人間の命は平等なんだと思いたい。ただ、平等にできない状況を人が作り出している。多くの人々は人災の被害者になっているのだ。政治的なやりとりに振り回されて、人間としての尊厳さえもない状況に追いやられている。

今こうしている間にも、世界中で紛争は起きていて、それをとめることができない。悲しい

現実である。私はそういうところに、また行くんだろうなと思っている。何かが急に良くなるなんてありえないけれど、ただ、そこにいて、自分がすべきことをする。そう言う単純なことを、繰り返して行くことが大切なんだろう。きっと、戦争のない世の中なんて存在しないだろう。戦争を回避できない無能な政治家は多いし、人は戦争と言う手段を知ってしまっているからだ。でも、いつか戦争のない世の中になるかも知れないという期待を抱きながら淡々とそこに居る事に意義を見出していきたいと思っている。

今回この文章をインターネットにのせることを進めてくださり、文章構成など多大な協力を下さった長崎大学熱帯医学研究所の中澤秀介先生にとても感謝しています。ありがとうございました。

２００４年８月　　波多野　環